

南三陸町・沢内板碑群  
石塔婆造立の場

室町期の大規模な十三仏

著者	田中 則和
雑誌名	東北学院大学東北文化研究所紀要
号	52
ページ	39-116
発行年	2020-12-25
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1204/00024522/">http://id.nii.ac.jp/1204/00024522/</a>

## 南三陸町・沢内板碑群

——室町期の大規模な十三仏石塔婆造立の場——

田 中 則 和

### はじめに

私は、2011年3月11日の東日本大震災発生を契機に、三陸地方南部（主に南三陸町以南松島町域）の中世考古学的研究を志している。この地域の中で南三陸町の沢内（さうち）板碑群については同地域内陸の大規模な板碑群として著名であり、佐藤正助氏の『志津川物語』（1985）、志津川町教育委員会刊行の『志津川町史Ⅲ 歴史の標』（1999）などで紹介され<sup>1</sup>、現地には説明板がたっている（134図）。しかし、個々の板碑の正確な図がないなど現在の学問的水準からすれば情報不足であり、板碑の劣化も進んでいることから新たな現況調査が急務であった。

このたび、七海雅人氏（東北学院大教授）代表「東北太平洋沿岸地域の歴史学・考古学的総合研究 科学研究費補助金基盤研究（B）」の助成を得たので2019年11月25日より2020年1月9日にかけて現況調査を行った。土地所有者の西城正記氏の快諾をいただき除草・伐採から始め、板碑の清掃・観察カード、3D画像作成用などの写真を作成した。その過程で背後の斜面に原位置を大きくは変更していない板碑群を発見した。その後も現況調査を続け、2020年9月28日までに板碑107基、板碑の可能性あるもの88基を確認した。合計195基である。清掃中に顔を出す板碑状の石は多く、板碑はさらに数十基あるのではないかと想定される。推定約200基前後、室町期における三陸沿岸部最大の板碑群と考えられる。

記録方法について永見秀徳氏（九州文化財計測支援集団代表）、板碑については七海雅人氏、野口達郎氏、畠山篤雄氏、水澤幸一氏に種々のご教示、ご支援をいただいたことを厚く謝する。南三陸町教育委員会（担当：大内望咲氏）には随時報告し、調査方法については現地で打ち合わせをした。室町期の文献史料が皆無である本地域の歴史解明の基礎資料となれば幸いである。

以下、A. B. C区の個別の板碑及び新発見のD区（斜面）とその板碑などについて、述べるが、紙数の関係で、板碑の説明文は体言止めを多用し、簡潔を旨としたので読みにくい点をお詫びしたい。

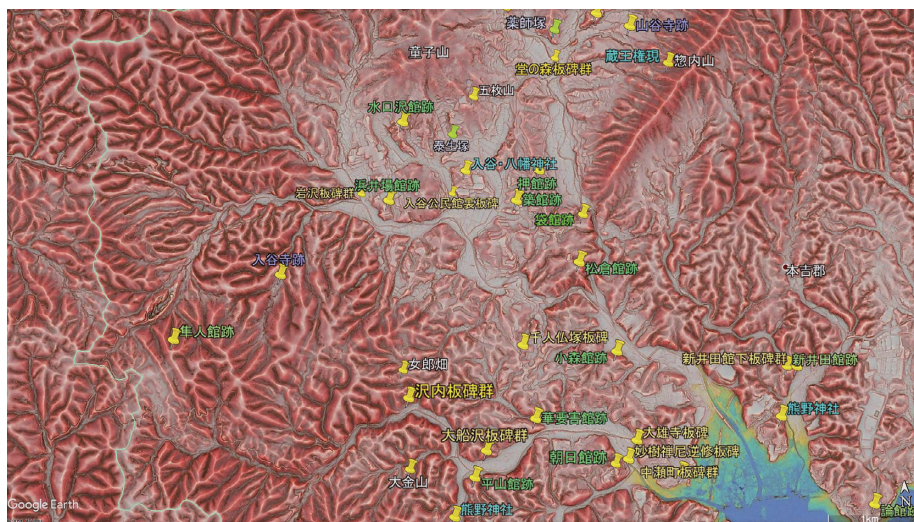
### 1 位置

沢内板碑群の評価については「室町期の応永年間に小型板碑による板碑群の造営が顕著に開始される。紀年銘としては応永10年（1403）以



1図 沢内板碑群の位置（下図は国土地理院地図）





2図 沢内板碑群周辺関連遺跡と地形

(2011年作成赤色立体地図 谷口宏充氏提供・アジア航測株式会社作成 グーグルアースで表示)

降、海岸から約3.5km 内陸の山間部入口にあたる寺院伝承地、大船沢沢内（標高60m前後）に立てられた小型板碑群（推定100基以上）が代表的なものである。種子だけのものが多く、銘文のあるものは稚拙な彫りであり、造立階層の下位移行と造板碑技術体系の低下を示している」とした<sup>2</sup>。弘安6（1283）年に戸倉波伝谷に立てられた板碑から120年後に形成が始まった南三陸町最多の板碑群であり、室町期単独の板碑群としては三陸地方最大の板碑群である。

## 2 立地

志津川湾に注ぐ水尻川の河口を遡って約48km、登米に至る道が山中に入る手前の狭い緩傾斜地に立地する。標高は約56m～58m（A. B. C区）である。水尻川流域は、大規模な平山城跡である朝日館跡をはじめ中世遺跡が集中し、「志津川のルーツ」といわれる<sup>3</sup>。沢内板碑群の東南約0.9kmにはほぼ同時期の大船沢板碑群、東北方約1.3kmに金採掘事故供養伝承のある信倉千人塚の大型板碑、東方約1.3kmに戦国期の華要害館跡、大船沢板碑群の向かいには戦国期の平山館跡がある。また、時代不詳であるが金採掘地と伝承される大金山が沢内板碑群のほぼ真南

約0.7kmに、同じく金採掘関連伝承地の「女郎畑」が北方約0.4km付近に所在する<sup>4</sup>。

### 3 調査範囲と地区名称

今回、報告する範囲と地区名称は3～6図のA・B区(1975年にコンクリート固定して整備)とC区(周囲に倒れていたものを集め、山際に立て直しされたものと伝えられる)及び新発見のD区である(後述)。

#### 4 斜面部の板碑群（D区）の発見

斜面裾に集め、立てられたC区の板碑群の広がりを確認するため斜面を除草・伐採したところ、多数の板碑及び板碑の可能性のある板状の石を確認した。傾斜角度は23度から33度。標高は約58mから65m（地理院地図などとの照合によるが誤差がある）。集中範囲は裾部（C区）と連続しており、概ね12m四方である。多くは倒伏しているが、最上段部のように現在も立っているものもあり、板碑造立の原位置を大きく移動していない貴重な区域と考え、南三陸町教育委員会、土地所有者に報告し、対応を協議した。D区と名付け、表面に露出しているものは



3図 沢内板碑群現地調査対象区

(3D画像: 写真665枚からMetashape(スタンダード版 Agisoft社)で作成、Cloud Compare(フリーソフト)でスケールを付加 田中則和 2020.9)

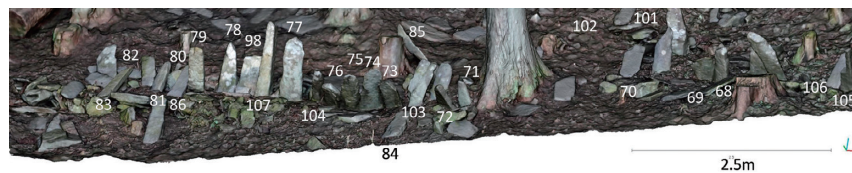


4図 沢内板碑群A区3D画像

(九州文化財計測支援集団(CMAQ)作成)



5図 沢内板碑群B区3D画像

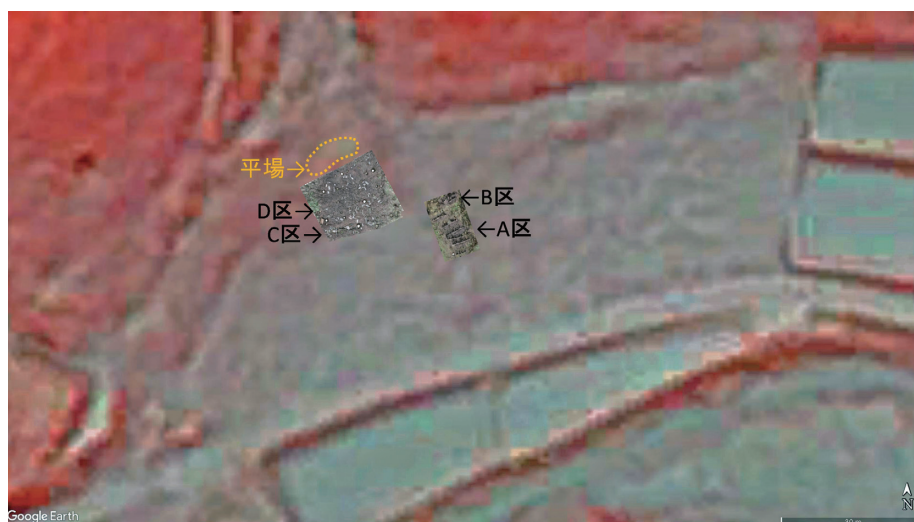


6図 沢内板碑群C区3D画像

まず、約630枚の写真を基に8図の3D画像図を作成した。その上で可能なものは裏返して観察の上、もとに戻したが、斜面のためずり下

がってしまったものがある。C区の板碑群は斜面(D区)に立っていた板碑群に由来するものと考えている。





7図 D区（斜面部）とA～C区の概略位置  
（ベースは谷口宏充氏提供・アジア航測(株)作成赤色立体地図をグーグルアースで表示）



8図 斜面の板碑分布（C, D区）3D画像  
（写真約630枚Metashape、Cloud Compareで作成）

## 5 板碑

板碑No.1（A区 コンクリート固定）

地上高77.3cm、幅43.5cm、厚さ8.5cm（側面）である。石材は頁岩？。碑面は長方形。ほぼ完

形であるが碑面の中央部が剥落している。自然石を採取し、背面からの剥離加工によって頭部を作り出し、片側の側面を剥離加工して整形したと考える。碑面には縦位を主とした擦痕が多数あり、削り整形（広義の研磨）されていると考えられる。種子は、タラーク（虚空蔵菩薩 三十

三回忌主尊)、薬研彫である。種子の高さ80mm、幅85mm、深さ3.6mmであり、南北朝期の板碑の全体構成からみると小さい印象を受ける。下部の右行に「アビラウンケン」(胎蔵大日真言・大日報身真言)、左行に「キャカラバア」(五大種子)を刻む。以下、板碑図版は原則としてMetashape、Cloud Compareで作成した3Dソリッド画像<sup>5</sup>(色情報を排除し、凹凸で表す歪みのない画像)と写真により構成する。展開図の配置は9図参照。

#### 板碑No.2 (A区 コンクリート固定)

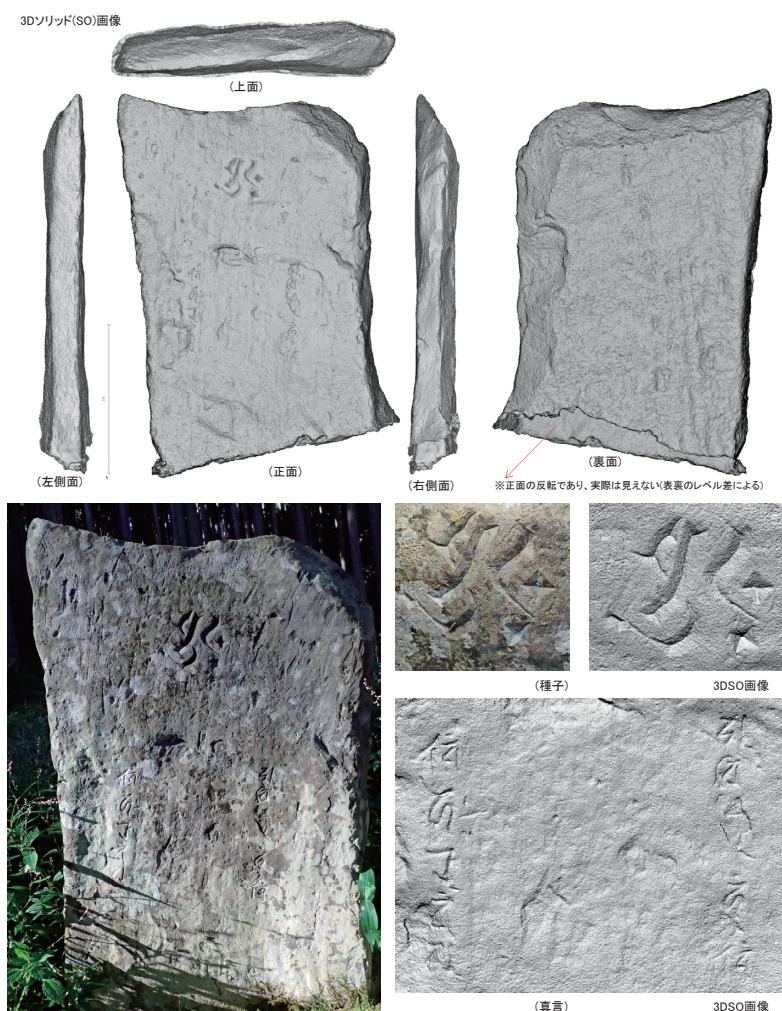
地上高82.5cm、幅31cm、厚さ9.5cm。石材は

頁岩?。碑面は逆U字形、頭部はアーチ形。ほぼ完形。板状の円礫を採取し、頭部を細かく剥離加工して整形。碑面は研磨している可能性もある。

種子はバーンク(五点具足 金剛界大日如来十三回忌もしくは二十七回忌主尊)で薬研彫。空点と莊嚴点が一体となり、渦状を呈する。命点あり。全体が曲線的である。種子の高さ145mm、幅155mm、深さ3.7mm。

#### 板碑No.3 (A区 コンクリート固定)

地上高59.5cm、幅31cm、厚さ5.5cm。石材は頁岩?。碑面は長台形(塔形)、頭部は台形。

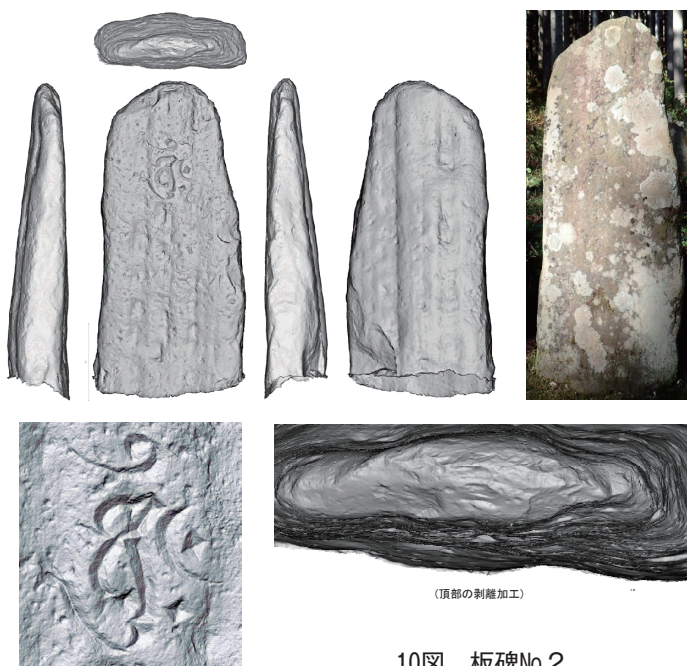


9図 板碑No.1



ほぼ完形だが碑面の下半剥落。塔形の自然石を採取し、一面を剥離し、裏面とする。背面の頭部右に剥離加工し、背面の左端、連続剥離加工。碑面は種子の右側に斜め方向のランダムな擦痕跡があり、研磨されている。

種子はサ（観音菩薩 百か日忌主尊）。下端剥落。薬研彫を模倣しているが命点もなく、彫法は稚拙で底面平坦に近い。種子は左に寄って見えるが平坦な碑面の中央にある。種子の高85mm、幅110mm、深さ1.2mm。左側面上部に線状くぼみが等間隔に近く、五本ついている。その下部にも線状のくぼみが一本認められる。作業痕跡の可能性もある。



10図 板碑No.2

#### 板碑No.4

(A区 コンクリート固定)

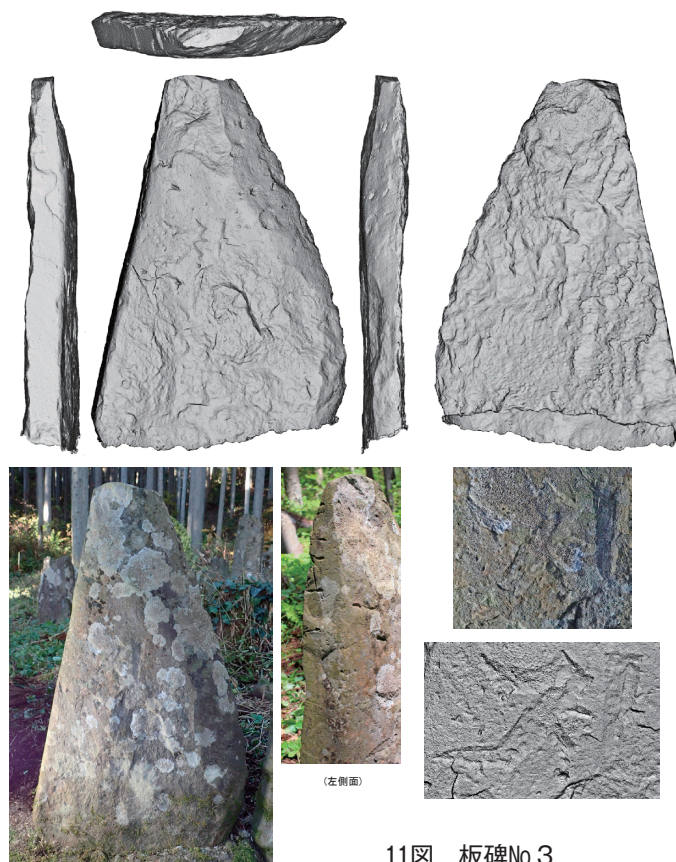
地上高35.0cm、幅18.0cm、厚さ6.5cm。石材は頁岩？。碑面は逆U字形、頭部はアーチ形。完形。板状の小型自然石を採取、頭部を剥離加工して整形。種子周辺は周囲より平滑であり、擦痕も認められるので研磨しているとみられる。

種子はカ（地藏菩薩 五七日主尊）。薬研彫を意図しているが削痕の方向は不整で浅い。種子の高さ78mm、幅43mm、深さ1mm。

#### 板碑No.5

(A区 コンクリート固定)

地上高63.5cm（残存高）、幅24.0cm（最大碑面）、厚さ



11図 板碑No.3





12図 板碑No.4



13図 板碑No.5

5.5cm (右側面)。石材は頁岩?。完形に近いが、頭部欠損。碑面は頭部に欠損があり、両側面は直立に近い。下半右は破損多く、下半左は剥落。板状の自然石を採取、碑面側から見えない左側辺を割り成形 (右側辺は節理面)。大半が欠損した頭部下辺に剥離加工痕跡の一部残る。背面右側辺剥離加工。種子周辺は平滑に近いので、研磨している可能性。

種子はアーク (五点具足 胎藏界大日如来 ※先祖代々・年回忌以外主尊または十七回忌 (青木恭光説『十三仏の世界』)『真言宗回忌法要次第』)。薬研彫であるが、空点と莊嚴点が接続して渦状を呈し、命点は不明瞭であり、三及び四・五画は特異な形態を示す。大振りで曲線的な特異な形態のアーク種子である。種子の高さ175mm、幅120mm、深さ1.5mm。

板碑No.6 (A区 コンクリート固定)

地上高61.2cm (残存高)、幅30.5cm (最大碑

面)、厚さ17.0cm (右側面)。石材は頁岩?。碑面は左側面がふくらんだ直角三角形。ほぼ完形だが、碑面右側下半剥落。自然石を採取し、背面に下から大きな剥離を入れ、右側面下部に連続して細かな剥離加工を行い整形、種子周辺は、石目が消えていることから、研磨されているとみられる。

種子はバイ (薬師如来 七七日主尊)。アイ点のワラビ形点が右斜め下にのび、末端に三角形が彫られている。薬研彫だが浅い。種子の高さ125mm、幅145mm、深さ3.7mm。

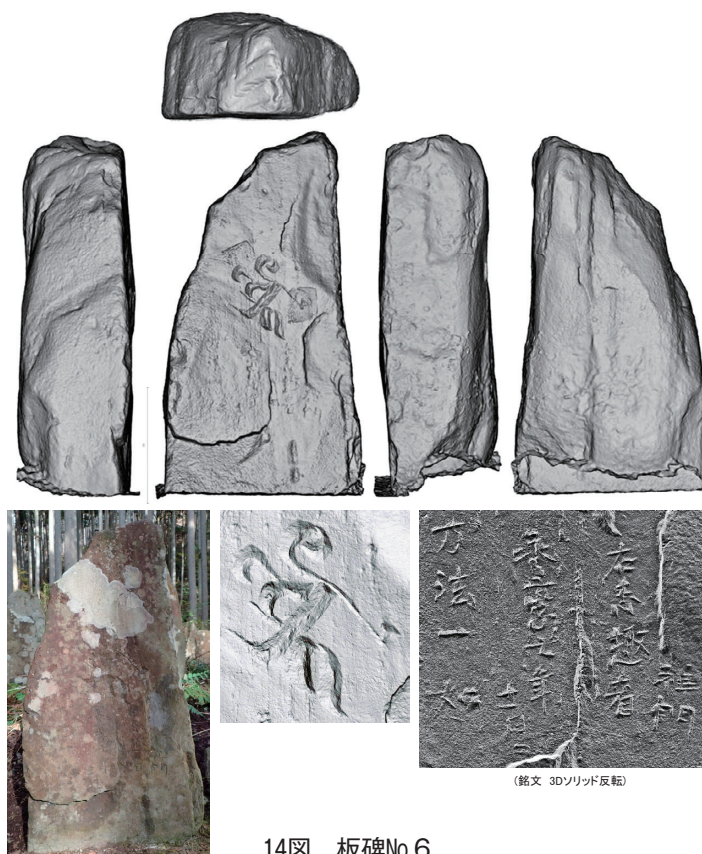
偈と願文が同一レベルに配置。左から下部左端に「万法一如」/ (改行記号。以下同じ)「十一月日/永享七年」/「右志趣者」/「■■■禪門」(■■■は剥落)。「■■■禪門」の軸線は他行と異なっている。偈「万法一如」に紀年銘、永享7 (1435) 年が伴う点で重要。

板碑No.7 (A区 コンクリート固定)

地上高46.3cm、幅25.0(碑面)、厚さ2.5(右側面) cm。石材は頁岩?。碑面は左側面直立 右側面外弯曲。頭部は直角三角形に近い。完形に近いが、左端上部破損。左辺下部に新しい破損。背面は情報から剥離して剥離(下部は新しい時期の欠損か)して成形、頭部は剥離加工して整形。

形。種子周辺は石目が消えているところがあり、研磨している可能性がある(自然面のゆるやかな凹凸はそのままである)。

種子はパーンク(五点具足 金剛界大日如来 十三回忌主尊もしくは二十七回忌主尊) 空点と莊嚴点は定石通り、分けている。薬研彫だが浅い。種子の高さ123mm、幅73mm、深さ1.1mm。

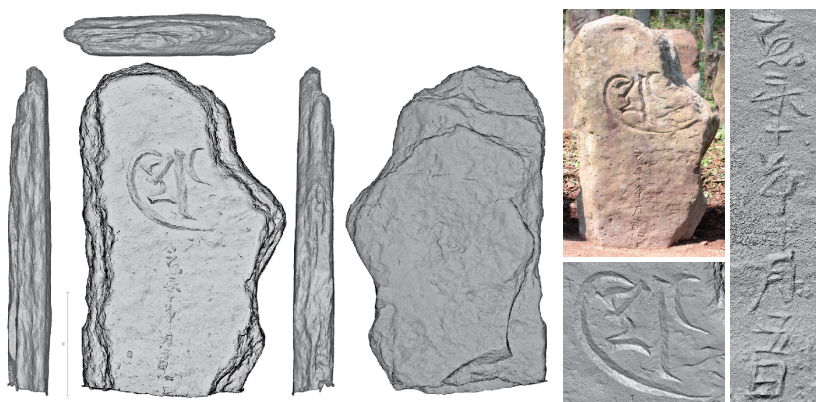


14図 板碑No.6

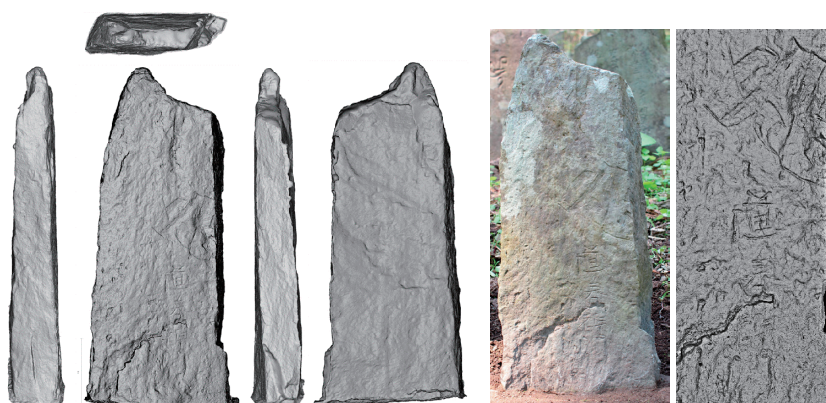


15図 板碑No.7





16図 板碑No.8



17図 板碑No.9

#### 板碑No.8 (A区 コンクリート固定)

地上高64.5cm、幅30.5、厚さ7.3cm。石材は頁岩？。碑面は左側面直立に近い。右側面不整形。頭部はアーチ形。ほぼ完形。板状の自然石を採取し、頭部を背面からの剥離加工で作し出し、碑面縁部は縁取り状に削って整形したとみられる。種子・紀年銘周辺にランダムな擦痕が認められ、碑面は平滑であり、研磨されていると考えられる。

種子は、定型ではない。マン（文殊菩薩 三七日）の莊嚴体か（No.70に近似）。不空罽索観音の種子ボであれば、オ点のはずだが、左肩にイ点が付いている。薬研彫だが浅い。しかし、イ点が見事な彫りで全体としても雄渾雄渾な印象を受け、碑面状の面積も大きい。種子の高さ160mm、幅170mm、深さ2.2mm。紀年銘があり、

種子の下方、ほぼ中心線上に「応永十年十月五日」と刻む。応永十（1403年）年は沢内板碑群最古の紀年銘。

#### 板碑No.9 (A区 コンクリート固定)

地上高50.7cm、幅17.0cm、厚さ6.0cm。石材は頁岩？。碑面は左側面直立的。頭部形は破損のため不明。右側面は節理面から破損。頭部右側は苔が取れず、十分な観察できないが欠損の可能性が高い。頭部に部分的に自然面残る（二か所）他は、全て割り面。頭部は剥離加工して整形。碑面は剥離面を研磨している可能性。

種子は、サク（勢至菩薩 一周忌主尊）種子は極めて浅い彫りで輪郭を意識した平彫化している。種子の高さ100mm、幅93mm以上、深さ0.8mm。種子の下方に「道春禅門」と刻む。

板碑No.10 (A区 コンクリート固定)

地上高91.8cm、幅21.0cm、厚さ9.6cm。石材は頁岩。碑面は両側面直立に近い。頭部は偏アーチ形。ほぼ完形。板状の礫の両面を割り、碑面側は剥落のため、不明瞭であるが、はつっている可能性あり。頭部を背面から剥離加工。両側辺の碑面角に細かな剥離加工。頭部背面の剥離も整形か。碑面は割り面をはつて整形している可能性。

種子は、ウン（阿閼如来など 阿閼は七回忌主尊）薬研彫。しっかりした彫り。種子の高さ170mm、幅80mm以上、深さ4.6mm。

種子の下に「右志趣者応永廿三(1416)年二月

日」と刻む。ぎこちない彫りで列も乱れている。

板碑No.11 (A区 コンクリート固定)

地上高56.7cm、幅18.5cm、厚さ7.0cm（右側面）。石材は砂岩？。形態は左辺直立、右辺内弯。頭部は偏アーチ形。ほぼ完形だが左側面上部の一部破損。円礫を採取し、頭部剥離加工。背面左端上部に剥離加工。種子の上左部に擦痕あり、研磨している可能性。

種子は、バイ（薬師如来 七七忌主尊）アイ点の右部はバ字の三画と四画の間に付き、渦巻状を呈する。薬研彫。しっかりした彫り。種子の高さ105mm、幅85mm以上、深さ2.5mm。



彫文(3Dソリッド反転)

18図 板碑No.10



(擦痕)

19図 板碑No.11



板碑No.12 (A区 コンクリート固定)

地上高65.0cm、幅26.5cm、厚さ10.2cm。石材は粘板岩。形態は両辺直立 上方にややすばまる。頭部は偏三角形。最下部断裂。下部剥落。自然石を割り、頭部を剥離加工(右側面に自然面残る)。

種子は、バン(金剛界大日如来 十三回忌主尊)薬研彫 彫具痕が明瞭。垂直方向への彫具移動のために輪郭に凹凸が生じている。種子の高さ124mm、幅100mm、深さ2.5mm。

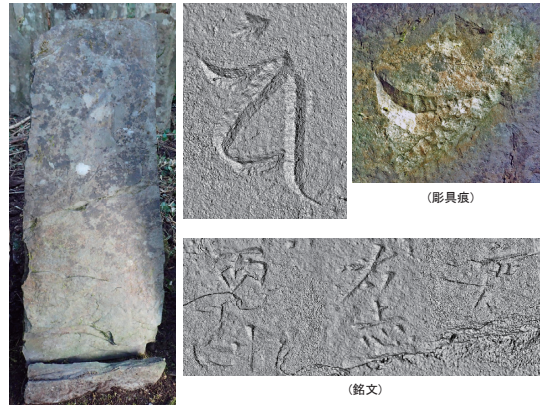
銘文が上端のみ残存。「応? / 右志 / 而」  
■』と読み、偈「応(無所住) 而(生其心)」

(『金剛般若経』) 及び中央に「右志○○」の願文と推定。

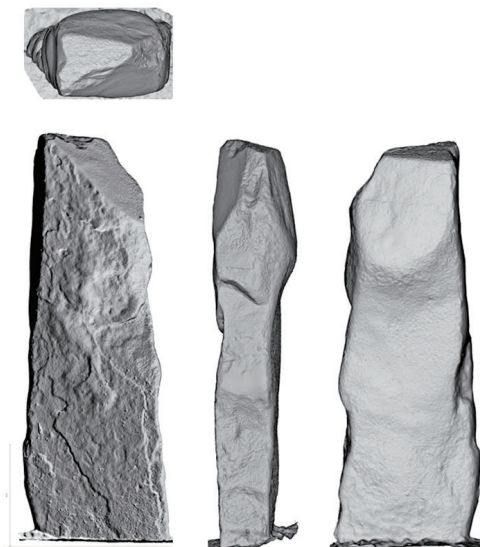
板碑No.13 (A区 コンクリート固定)

地上高58.5cm、幅11.5cm、厚さ9.5cm。石材は砂岩?。形態は両側面すばまり直立。頭部は不整台形。完形に近いが、碑面の剥落が激しい。板状の自然石を割り、割り面を碑面としたとみられる。

種子は、種子の想定個所付近が剥落しており、剥落した可能性が高い。



20図 板碑No.12



21図 板碑No.13



板碑No.14 (A区 コンクリート固定)

地上高49.0cm、幅25.5cm、厚さ5.8cm。石材は頁岩？。形態は不整逆U字形。頭部は偏アーチ形。ほぼ完形。右中央辺、左下部破損、碑面全体がトロトロしており、研磨の有無は不明。自然石（円礫）。頭部剥離加工。右側面は背面から剥離加工。種子痕跡かとみられる凹みがある。

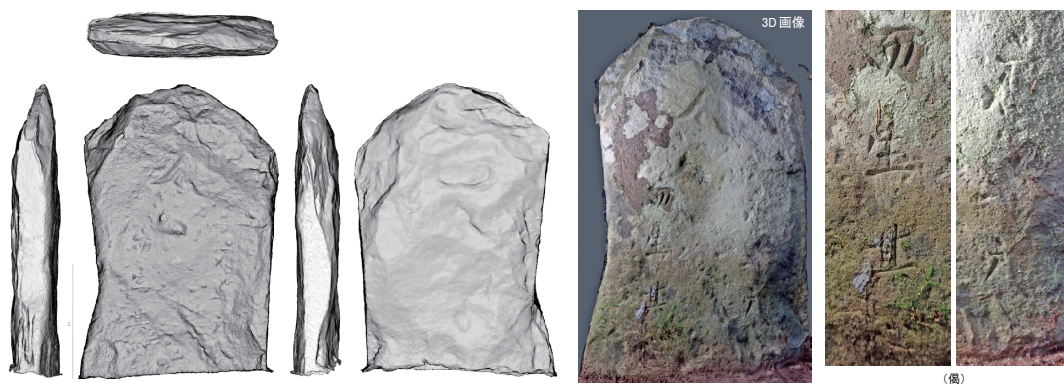
部を剥離加工して三角形を作る。両側辺の自然面を剥離加工。背面の左側の一部を剥離加工。種子はサもしくはサク。葉研彫。高さ50mm以上、幅42mm以上、深さ1.2mm。偈が確認される。右行に偈「応(無)所(住)」(( )は推定)、左行に「而生其心」(出典は『金剛般若経』)。

板碑No.16 (A区 コンクリート固定)

地上高49.0cm、幅14.0cm、厚さ6.3cm。石材は頁岩？。形態は卵塔形。頭部は不整アーチ形(平頭)。ほぼ完形だが全体的に磨滅、剥落。板状の自然石を採取、頭部剥離加工して整形とみられる。種子は確認できない。



22図 板碑No.14



23図 板碑No.15

板碑No.17 (A区 コンクリート固定)

地上高67.2cm、幅23.0cm、厚さ14.2cm。石材は頁岩。形態は両側面直立。頭部形は破損のため不明。頭部右側欠損。下半剥落。自然石の両側辺を割り(裏面は自然面、両側面は割り面、碑面も割り面)、両側辺剥離加工して整形したとみられる。種子はバイ(薬師如来 七七日主尊)。種子の高さ115mm 以上、幅50mm 以上、深さ3mm。

板碑No.18 (A区 コンクリート固定)

地上高52.5cm(残存高)、幅34.0cm、厚さ6.0cm。石材は風化した頁岩。岩層から乖離し

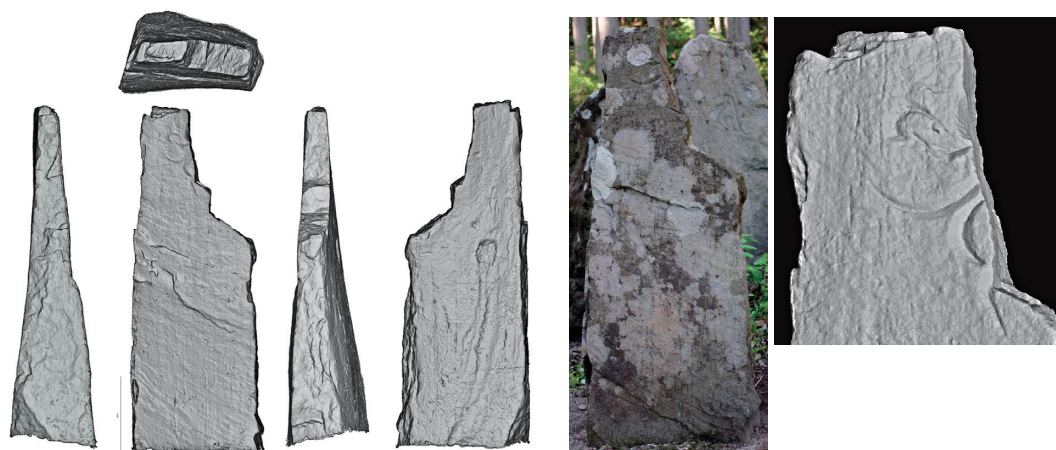
たものか。形態は両側面直立。頭部形はアーチ形?。頭部右破損。自然石を割り、その面を碑面とする(右側面は節理面)。割り面下部に段を付け以上を碑面として削り出す。碑面の左側辺主に剥離加工 裏面も剥離加工あり。下部に段差があり、碑面を削り出している。

種子はカーン(不動明王 初七日主尊)か。薬研彫を意図しているが、形態は萎縮変形し、彫り方は稚拙である。種子の高さ90mm 以上、幅50mm 以上、深さ2.5mm。銘文がある。右行に偈「万法一如」、中央に「嘉吉二年」(1444年)、左行に「道金禅門」、下部の右に「敬白」(「敬」は「戸」のように表現)、下部の左に「三月」



(背面)

24図 板碑No.16



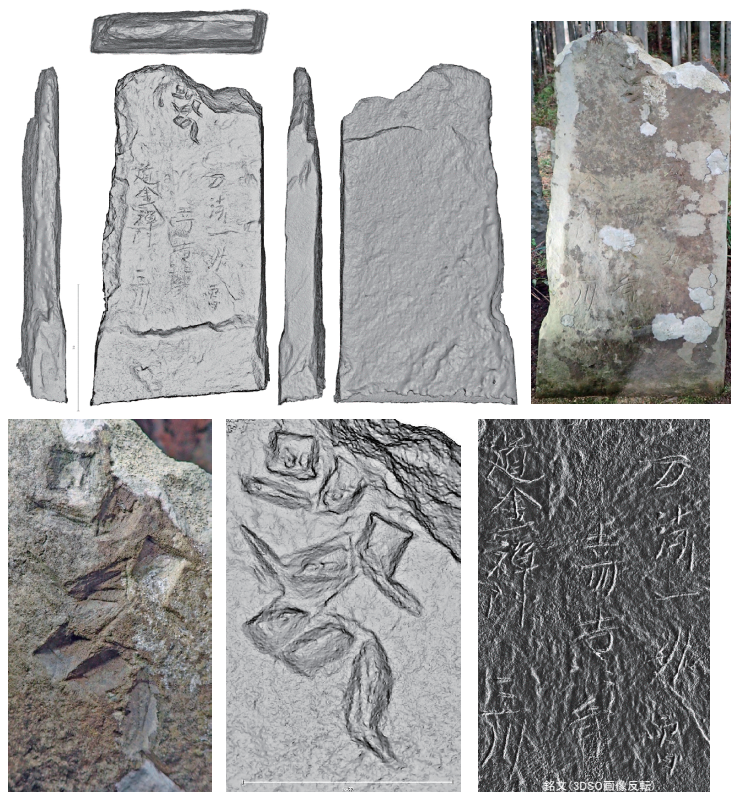
25図 板碑No.17



とあり、年号と合わせて期日を示す。本碑は種子、偈、年号月、戒名を具備するランクの高い板碑でありながら、戒名以外は稚拙な彫りである。台状の段を付けた碑面の削りだしなど特異である。製作は板碑製作の専門職人とは考えられない本板碑群末期の事例である。

# 板碑No.19 (A区 コンクリート固定)

地上高62.0cm (残存高)、幅23.5cm、厚さ7.0cm。石材は頁岩。形態は卵塔形。頭部形はアーチ形。ほぼ完形だが右側が斜めに剥落。丸みのある自然石を採取、ほとんど整形していない。種子はサまたはサク (剥落のため不明)。



26図 板碑No.18



27図 板碑No.19

薬研彫。種子の高さ50mm以上、幅64mm以上、深さ2.6mm。

種子の下方に「道泉禪門」（「道」はあるいは「為」（七海雅人氏説））。

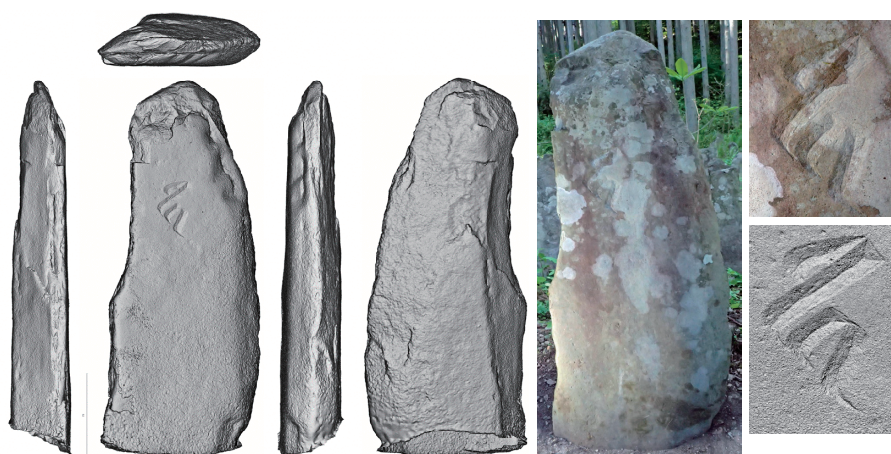
#### 板碑No20（A区 コンクリート固定）

地上高91.5cm（残存高）、幅34.0cm、厚さ4.5cm（左側面）。石材は頁岩？。形態は頭部に向かいすぼまる。頭部はアーチ形。ほぼ完形だが、頭部左右に近年とみられる剥離。塔形の自然石を採取、頂部剥離加工して整形。碑面は平滑であり、種子周辺の一部には擦痕が認められるので研磨している可能性。種子はカ（地藏菩薩 五七日主尊）薬研彫（浅い）。命点は下部に下

がり矮小化。最後の線は長い。種子は、左に寄ってみえるが、平滑の碑面の中央。種子の高さ110mm、幅55mm、深さ2.6mm。

#### 板碑No21（A区 コンクリート固定）

地上高62.9cm（残存高）、幅22.7cm、厚さ8.5cm（左側面）。石材は頁岩。形態は直立的にすぼまる。頭部は平頭形。ほぼ完形。長方形に近い板状の自然石を採取、頭部前面を剥離加工、頂部に細かい連続剥離加工して整形。種子はバイ（薬師如来 七七日主尊）。簡略な薬研彫。彫法は浅く、技術的に低い。アイ点のワラビ形点下方に突き出している特異形。種子の高さ115mm、幅60mm、深さ1.3mm。



28図 板碑No20



29図 板碑No21



## 板碑No22 (A区 コンクリート固定)

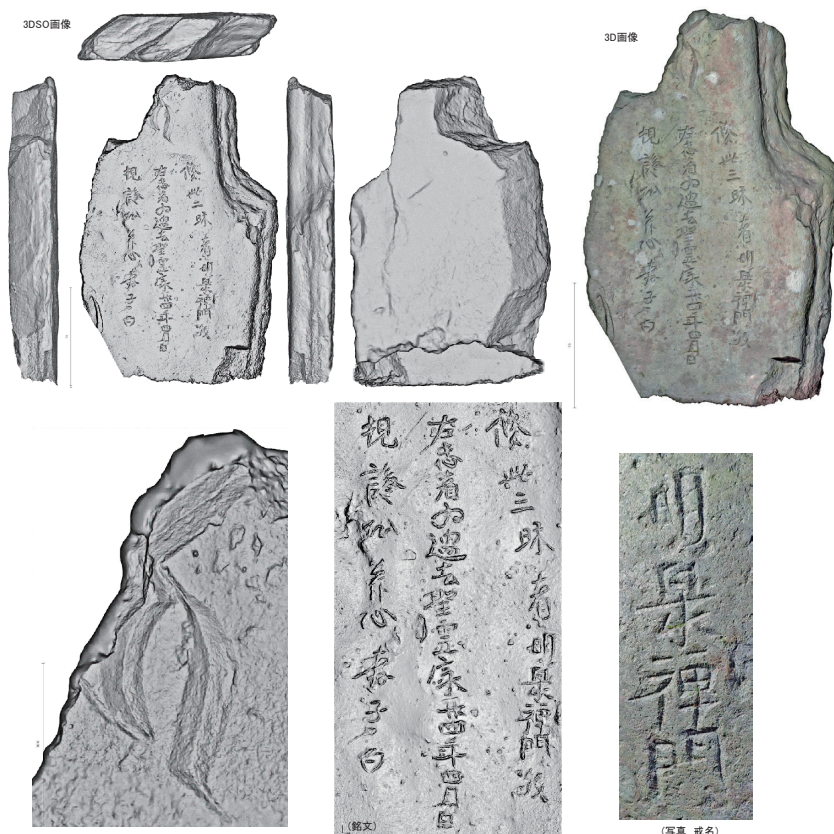
地上高62.5cm (残存高)、幅34.5cm、厚さ7.5cm。石材は頁岩。形態は下半右側直立、左側外弯。頭部欠損のため剥離加工については不明。左側辺欠損 (下部)。自然石 (断面形態などから岩層からの自然剥離石か) を採取、背面の左側に剥離加工。碑面は平滑であり、ランダムな擦痕が認められるので研磨されている可能性。種子は存する下半部からカ (地藏菩薩) かカーン (不動明王) の可能性。薬研彫。種子の高さ115mm以上、幅60mm以上、深さ2.5mm。

銘文がある。偈が右行に「修此三昧者」、左行に「現證佛菩提心」。「修此三昧者現證佛菩提」は頼瑜 (真言宗 1304没) 撰の『大日經疏指心鈔』が出典とされる<sup>6</sup>(後述)。中央に「右志者為過去聖霊」、その下に「応永廿四 (1417) 年四月日」。右行下に「明泉禪門」、左行下に「孝子」。右行下端に「敬」、左行下端に「白」、合

わせて「敬白」と記す。しかし、文章の配列は曲がっており、彫り方も雑なため、銘文を刻む技術は低い。ただし、残存する種子の彫り方は比較的しっかりとした薬研彫である。

## 板碑No23 (A区 コンクリート固定)

地上高75.5cm (残存高)、幅36.0cm (残存高)、厚さ4.5cm。石材は頁岩。両側は直立に近い。頭部は左欠損しているが、アーチ形か。左側辺中央部破損。板状の自然石を採取 左側辺を割り成形 (上端にわずかに自然面残る)。頭部剥離加工。右側辺連続剥離加工。碑面は研磨されている可能性もある。種子はバイ (薬師如来 七七七日主尊) 薬研彫。切り画薬研で彫り幅狭くシャープ。平ノミのような痕跡がある。アイ点のワラビ形点が右下に貫通する特異形。形態は、板碑No6に近似し、アイ点の渦が頂点で全体としては傾く点でNo11と近似し、ワラビ形点



30図 板碑No22



の下部が右下に下がる点はNo.6. 21に近似する。種子の高さ125mm、幅90mm、深さ3.1mm。

**板碑No24 (A区 コンクリート固定)**

地上高51.0cm(残存高)、幅23.4cm、厚さ5.5cm。石材は頁岩。両側は直立に近い。頭部は不整アーチ形。完形だが、頭部種子周辺は剥落。自

然石を採取 頭部左辺及び頂部は剥離加工により整形。種子は剥落により消失したと思われ、板状形態の選択と頭部剥離加工により板碑と考えられる。

**板碑No25 (A区 コンクリート固定)**

地上高66.5cm(残存高)、幅23.5cm、厚さ5.5cm。



31図 板碑No23



32図 板碑No24



33図 板碑No25

石材は頁岩？。両側直立的にすぼまる。頭部はアーチ形。完形だが、頭部に剥落あり 全体的に風化している。自然石を採取。頭部は剥離加工により整形。種子はカ（地藏菩薩 五七日主尊）薬研彫 中心軸が45度程度左に傾いている。種子の高さ100mm、幅70mm、深さ3.4mm。種子の下方に二列に分けて「𑖦𑖪𑖫𑖬／𑖦𑖪𑖫𑖬」と刻む。

板碑No26（A区 コンクリート固定）

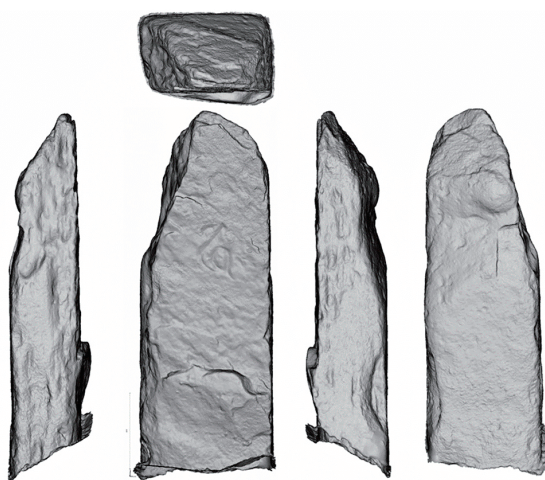
地上高72.0cm、幅27.3cm、厚さ15.0cm。石材は頁岩。種子より上は不整尖頭形、それ以下

は両辺、直立。頭部はアーチ形。完形だが碑面は風化、粗れている。自然石を採取。碑面となる表面の下部に段があり、それ以上を平らに整形して碑面としていると考えられる。頭部頂部を剥離加工。

種子はカ（地藏菩薩 五七日主尊）左に傾いている。種子の高さ110mm、幅75mm、深さ3.4mm。

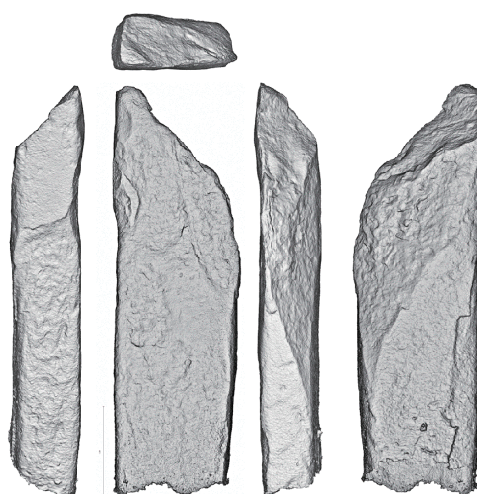
板碑No27（A区 コンクリート固定）

地上高43.5cm、幅12.5cm、厚さ5.5cm。石材は頁岩。形態は下部側辺直立。頭部は二等辺三



（頭部前面3DSO画像）

34図 板碑No26



（上半部3DSO画像）

35図 板碑No27



角形。頭部破損。碑面は中央部右辺の自然面を残し、ほとんど剥落。板状の小型自然石を採取。残存部には整形はみられない。

#### 板碑No28 (A区 コンクリート固定)

地上高80.5cm、幅32.0cm、厚さ3.5cm。石材は頁岩。形態は体部直立。頭部は不整アーチ形。ほぼ完形。碑面はところどころ剥落。自然石の碑面側下半剥離、裏面側上半剥離。左側辺連続剥離加工 頭部右側辺の一部剥離加工 頂部辺剥離加工して整形。種子はキリーク（阿弥陀如来 三回忌主尊）a類。薬研彫。種子の高さ145mm、幅110mm、深さ3.5mm。

種子の下方、ほぼ、中心線上に「応永廿三（1416）年 丙申 十月日」と刻む。稚拙な彫りである。

#### 板碑No29 (A区 コンクリート固定)

地上高64.0cm、幅36.0cm、厚さ9.5cm。石材は頁岩。形態は左側外弯、右側不整形。頭部は玉ねぎ形。ほぼ完形だが碑面の剥落が激しい。自然石の両側辺を割る。尖頭形を意識した割りをし、割り面を碑面とする。頭部は背面から、碑面側右、頂部に剥離加工して整形。背面の上部右にも連続剥離加工。

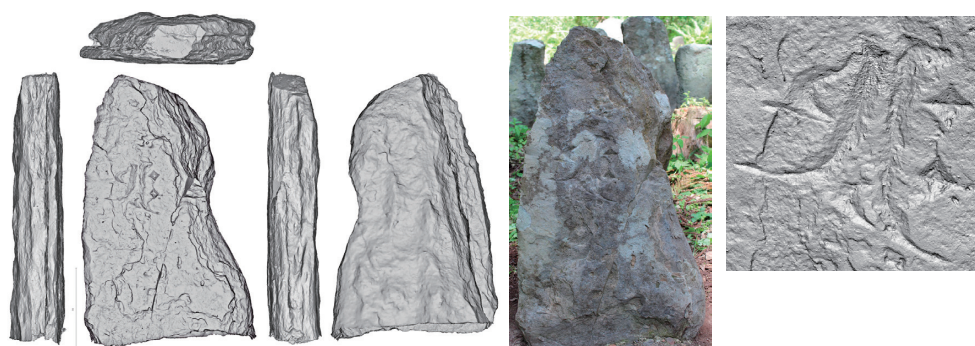
種子はサク（勢至菩薩 一周忌）。薬研彫。種子の高さ100mm、幅123mm、深さ3.5mm。

#### 板碑No30 (A区 コンクリート固定)

地上高46.0cm、幅21.9cm、厚さ10.4cm。石材は頁岩。形態は両側直立。頭部は平頭。ほぼ完形だが碑面の種子以外の大部分剥落。板状の自然石（岩層から乖離したものか 両側辺は節理面）を採取し、粗割りして裏面とする。碑面



36図 板碑No28



37図 板碑No29

は剥落のため、判然としないが、割り面の可能性もある。頂部左半から頭部背面にかけて剥離加工して整形。

種子はキリーク（阿弥陀如来 三回忌主尊）a類。薬研彫。上部破損。種子の高さ125mm、幅115mm、深さ2.7mm。

#### 板碑No31（A区 コンクリート固定）

地上高64.5cm、幅27.5cm、厚さ8.5cm。石材は頁岩。形態は右側直線的にすばまり。左側は不整にすばまる。頭部は偏三角形。ほぼ完形だが、頭部前面欠損。碑面は、ところどころ剥落。自然石の裏面側を剥離（製作時第一次剥離 裏面頭部に自然面残る）し、碑面は平坦な自然面を利用。頭部剥離加工。

種子はキリーク（阿弥陀如来 三回忌主尊）イ一点の末端の下にアク点がある。特異なキリー

ク。種子の高さ100mm、幅70mm、深さ1.9mm。

種子の下方、中心線上に「道泉禅門」と刻む。「道」はあるいは「為」（七海雅人氏説）。

#### 板碑No32（A区 コンクリート固定）

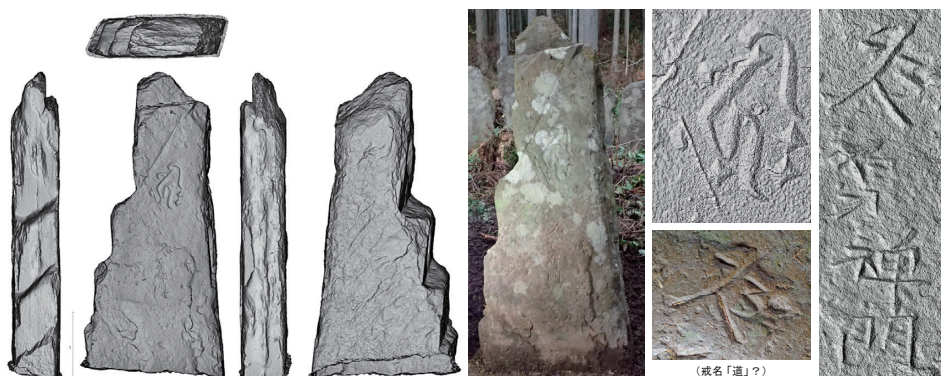
地上高58.0cm、幅26.3cm、厚さ5.5cm（右側面）。石材は頁岩。形態は両側辺直立。頭部は平頭に近いアーチ形。ほぼ完形。碑面は、碑面は平滑で主に縦方向の擦痕があり、研磨されている。板状の自然石を採取、頭部を剥離加工 左側辺を剥離加工（下部は新しい剥離）右辺は背面からの連続剥離加工。

種子はサク（勢至菩薩 一周忌の主尊）薬研彫。「切り画」が明瞭である。種子の高さ93mm、幅93mm、深さ2.2mm。

左行に、偈「万法一如」、中央に「右志趣者」、右行に「覚円禅門」。



38図 板碑No30



39図 板碑No31

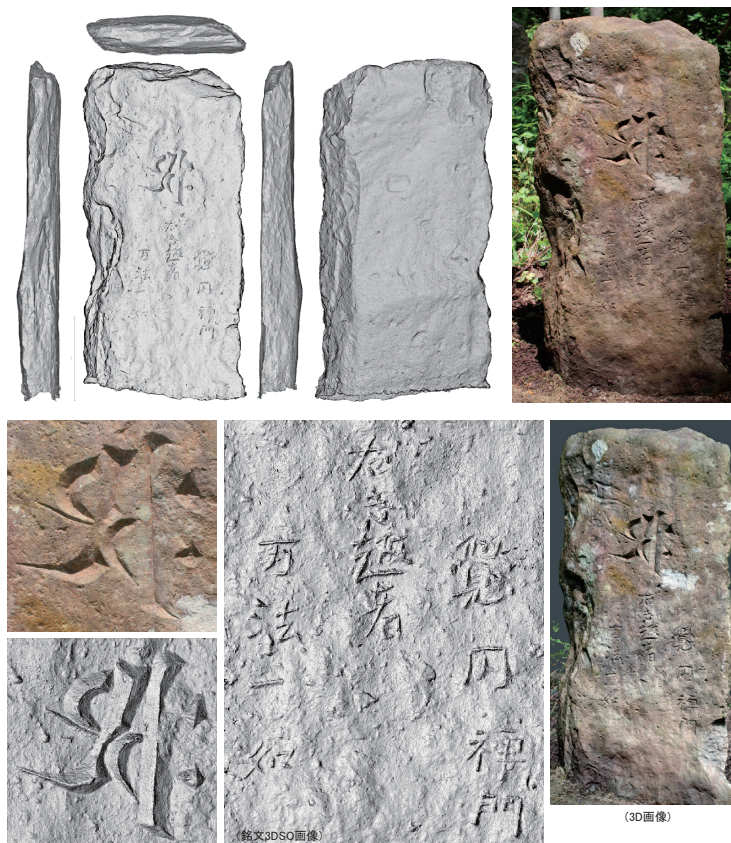


板碑No33 (A区 コンクリート固定)

地上高49.5cm (頂部)、42.5cm (碑面)、幅22.0cm、厚さ10.8cm (右側面)。石材は頁岩。形態は両側直立。頭部は不整アーチ形。ほぼ完形。板状の円礫の碑面側を剥離して成形。は

つって整形し碑面とする(頭部との境に段差ができています)。頭部を剥離加工。

種子はサク(勢至菩薩 一周忌主尊)葉研彫を意図しているが、輪郭がぎこちなく、よれている。種子の高さ85mm、幅95mm、深さ1.7mm。



40図 板碑No32



41図 板碑No33



# 板碑No.34 (A区 コンクリート固定)

地上高51.7cm、幅28.3cm、厚さ4.8cm。石材は粘板岩。形態は体部両側直立。頭部は三角形。頭部の左辺、碑面右破損。自然石を採取し、頭部・両側辺剥離加工。裏面は粗い一次剥離の可能性。

種子はカ(地藏菩薩 五七日主尊)。薬研彫。種子の高さ90mm、幅65mm、深さ3.1mm。

# 板碑No.35 (A区 コンクリート固定)

地上高64.0cm、幅17.0cm、厚さ4.5cm。石材は頁岩。形態は卵塔形。頭部は隅丸台形。ほぼ完形だが頭部左辺剥落。自然石を採取し、頭部の頂部及び頭部背面側を剥離加工により整形。碑面は微凹凸あるが全体として滑らかであり、研磨している可能性。

種子はカ(地藏菩薩 五七日主尊)。薬研彫でやや浅いものの本板碑群の中ではしっかりした彫りである。種子の高さ97mm、幅58mm、深

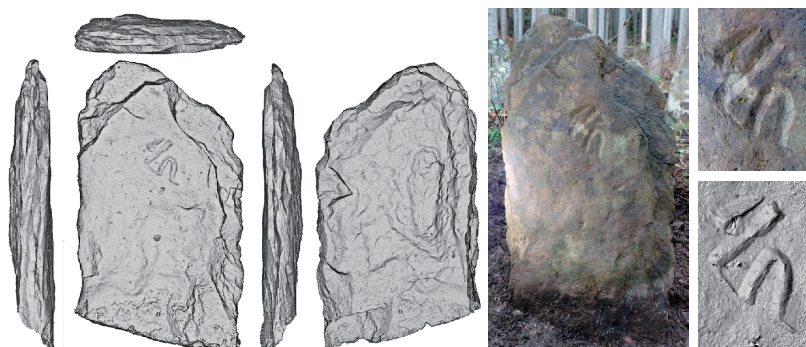
さ2.5mm。

種子の下段に偈「一切善悪 都莫思量」を右、左に配する。出典は子叡(ー1038)『起信論疏筆削記』(詳細は後述)。中央に「母大聖霊之應永十一(1404)年十月廿三日」、「年」の右に「甲」、左に「申」を配して「甲申」。「應」の書体は他には見られない。「三日」の右に「敬」、左に「白」を配して「敬白」。「母大聖霊之」という表現は希少。

# 板碑No.36 (A区 コンクリート固定)

地上高42.0cm、幅35.7cm、厚さ5.2cm(左側辺)。石材は頁岩。形態は体部両側直立。頭部は偏アーチ形。ほぼ完形。頭部右欠損。板状の自然石を採取し、頭部剥離加工により整形。種子周辺は滑らかで擦痕が確認されるので、研磨しているとみられる。

種子はタラーク(虚空蔵菩薩 三十三回忌主



42図 板碑No.34



43図 板碑No.35

尊) 葉研彫を意図しているが底のラインは一定していない。その右下に一回り小さくダ(字義は「施与」、金剛利菩薩・善財童子の種子であるが主尊は確定できない)。種子の高さ73mm、幅72mm、深さ1.6mm。タラークの右下に小さくダがある組み合わせは珍しい。

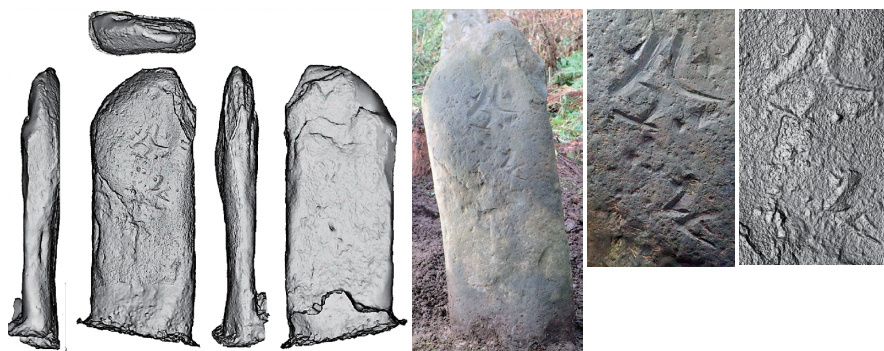
#### 板碑No37 (A区 コンクリート固定)

地上高39.5cm、幅27.0cm、厚さ12.7cm。石材は頁岩。形態は不整尖頭形。頭部はドーム形。完形。塔形の自然石を採取し、頭部背面にわず

かな剥離加工。種子の周囲にランダムな擦痕があり、研磨している。種子はユ(弥勒菩薩 六七日主尊) 葉研彫だが、不明瞭な彫り。種子の高さ105mm、幅60mm、深さ2.8mm。

#### 板碑No38 (A区 コンクリート固定)

地上高40.0cm、幅31.5cm、厚さ3.5cm。石材は粘板岩。形態は頭部へすばまる。頭部は三角形。ほぼ完形だが剥落激しい。板状の自然石を採取し、両側面を割り、頭部を剥離加工(頂部の一部に自然面残る。背面は自然面。)。種子は



44図 板碑No36



45図 板碑No37



46図 板碑No38



サもしくはサク（サは観音菩薩で百か日忌主尊 サクは勢至菩薩で一周忌主尊）剥落顯著平彫。種子の高さ82mm以上、幅108mm以上、深さ1mm。

#### 板碑No.39（A区 コンクリート固定）

地上高55.4cm、碑面の高さ51.0cm、幅34.7cm（基部）、厚さ10.0cm（基部）。石材は頁岩？。形態は左直線的すばまり。右不整形なすばまり。頭部は平頭。ほぼ完形。碑面は粗れている。自然石を採取し、左側面は自然面を割り整形、頭部は剥離加工。碑面は割り面をはつって整形（右側面・裏面は自然面）。種子はアーク（胎藏界大日如来 五点具足 十七回忌主尊 『真言

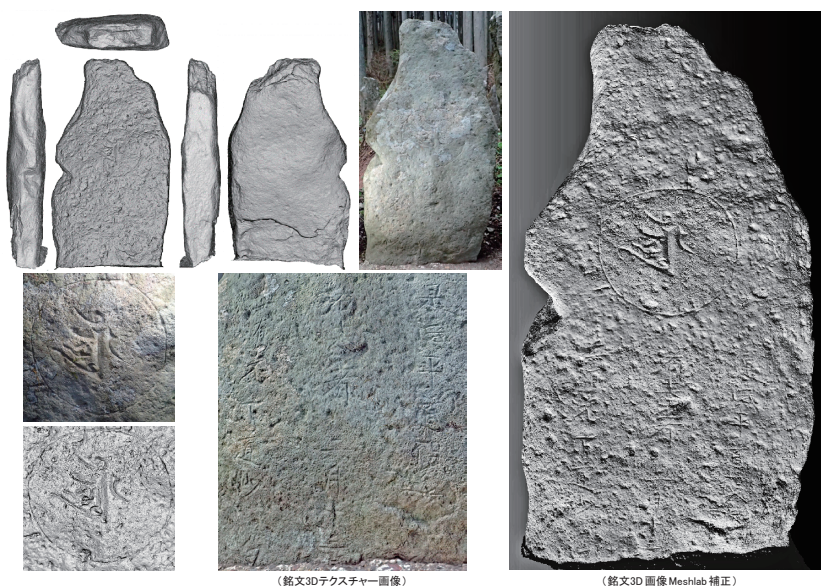
宗回忌法要次第』2009 青木恭光「十三仏並びにその他年回忌等種子、真言」2012は先祖代々もしくは年回忌以外とする）。彫り方は大雑把な輪郭からの平彫。種子の高さ100mm、幅75mm、深さ0.4mm。

#### 板碑No.40（A区 コンクリート固定）

地上高52.7cm、幅32.0cm（基部）、厚さ9.0cm（基部）。石材は頁岩。形態は両側外弯。頭部は平頭。ほぼ完形だが碑面は細かな凹凸があり、荒れてもいるので銘文は読みにくい。塔形の自然石を採取し、頭部剥離加工。碑面は割り面をはつって整形 裏面は自然面）。種子は月輪の中に刻まれるが、涅槃点を確認できないの



47図 板碑No.39



48図 板碑No.40

でアーク（胎蔵大日）と読めず、空点・仰月点があるので読みはアーンとなる。主尊は『梵字字典』（小峰智行）では除憂冥菩薩とする。薬研彫りを意識しているが変形し、彫法は稚拙である。種子の高さ80mm、幅85mm、深さ1.2mm。月輪は真円ではなく下部はややすぼまる。右行に「是法平道」左行に「無有高下」、中央に「右志者 二月十三」、右下に「歿故」、左下に「道妙」、その下に「白」と見える。佐藤正助『志津川物語』（1985）では碑面右下に「敬」と読むが現在は剥落のため見えない。偈「是法平道 無有高下」は『金剛般若経』の「是法平等 無有高下」の「等」が「道」となっている。なお、「歿故」（読みは野口達郎氏教示）は構成から「歿故道妙」と解する。

#### 板碑No41（A区 コンクリート固定）

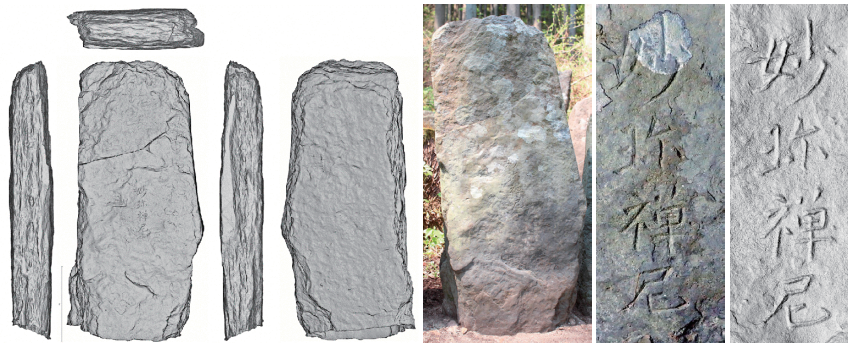
地上高74.2cm、幅31.0cm（基部）、厚さ10.6cm（基部）。石材は粘板岩。形態は左辺直立し、

右辺外弯。頭部はアーチ形。ほぼ完形。碑面頭部は深く剥落。戒名及びその左側以外剥落顕著。裏面は割り面か（自然剥離面の可能性もある）。自然石の両側辺の凸部を剥離する（両側辺の碑面側に帯状に自然面残る 左側面にノミの先端状痕跡）。頭部剥離加工。碑面は研磨している可能性もある。種子は剥落とみられる。

体部中央に「妙珍禪尼」と刻む。「珍」は「珍」の俗字（『漢字辞典オンライン』）。

#### 板碑No42（A区 コンクリート固定）

地上高55.0cm、幅17.5cm、厚さ12.0cm。石材は花崗岩？。形態は両側辺直立ぎみに頭部に向かってやや広がる。頭部は平頭形。完形。碑面は平坦だが、ザラザラと粗い。長方形板状の自然石を採取し、頭部を剥離加工して平に整形。種子はサ（観音菩薩 百か日忌主尊）薬研彫（浅い）。種子の高さ105mm、幅180mm、深さ2.2mm。



49図 板碑No41



50図 板碑No42



**板碑No43 (A区 コンクリート固定)**

地上高50.0cm、幅29.5cm、厚さ6.0cm。石材は頁岩。形態は上方にすぼまる。頭部は不整ドーム形。ほぼ完形だが下半剥落。自然石を採取し、一面を割り碑面とする。背面も粗割りしている。頭部剥離加工して整形 種子はバン(金剛界大日如来 十三回忌主尊)。薬研彫。種子の高さ80mm以上、幅90mm、深さ2.0mm。

**板碑No44 (A区 コンクリート固定)**

地上高66.5cm、幅24.5cm(上端)、厚さ14.1cm。石材は頁岩。形態は両側辺直立。頭部は不整三角形。ほぼ完形だが頭部右上剥離。円礫状の自然石を採取し、頭部背面剥離加工。碑面は自然の凹凸のまま滑らかであり、研磨されている可能性。種子はサ(観音菩薩 百か日忌主尊)。薬研彫だが底線に乱れが生じている。種子の高さ130mm、幅135mm、深さ3.2mm。

銘文があり、右行に「ア・バン・ボローン」左行に「ア・ウン」、種子下に「応永廿九(1422)

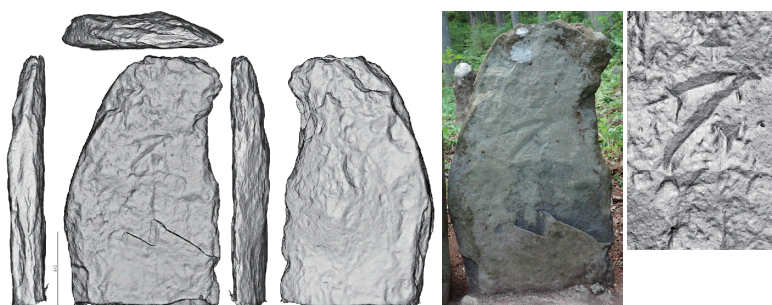
年十月日」「ア・バン・ボローン」「ア・ウン」で胎藏界・金剛界・一字金輪」「蘇悉地」を表すと考え。

**板碑No45 (A区 コンクリート固定)**

地上高60.0cm、幅27.0cm、厚さ4.5cm。石材は頁岩。形態は体部直立に近い。頭部は不整アーチ形。ほぼ完形。板状の自然石を採取し、頭部剥離加工。碑面は平滑。研磨されている可能性。種子はアーク(胎藏界大日如来 五点具足 十七回忌主尊『真言宗回忌法要次第』2009。ただし、青木恭光2012は先祖代々もしくは年回忌以外に用いるとする。) 薬研彫を意図しているが稚拙な彫り。種子の高さ130mm、幅105mm、深さ2.2mm。

**板碑No46 (A区 コンクリート固定)**

地上高78.5cm、幅26.5cm、厚さ3.5cm。石材は頁岩。形態は尖塔形。頭部は偏三角形。ほぼ完形。左下部破損。上半剥落。塔形に近い自然



51図 板碑No43

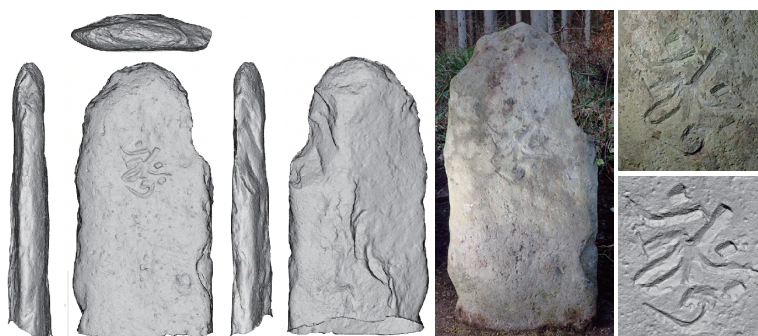


52図 板碑No44

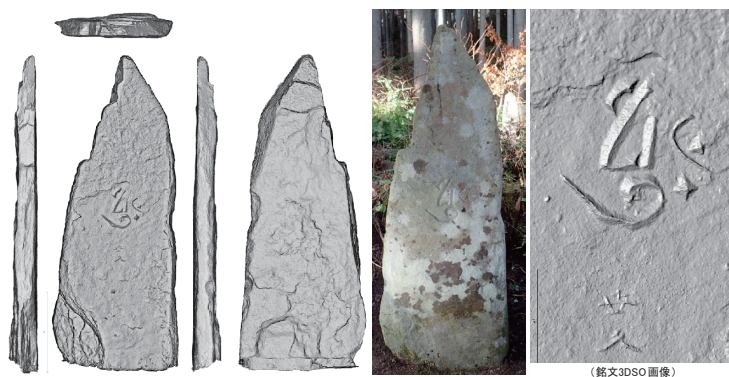
石を採取し、裏面側を剥離、頭部左辺を剥離加工。碑面は割面を碑面とし、研磨している可能性。種子はパーンク（金剛界大日如来 五点具足 十三回忌主尊 もしくは二十七回忌主尊）薬研彫を意図しているが、硬直した彫りである。種子の高さ100mm、幅95mm、深さ2.9mm。種子の下に「世久」と刻む。板碑No99に「世久禅門」とあり、同一人と考えられる。

#### 板碑No47（A区 コンクリート固定）

地上高65.0cm、幅34.5cm、厚さ11.3cm。石材は頁岩。形態は両側直線的にすぼまる。頭部は偏三角形。ほぼ完形。右下端破損。左上部と下部に剥落。自然石を採取し、裏面を数回剥離して成形。碑面は割取りの後はつり整形（自然剥離の可能性もある）。頭部前面を連続的に剥離加工。種子はバク（釈迦如来 二七日主尊）薬研彫。種子の高さ120mm、幅145mm、深さ



53図 板碑No45



54図 板碑No46



55図 板碑No47



3.8mm。種子の下に「應永十一（1409）年二月十六」（以下コンクリートのため確認できず）。

#### 板碑No48（A区 コンクリート固定）

地上高48.2cm、幅22.0cm、厚さ7.8cm。石材は風化した頁岩もしくは凝灰岩。形態は体部直立に近く頭部に向かいすぼまる。頭部はアーチ形。ほぼ完形。碑面の右側が粗れている。板状の自然石を採取し、頂部前面に剥離加工（3回以上）。頭部背面は剥離加工後に削り加工整形の可能性ある。

種子はサ（観音菩薩 百か日忌主尊）。薬研彫を意図しているが極めて浅い。種子の高さ90mm、幅65mm、深さ1.8mm。

#### 板碑No49（A区 コンクリート固定）

地上高54.5cm、幅30.0cm、厚さ4.0cm。石材は風化した頁岩。形態は上方にすぼまる。頭部は偏三角形。ほぼ完形。頭部剥落。下半剥落。全体が風化している。板状の自然石を採取し、

頂部右側を剥離加工、背面上端に細かな剥離加工して頭部を整形。

種子はタラーク（虚空蔵菩薩 三十三回忌主尊）。薬研彫（浅い）。種子の高さ70mm、幅90mm、深さ1.1mm。

#### 板碑No50（A区 コンクリート固定）

地上高73.5cm、幅21.5cm（碑面）、厚さ10.5cm（右碑面）。石材は頁岩。形態は両側直立。頭部は平頭形。ほぼ完形。自然石から割取り、割取り面を背面とする。左側辺を剥離加工。頭部を剥離加工。

種子はサク（勢至菩薩 一周忌主尊）。下書きなのか画の延長線上に刻線が見えている。種子の高さ80mm、幅65mm、深さ2.4mm。

#### 板碑No51（A区 コンクリート固定）

地上高47.7cm、幅28.0cm（碑面）、厚さ4.4cm。石材は頁岩。形態は右側直立。頭部は不整アーチ形。上半左側欠損。自然石の表裏を割る（背



56図 板碑No48



57図 板碑No49

面下部に自然面残る)。側辺剥離加工。頭部剥離加工して整形。種子の周辺に擦痕が顕著であり、研磨痕跡とみる。

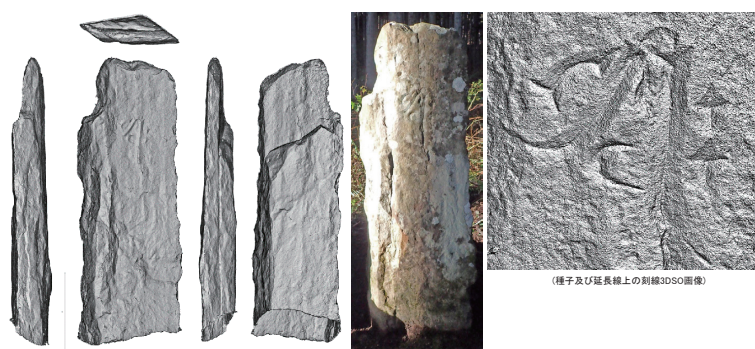
種子はバン(金剛界大日如來 十三回忌主尊)。葉研彫。ぎこちない形態。種子の高さ85mm、幅45mm、深さ1.6mm。

# 板碑No52 (A区 コンクリート固定)

地上高57.5cm、幅21.0cm(碑面)、厚さ9.0cm(右側辺)。石材は頁岩。形態は両側辺不整直立。

頭部はドーム形。ほぼ完形。塔形に近い自然石を採取し、頭部を剥離加工整形。碑面は滑らかで研磨した可能性。

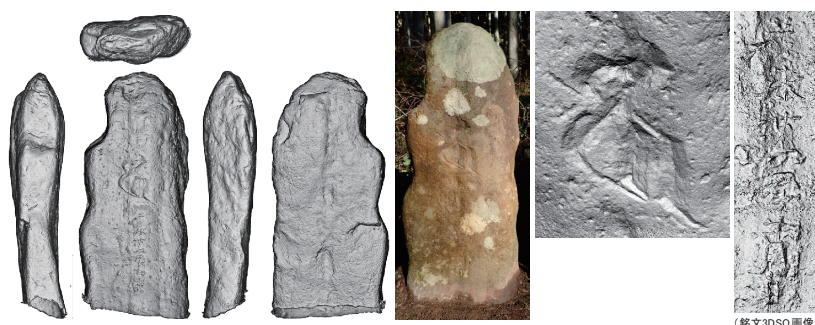
種子はカ(地藏菩薩 五七日主尊)。底線に乱れがみられ明瞭さに欠ける。種子の高さ105mm、幅74mm、深さ32mm。種子の下方に「応永廿九(1422)年十月日」。「十」の下部に短い横線があり、あるいは「十一」の可能性もある。銘文の彫りは浅くごこちない。



58図 板碑No50



59図 板碑No51



60図 板碑No52

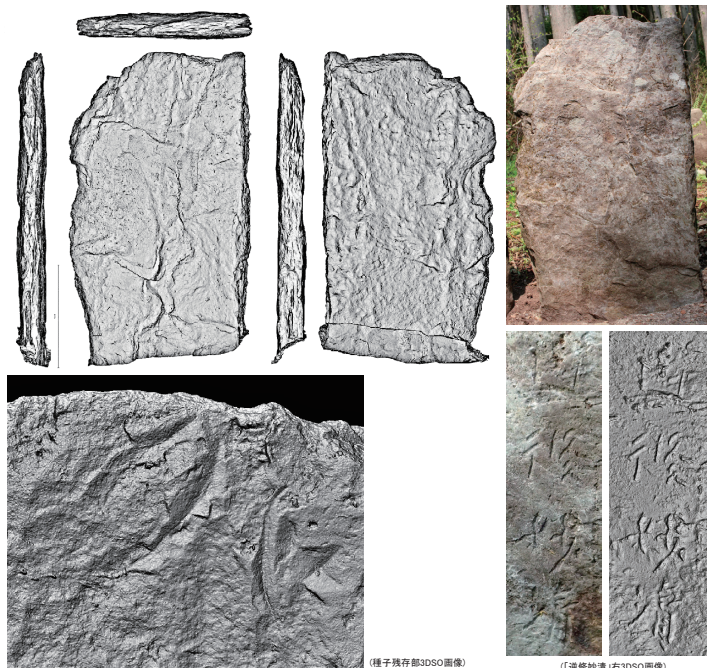


### 板碑No53

(A区 コンクリート固定)

地上高75.5cm(残存高)、幅41.0cm(碑面)、厚さ6.0cm(右側辺)。石材は粘板岩。形態は右側直立左側直立に近い。上部欠損。碑面全体が剥落し、かろうじて、種子の一部と願文が残存。全面割り面である。

種子は剥落のため不明瞭だがサク(勢至菩薩 一周忌主尊)か。種子の高さ70mm以上、幅70mm以上、深さ不明。種子の下方に「逆修妙清」と刻む(野口達郎氏。畠山篤雄氏ご教示)。沢内板碑群で初めて「逆修」が確認された。

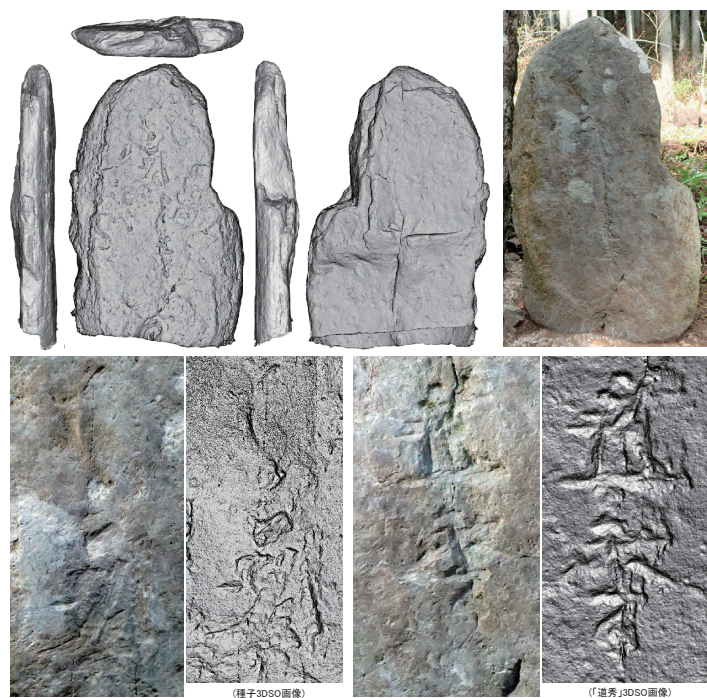


61図 板碑No53

### 板碑No54

(A区 コンクリート固定)

地上高55.7cm、幅32.3cm、碑面の幅24.0、厚さ7.7cm。石材は頁岩。形態は左側直立、右側段状。右上部破損。頭部はアーチ形。碑面のあちこち剥落。円礫(自然石)を採取し、自然面を碑面とする。左側辺剥離加工。頭部剥離加工。種子は稚拙な平彫でサ(観音菩薩 百か日忌主尊)。ただし、稚拙な平彫で空点のような窪みがあるが空点とすれば解釈し難い。さらにその上に「一」のような細く浅い刻線が認められるが梵字とは断定し難い。種子の高さ70mm以上、幅80mm以上、深さ1.4mm。種子の下方に「道秀」が稚拙な彫りで刻まれる。銘文、梵字の理解については野口達郎氏のご教示を得た。



62図 板碑No54

## 板碑No55

(B区 コンクリート固定)

地上高50.1cm、碑面高49.0cm、幅21.5cm、厚さ5.3cm(左側辺)。石材は粘板岩。形態は左側辺直立、右側辺直線的に頭部に向かい広がる。頭部右及び左の角欠損。碑面の剥落が激しい。頭部形態は不明。自然石を割り、割り面を裏面とする。頂部平坦面に自然面残存。頭部剥離加工が右欠損の下方に残存。両側の自然面(節理面)に加工は認められない。種子はパイ(薬師如来 七七日主尊)の上部のみ残存。種子の高さ50mm以上、幅65mm以上、深さ0.7mm。



63図 板碑No55



## 板碑No56

(B区 コンクリート固定)

地上高84.3cm、幅27.5cm、厚さ6.5cm。石材は頁岩。形態は尖頭形。頭部は不整三角形。形態は完形に近い。頭部左の一部欠損。背面の頭部に新しい剥離。自然石の一面を割り取り、裏面としている。頭部剥離加工。碑面は滑らかであり、研磨している可能性。種子は変形かつ稚拙な彫りでアーケ(胎蔵界大日如来・大仏頂尊・仏眼仏母)か。

薬研彫を意図しているようだが、輪郭、断面がよれよれになっており、素人の彫りのようである。種子の高さ70mm、幅70mm、深さ3.2mm。

銘文があり、上部に偈「無智人中 莫説之経」下半中央に「嘉吉二(1442)年十月二十八日」。町史では「二」の上の細い横短線を読んで「三年」とする(64図参照)。その左右に分けて「道金禅門」とある。「道」部分は主体が剥落しているが残された部分から推定した。「道金禅門」



銘文「道」推定部分(3D画像)

64図 板碑No56

が左から始まり、偈に接近している。「施主敬白」及び年号月日は偈とは異なり稚拙な線的な彫りとなっており、No18の「道金禅門」銘板碑に近似している。No18は「嘉吉二年」(1444年)、種子は「カーン」、初七日とすれば矛盾が生じるが種子、銘文の近似から同一人と考えられる。



**板碑No57（B区 コンクリート固定）**

地上高59.0cm、碑面高は56.0cm、幅28.5cm（碑面）、厚さ8.3cm 石材は頁岩。形態は両側辺不整外弯。頭部は平頭形。形態はほぼ完形。板状の自然石を採取し、側辺を剥離加工。頭部を剥離加工。種子はウン（阿閼如来 七回忌主尊）。薬研彫。ウ点（雲形点）が方形の縦画と二分されている。上部の軸線に合わせているので全体としては左に傾いて見える。種子の高さ150mm、幅110mm、深さ3.1mm。

銘文があり、種子の下方に「応永十一（1404）年二月日」。下半部の軸線に合わせている。種子のある上部軸線に合わせると紀年銘は右に傾いて見える。

**板碑No58（B区 コンクリート固定）**

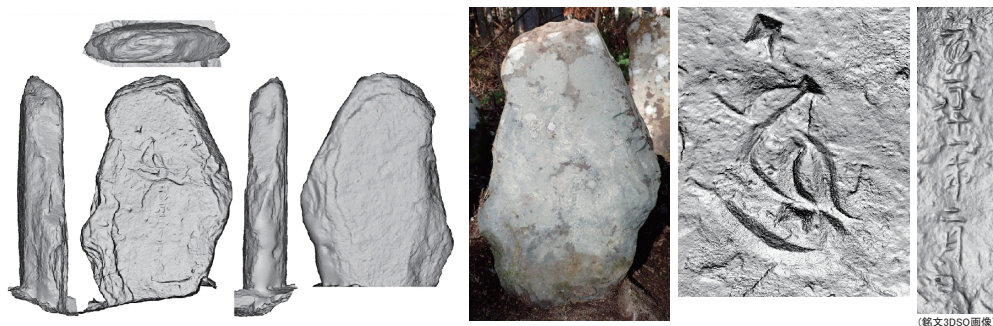
地上高92.5cm（上端欠損だが本来の数値は大きくは変わらない）。幅46.0cm、厚さ7.5cm（右側辺）。石材は粘板岩。体部は直線的に下方に

すばまる。上端中央部欠損。碑面右下部一部破損。自然石の表裏を割り、板状にする（自然面が左側上部、右側下部、背面下部に残る）。フィッシャーが碑面の右下から左上に放射状に顕著に走る。種子はカ（地藏菩薩 五七日主尊）薬研彫。浅い。種子の高さ125mm、幅75mm、深さ2.2mm。

**板碑No59（B区 コンクリート固定）**

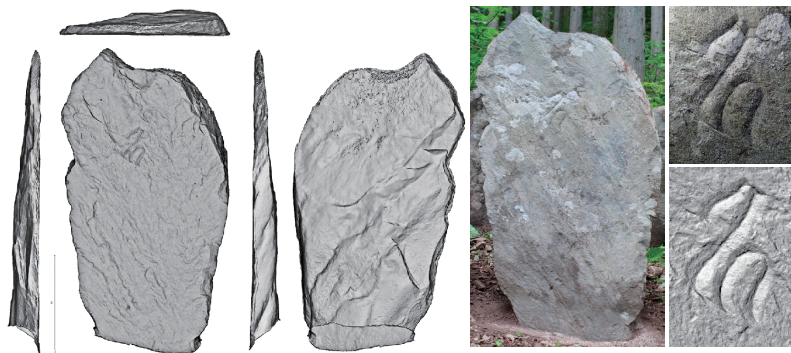
地上高46.0cm、幅19.4cm、厚さ5.8cm。石材は頁岩。形態は下半両側直立。頭部は平頭形。ほぼ完形 頭部剥落。自然石を割り（割り面が裏面）、頭部の頂部から背面側を剥離加工。碑面は平滑であり、ランダムな擦痕が認められるので研磨していると考えられる。種子はサ（観音菩薩 百か日忌）。薬研彫だが直線の集合体となっている。種子の高さ70mm以上、幅70mm以上、深さ1.7mm。

銘文があり、右行に「アビラウンケン」（胎



（銘文3DSO画像）

65図 板碑No57



66図 板碑No58

蔵大日真言) 中央に「永享十(1438)年十月日」左行に「妙善禪尼」、下端の右に「敬」・左に「白」で「敬白」。真言以外の銘文は短直線の集合体のような素朴な彫りである。

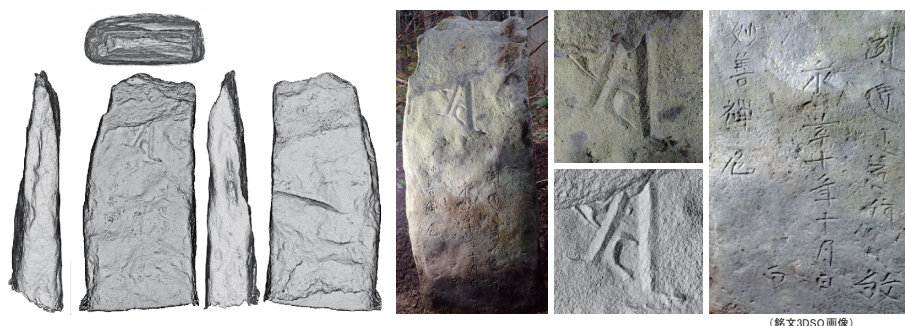
採取、頭部背面に細かな剥離加工。種子はバイ(薬師如来 七七日主尊)。薬研彫だが非常に浅い。種子の高さ165mm、幅105mm、深さ1.5mm。種子の下方に「妙珍禪尼」と刻む。稚拙な彫りである。

#### 板碑No60 (B区 コンクリート固定)

地上高60.0cm、幅30.5cm(基部)、厚さ8.0cm(左側辺)。石材は頁岩(風化している)。形態は上方に直線的にすばまる。頭部は偏三角形。ほぼ完形。全体的に磨滅。剥落顕著。自然石を

#### 板碑No61 (B区 コンクリート固定)

地上高40.0cm、幅20.0cm(基部)、厚さ7.0cm。石材は頁岩。形態は長方形(下端くびれ)。頭部は不整台形。ほぼ完形。背面頭部左破損。丸



(銘文3DSO画像)

67図 板碑No59



(「妙珍禪尼」3DSO画像)

68図 板碑No60



69図 板碑No61



みのある自然石を採取、長方形の平坦面を碑面として選び取っている。頂部を連続剥離加工。種子の右の粗雑な連続刺突痕は凸部削除痕か。碑面にはランダムな擦痕が認められ。研磨されていると考えられる。種子はバイ（薬師如来 七七日主尊）。アイ点のワラビ形点が右下にのびる特異形。薬研彫。種子の高さ123mm、幅190mm、深さ3.8mm。

#### 板碑No62（B区 コンクリート固定）

地上高34.2cm、碑面高33.5cm（碑面）。幅20.7cm、厚さ4.0cm。石材は粘板岩。形態は両側辺直立。頭部は左右の剥離（打点あり）により三角形にしている（頂部右側は破損の可能性）。剥落が多い（種子の左半以外は剥落）。全面が割り面。種子はバーンク（十三回忌主尊もしくは二十七回忌主尊）イーの途中剥落。薬研彫を意図しているが、浅く不均一。涅槃点、空点は薬研彫になっていない。種子の高さ130mm、幅85mm、深さ1.5mm。

#### 板碑No63（B区 コンクリート固定）

地上高57.5cm、幅23.0cm、厚さ6.0cm。石材は花崗岩？。形態は不整平行四辺形。頭部は三角形。ほぼ完形。尖頭形に近い板状の自然石を利用。背面右側上部に削り状加工痕。種子はタラク（虚空蔵菩薩 三十三回忌主尊）。薬研彫だが、涅槃点は十字底になっておらず略している。種子の高さ75mm、幅95mm、深さ2.8mm。

#### 板碑No64（B区 コンクリート固定）

地上高71.0cm、幅30.0cm、厚さ5.5cm。石材は粘板岩。形態は体部直立。頭部は平頭形？。頭部左上欠損。碑面のほぼ全面薄く剥落。自然石の一面を割り取り、はつって碑面とする。両側辺自然面（左側は節理面 右は水の影響か丸み凹凸）。頭部背面は連続剥離加工で整形（背面は風化した自然面だが下部に剥離面）。種子はカ（地藏菩薩 五七日主尊）薬研彫。種子の高さ100mm、幅60mm、深さ4.1mm。



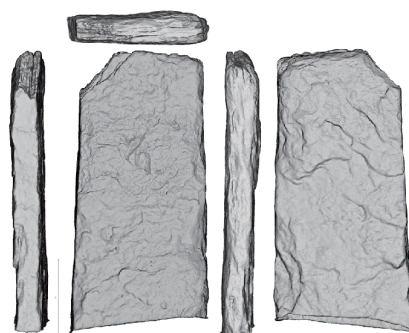
70図 板碑No62



71図 板碑No63

板碑No65 (B区 コンクリート固定)

地上高69.0cm、幅32.0cm、厚さ7.5cm (右側辺)。石材は頁岩。形態は上方にすぼまり左に弯曲。頭部はアーチ形。ほぼ完形。頭部左破損。自然石を採取し、碑面頭部右側に剥離加工。左側下部に剥離加工。背面左側辺に連続剥離加工。種子はサク(勢至菩薩 一周忌主尊)。薬研彫。種子の高さ85mm、幅90mm、深さ3.5mm。種子の下方、ほぼ中心線上に「妙珎禪尼」と刻む。

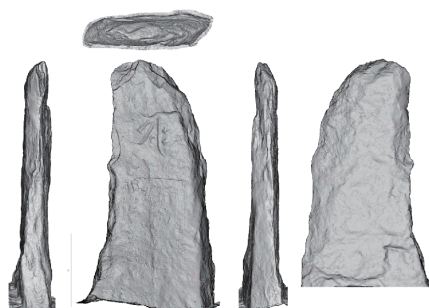


板碑No66 (B区 コンクリート固定)

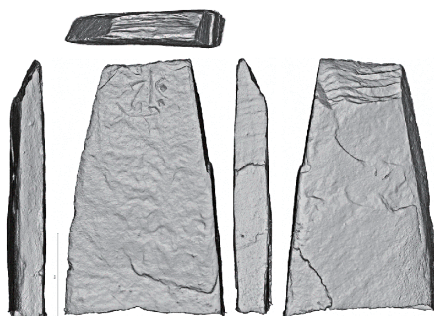
地上高34.0cm(残存高)、幅24.7cm、厚さ5.2cm (右側辺)。石材は粘板岩。形態は上方に直線的にすぼまる。頭部欠損。自然石を利用。碑面は剥離後、はつって整形したか。裏面は剥離面だが下部に自然面残る。両側辺は自然面(節理面)。種子はパーンク(金剛界大日如来 十三回忌主尊 もしくは二十七回忌主尊)。種子の形態は崩れており、幅も狭く線彫りに近い。種子の高さ90mm、幅85mm、深さ1.5mm。



72図 板碑No64



73図 板碑No65



74図 板碑No66



板碑No67 (B区 コンクリート固定)

地上高69.0cm (残存高)、幅27.0cm、厚さ10.0cm (右側辺)。石材は頁岩。体部は両側辺少しふくらむ。頭部は偏三角形。ほぼ完形。丸みを帯びた板状の自然石を利用。種子はサク (勢至菩薩 一周忌主尊)。薬研彫。四画の縦画が長い。しっかりした彫り。種子の高さ127mm、幅103mm、深さ2.1mm。

材は頁岩。体部は上方にややすぼまる。頭部は不整アーチ形。完形。全体に丸みを帯びた厚みのある自然石を利用。縦方向の擦痕があり、裏面の自然面より平滑であり、研磨されているとみられる。種子はバイ (薬師如来 七七日主尊)。薬研彫。種子の高さ135mm、幅75mm、深さ3.5mm。

板碑No69 (C区)

板碑No68 (C区)

地上高56.0cm、幅21.5cm、厚さ11.0cm。石

地上高45.0cm (残存高)、幅29.5cm (碑面)、厚さ6.5cm (右側面)。石材は粘板岩。体部は右



75図 板碑No67



76図 板碑No68



77図 板碑No69

直立。上部折損。左上部側辺欠損（下辺は自然剥落か）。碑面の大部分が剥落。自然石（碑面と右側面に自然面（節理面））の一面を割り、裏面とする。種子はキリク（阿弥陀如来 三回忌の主尊）a類。葉研彫。種子の高さ90mm以上、幅90mm以上、深さ3.2mm。

#### 板碑No.70（C区）

地上高70.0cm、幅25.0cm、厚さ6.7cm（両辺ほぼ均一）。石材は頁岩。体部は両側辺直立。頭部は不整アーチ形。ほぼ完形。種子の右上剥落。板状の自然石を採取し、頭部剥離加工。碑面上半平滑。下半に削り痕跡があり研磨されているみられる。種子はモーンク？。葉研彫。一致する仏尊名不明だが、マン（文殊菩薩 三七日主尊）の莊嚴体の可能性（No.8の種子に近似）がある雄渾な種子。種子の高さ140mm、幅110mm以上、深さ3.4mm。碑面の下半右に「明

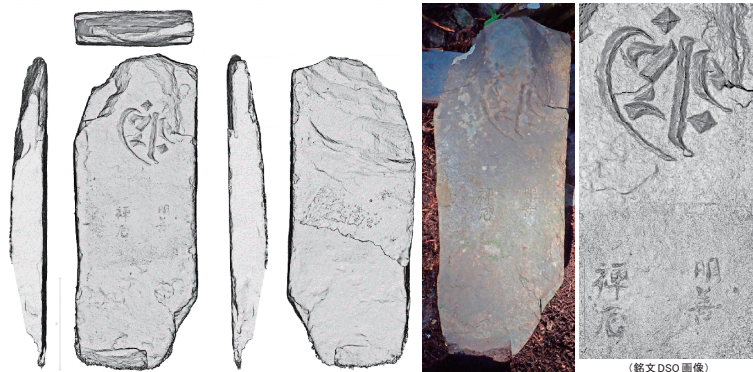
善」、左に「禪尼」、即ち「明善禪尼」と刻む。

#### 板碑No.71（C区）

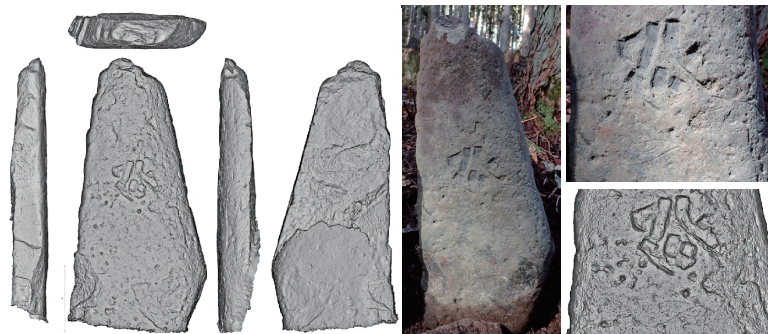
地上高44.0cm、幅17.0cm、厚さ4.4cm。石材は頁岩。形態は上方にすばまる。頭部は三角形。ほぼ完形。右下部剥落。頂部の一部欠損。塔形の自然石を採取し、裏面となる側を剥離（製作時の第一次剥離）。頭部を剥離加工。種子はタラク（虚空蔵菩薩 三十三回忌主尊）。梵字の形態は不正確であり、稚拙な平彫。種子の下に線彫りの浅い蓮座。稚拙な彫り。本板碑群中、唯一の蓮座を持つ。種子の高さ65mm、幅65mm、深さ2.4mm。

#### 板碑No.72（C区）

地上高48.2cm、碑面高47.0cm、幅23.0cm、厚さ7.8cm。石材は頁岩。形態は三角形。頭部は三角形。ほぼ完形。自然石を採取、碑面をは



78図 板碑No.70



79図 板碑No.71



つり、頭部を剥離加工して整形。種子はバン（金剛界大日如来 十三回忌主尊）。仰月点あり。種子の彫りは浅く形態は不明瞭。高さ150mm、幅85mm、深さ3.4mm。

#### 板碑No.73（C区）

地上高52.5cm、幅22.0cm、厚さ8.0cm。石材は粘板岩。形態は両側辺直立。頭部は三角形。ほぼ完形。種子の周囲剥落。自然石（岩層から自然剥離した可能性）の一面を割り、碑面とし、裏面は粗割り。碑面は粗くはつっている。頭部左辺は剥離加工。種子はバン（金剛界大日如来 十三回忌主尊）。葉研彫。しっかりしている。種子の高さ160mm、幅75mm、深さ4.3mm。

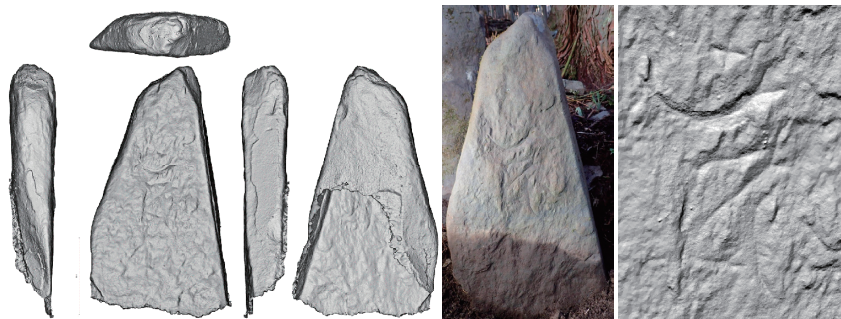
#### 板碑No.74（C区）

地上高63.5cm、幅32.5cm、厚さ12.1cm。石材は頁岩。形態は両側辺上方にすぼまる。頭部は不整アーチ形。ほぼ完形。頭部左破損。下半中央辺剥落。自然石を割り、その面を碑面とす

る。頭部剥離加工（割り面）。上半部側辺剥離加工。種子はサク（勢至菩薩 一周忌主尊）。葉研彫。種子の高さ80mm、幅110mm、深さ5.1mm。下半に右行、左行、それぞれに「アビラウンケン」（胎藏大日真言・大日報身真言）を配する。種子の右下などに「右」のような文字らしきものが数字あるが剥落のため、読めない。

#### 板碑No.75（C区）

地上高66.0cm（残存高）、幅21.0cm、厚さ6.5cm（右側辺）。石材は頁岩。形態は体部すぼまりぎみ直立。頭部は三角形。完形に近い。左下欠損。頭部左、種子の左と下部など剥落多い。自然石を割り、割り面を裏面とする（頭部裏面に自然面残る）。頭部右剥離加工。頂部左に擦痕ある自然面一部に残る。裏面左に粗い剥離加工。側辺剥離加工。種子周辺は平滑であり研磨している可能性。種子はカーン（不動明王 初七日主尊）種子の位置が右に寄っているのは、



80図 板碑No.72

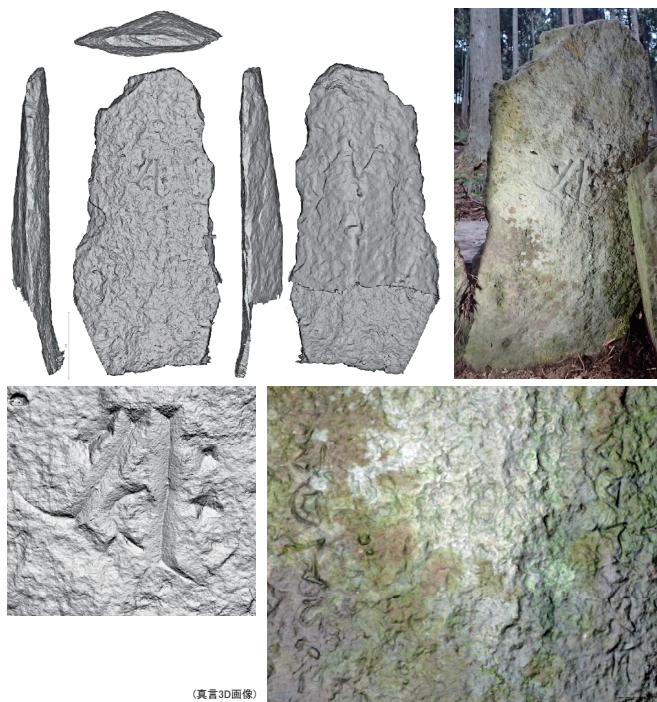


81図 板碑No.73

破損部を避けたためか。種子の高さ90mm、幅55mm、深さ2.7mm。中央部やや左に「而生其」とあり、「応無所住而生其心」（『金剛般若経』）による。「心」の位置は剥落。

#### 板碑No.76（C区）

地上高42.5cm、碑面高41.5cm。幅23.0cm、厚さ6.5cm（右側辺）。石材は頁岩。形態は弯曲しているが直立に近い。頭部は三角形。ほぼ完形。碑面上部右端破損。自然石の一面を割り、裏面とする。頂部左面に若干の剥離加工のみ。種子はバ（金剛藏菩薩？ ※小峰智行『梵字字典』）。「切り画」を表現しているが三画の頭は二画を切っていない。種子の高さ100mm、幅55mm、深さ3.1mm。



82図 板碑No.74



83図 板碑No.75



84図 板碑No.76



# 板碑No.77 (C区)

地上高87.5cm、幅32.0cm、厚さ17.1cm。石材は頁岩。形態は両側辺直立ぎみに上方にすばまる。頭部はアーチ形。ほぼ完形。種子、年号付近剥落。自然石の頭部の剥離加工を丁寧に行い、アーチ形に整形。種子は中心部の剥落が激しいが、バーク（金剛界大日如来 五点具足 十三回忌主尊もしくは二十七回忌主尊）かと考える。頭部尖頭形のため種子を平坦面にとることにより位置は低い。種子の高さ80mm、幅140mm、深さ2.5mm。銘文があり、右行に「宝徳二年」、左行に「十月十七日」、中央に「覚圓禪門」（※「圓」の読みについてはMsnr Yamada氏にご教示いただいた）。『志津川町史』では、宝徳2年とされているが、「二」は右上に小さく彫られており、剥落していないところで完結しているので宝徳四年（1452）年とみる。沢内板碑群最末期の造立であり、町内で

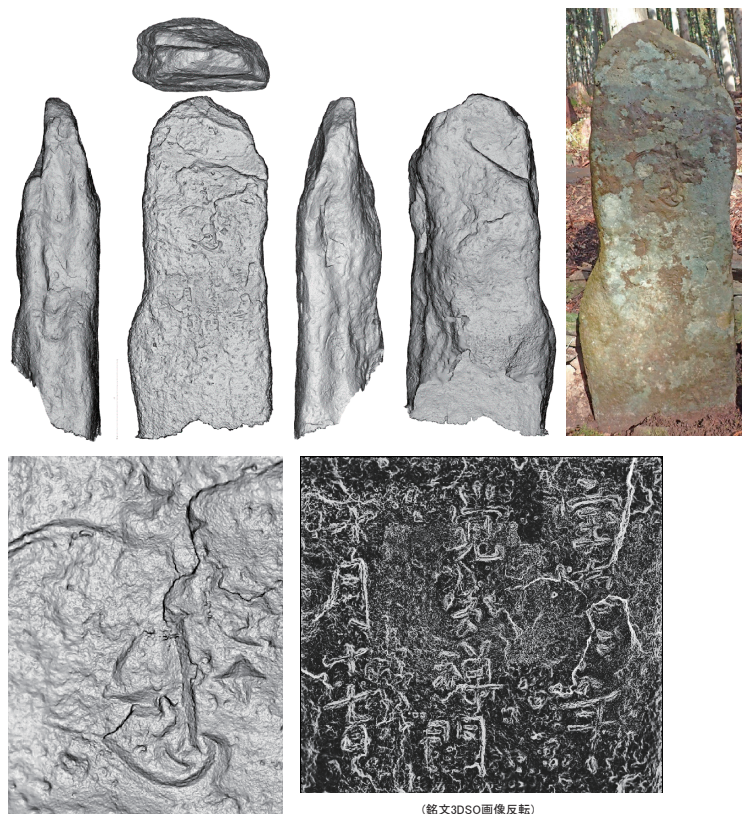
も大船沢板碑群の宝徳三年の板碑とともに最末期の板碑である。

# 板碑No.78 (C区)

地上高71.0cm、幅22.0cm、厚さ7.0cm。石材は頁岩。形態は尖頭形。頭部は三角形。ほぼ完形。種子の左上破損。塔形の自然石を採取し、頂部、頭部背面に剥離加工。種子の周辺は滑らかであり、研磨している可能性。種子はバン（金剛界大日如来 十三回忌主尊）。薬研彫。書き順を正確に表現した「切り画」であるが、底線にやや乱れが生じている。種子の高さ155mm、幅70mm、深さ3.1mm。

# 板碑No.79 (C区)

地上高68.5cm、幅21.5cm、厚さ7.5cm（右側辺）。石材は粘板岩。形態は両側辺直立。頭部は平頭形。ほぼ完形。頭部左破損。剥落が激し

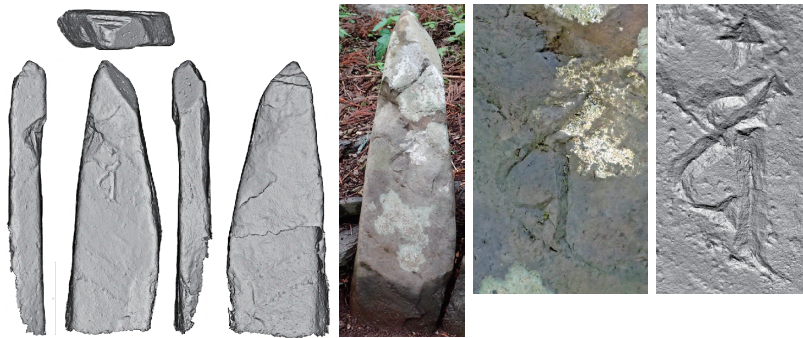


85図 板碑No.77

い。碑面の下端は大きくえぐれ、右端が大きく右方にふくらんでいるので、この上まで埋めることを想定しているとみる。自然石を長方形碑面を意識して頭部折る。一面を割り、裏としている。種子はタラク（虚空蔵菩薩 三十三回忌主尊）。相当剥落。薬研彫の技術は失われ、稚拙な彫りで断面がU字形になったり凹凸がある。種子の高さ80mm、幅95mm、深さ3.6mm。

#### 板碑No80（C区）

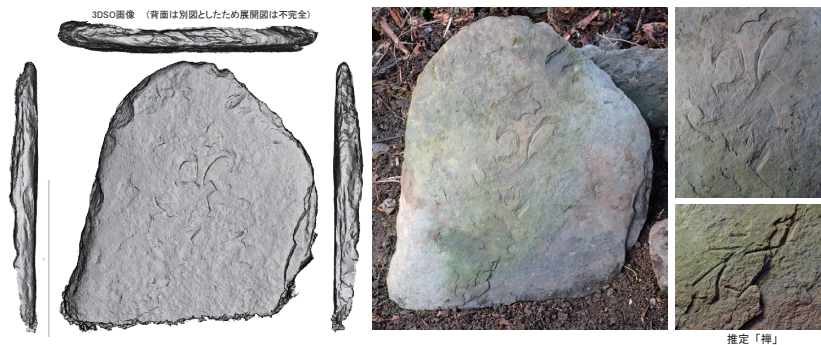
地上高34.0cm、幅25.0cm、厚さ2.0cm。石材は頁岩。形態は体部直立。頭部は偏アーチ形。ほぼ完形。下半欠損（断碑）種子の右から下半剥落。自然石を割り、割った面を裏面とする。頭部剥離加工。側辺剥離加工。種子はバイ（薬師如来 七七日主尊）。粗雑な平彫。種子の高さ135mm、幅95mm、深さ1.4mm。種子の右か



86図 板碑No.78



87図 板碑No.79



88図 板碑No.80



ら下半は剥落が進んでおり、銘文は、碑面の最下部、左下に一字のみ残存。「禪」とみられる。戒名の○○「禪門」か「禪尼」と刻まれていたと想定。

#### 板碑No81（C区）

斜面裾に横位。長さ50.0cm(断碑)、幅15.0cm、厚さ6.8cm。石材は砂岩。形態は両辺直立に近く上方にすぼまる。頭部はドーム形。下半欠損。頂部左辺は近年の剥離。種子の下方剥落。種子の周辺に擦痕があり、研磨している可能性。自然石を採取、碑面の右辺ははつって整形。種子はバン(金剛界大日如来 十三回忌主尊)。仰月点あり。薬研彫を模倣したようなぎこちない稚拙な彫り。中央の凹凸を避けて種子の位置が低い。種子の高さ122mm、幅70mm、深さ2.2mm。

#### 板碑No82（C区）

斜面裾に横位。長さ35.0cm(断碑)、幅31.0cm、

厚さ2.2cm。石材は頁岩。形態は両側辺直立。頭部・下半欠損。右上剥落。自然石を割り、割面を裏面とする。右側辺を剥離加工して整形。種子のまわりに縦方向の擦痕があり、研磨されているとみられる。種子はカ(地藏菩薩 五七日主尊)線彫りで輪郭をとる 刺突痕が顕著で線輪郭のないところははみ出している。種子の一部に輪郭の線彫り。その中に刺突痕が全面にある。いわゆる「先ノミ」の痕跡か。種子の高さ155mm、幅60mm、深さ3.6mm。

#### 板碑83（C区）

斜面裾に横位。長さ62.0cm(断碑)、幅14.5cm、厚さ9.5cm。石材は粘板岩。形態は両辺上方に直線的に広がる。上方に広がるのは本板碑群では珍しい。頭部は平頭形。ほぼ完形。頭部左破損 碑面左端剥落。裏面は剥落が激しい。自然石を割り、表裏とも割りで板状にしている。種子はバイ(薬師如来 七七日主尊)。薬研彫。



89図 板碑No81



90図 板碑No82

種子の高さ125mm、幅65mm、深さ2.7mm。

#### 板碑No84 (C区)

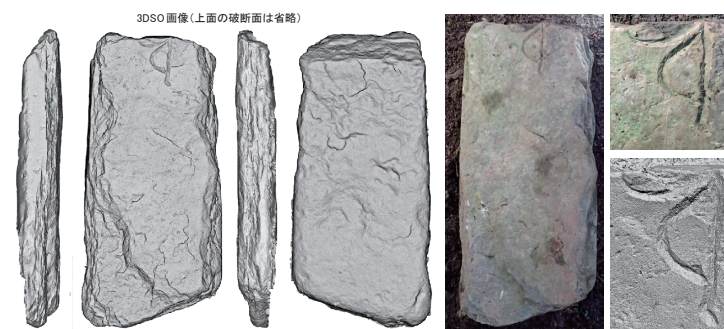
斜面裾に横位。長さ56.0cm(断碑)、幅24.3cm、厚さ5.5cm。石材は頁岩。形態は両辺直立。上部欠損。左辺破損。剥落多い。自然石を採取、右側辺剥離加工(碑面側に自然面残る 左側辺は自然面)。種子の周囲に擦痕が認められ、研磨しているとみられる。種子はバカパン。葉研彫を意識しているが底線はよれよれで稚拙な彫り。種子の高さ100mm以上、幅70mm、深さ1.8mm。



91図 板碑No83

#### 板碑No85 (C区)

斜面裾の木株に立てかけてある。長さ80.2cm、幅41.0cm、厚さ20.0cm。石材は砂岩。形態は不整塔形。頭部は不整アーチ形。ほぼ完形。碑面の頭部とした端左部に自然面残るが、頂部左・左端中央辺一部破損。種子の下端以下は大部分剥落。自然石を利用。種子周辺は薄くはつって整形する他には明確な加工は認められない。種子はキリーク(阿弥陀如来 三回忌主尊)。ラ点異形。平彫。線彫りで輪郭をとり内部を丁寧に研磨。種子の高さ90mm、幅60mm、深さ1.0mm。



92図 板碑No84



93図 板碑No85



### 板碑No86（C区）

斜面裾に横位。長さ57.5cm、幅21.8cm、厚さ3.0cm。石材は粘板岩。形態は尖頭形。頭部はアーチ形。ほぼ完形。種子の下方は薄く剥離している。左下端と裏面頭部に近年の剥離。表裏とも割り面。碑面の左側辺は割り面。右辺は節理面（自然面）。底面は自然面。頭部剥離加工。碑面は下端面に全面、明瞭な斜めの擦痕があり、削り整形痕か。種子はサク（勢至菩薩一周忌主尊）。薬研彫を意図しているが彫りがシャープでなく、幅は狭く浅い。種子の高さ80mm、幅70mm、深さ1.3mm。

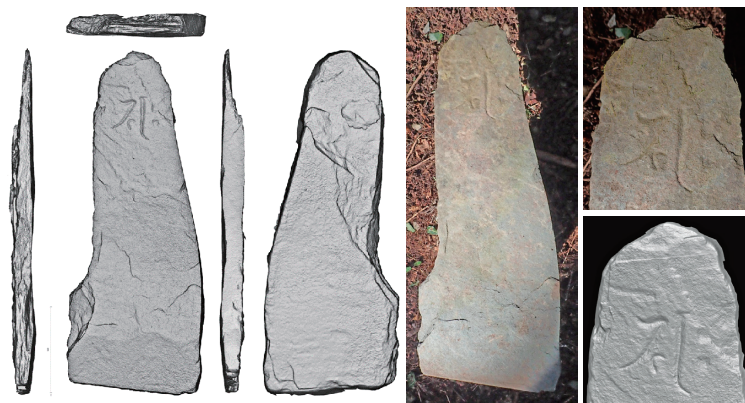
### 板碑No87（D区）

斜面下部に頭部を下に横位裏返し。長さ83.7cm、幅36.0cm、厚さ8.2cm。石材は砂岩（風化している）。形態は不整長台形。頭部は平頭形。完形。種子の下方はほとんど剥落。右側辺のこぶ

下は製作後自然剥離した可能性もある。自然石を利用。側辺は自然面。右側辺のこぶの下は自然剥離か。裏面は剥離面でこぶ状の凸部がある。碑面は剥離面を利用。種子はタラーク（虚空蔵菩薩 三十三回忌主尊）薬研彫（浅い）。種子の高さ105mm、幅165mm、深さ1.5mm。

### 板碑No88（D区）

斜面下部で木下部に立てかけてある。長さ34.7cm（残存長）、幅25.5cm、厚さ2.5cm（右側面）。石材は粘板岩（灰色 ※写真は雨上がりの直後撮影）。形態は上方に直線的にすぼまる。頭部はアーチ形。下部欠損。頭部前面に新しい剥離。自然石を利用。頭部剥離加工。種子はタラーク（虚空蔵菩薩 三十三回忌主尊）薬研彫を意図しているが不完全、粗雑な彫り。種子の高さ55mm、幅90mm、深さ2.1mm。



94図 板碑No86



95図 板碑No87

### 板碑No.89 (D区)

斜面下部で裏返し頭部上状態。No.88に隣接。  
長さ70.5cm (残存長)、幅21.7cm、厚さ8.2cm。  
石材は粘板岩。形態は両側辺直立。頭部は三角  
形。完形に近いが頂部と頭部右辺は欠けてい  
る。頭部前面は階段状に破損。種子より下方も  
剥落激しい。板状の自然石 (両側に節理面 (自  
然面)) の一面を割り碑面とする。頭部剥離加  
工。種子はカ (地藏菩薩) もしくはカーン (不  
動明王)。薬研彫 (浅い)。種子の高さ140mm、  
幅75mm、深さ2.5mm。種子の下に蓮座状痕跡。  
No.71に似るも、剥落途上の自然痕跡の可能性も

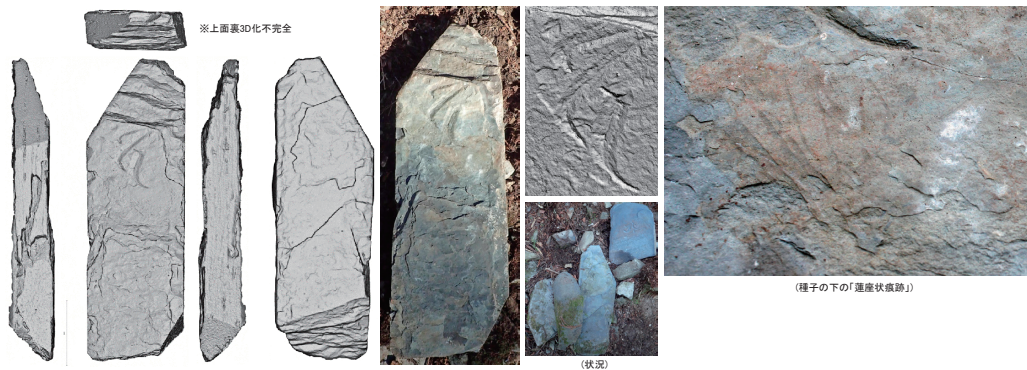
ある。

### 板碑No.90 (D区)

斜面に横位。No.89の左隣に頭部を上裏返  
し。長さ43.5cm (断碑)、幅16.0cm、厚さ11.0cm。  
石材は砂岩?。残存部は紡錘形。頭部はドーム  
形。下半が斜めに欠損。円磔を利用。種子周辺  
には縦方向の擦痕があり研磨している可能性。  
種子はバイ (薬師如来 七七日忌主尊)。ワラ  
ビ形点が下方に下がり、二画を切る異形で末端  
に葉形の窪みを付ける。種子の高さ135mm、  
幅55mm以上、深さ2.3mm。



96図 板碑No.88



97図 板碑No.89



98図 板碑No.90



**板碑No91 (D区)**

斜面上部西側に横位。頭部下に裏返し。長さ105.8cm、幅32.7cm、厚さ13.1cm。石材は砂岩?。両側辺直線的に頭部方向に広がる。頭部は偏三角形。ほぼ完形。頭部前面剥落。基部剥離整形。板状の円礫を利用。上半部をはつて平坦面を作っている。上部右端に削り痕。いわゆる河原石利用における整形痕跡の明瞭例。種子はカ(地藏菩薩 五七日主尊)。薬研彫。種子の高さ120mm、幅70mm、深さ3.7mm。

**板碑No92 (D区)**

斜面上部中央付近に横位。頭部上で裏返し。長さ51.5cm、幅32.6cm、厚さ3.5cm。石材は粘板岩。両側辺直線的にすばまる。頭部は三角形。ほぼ完形。裏面右半剥落。自然石の一面を割り、碑面とする(頂部と底部の一部に自然面残る)。頭部の左右剥離加工。側辺連続剥離加工。

工。裏面上部剥離加工。右下端より放射状にフィッシャー。種子はサク(勢至菩薩 一周忌主尊)非常に浅いU字形となっており、薬研彫の下端ライン消失して皿彫状になっている。種子の高さ65mm、幅80mm、深さ1.4mm。

**板碑No93 (D区)**

斜面東部中央付近に横位。頭部上で裏返し。長さ61.5cm(残存長)、幅35.5cm、厚さ8.5cm。石材は頁岩。形態は右辺直立、左辺外弯。頭部は三角形。下端欠損。碑面の下半ところどころ剥落。頭部左、頭部右下に新しい剥離。自然石を利用。碑面上部を剥離加工。頭部剥離加工(頭部表裏面)。左側辺下部剥離加工。左側辺裏面加工。種子はサ(観音菩薩 百か日忌主尊)浅い逆台形の断面。壁と底の接線に平ノミ状の刺突痕跡。種子の高さ105mm、幅128mm、深さ1.4mm。



99図 板碑No91



100図 板碑No92

# 板碑No.94 (D区)

斜面上部東辺に斜面に張り付いたように立つ。原位置を大きく動いていない可能性。長さ67.0cm(残存高)、幅36.5cm、厚さ8.5cm以上。石材は頁岩。形態は両辺直立。上半欠損。両側辺は節理面(自然面)。割り面を碑面としている。碑面のほとんど剥落しているが、残存碑面のほぼ中央に「■ 弥勒尼」と刻む。



101図 板碑No.93

# 板碑No.95 (D区)

斜面上部東辺に帯状に平場に近い部分があり、斜面に張り付いたように並んでいる板碑などの一つ。地上高46.0cm、幅37.5cm、厚さ3cm以上。石材は頁岩。形態は両辺外湾すぼまる。頭部はアーチ形。円礫を利用。加工は認められない。種子はサ(観音菩薩 百か日忌主尊)。薬研彫を意図しているが粗雑で浅い。種子の高さ80mm、幅90mm、深さ1.0mm。



102図 板碑No.94



103図 板碑No.95



# 板碑No.96 (D区)

斜面最上部中央辺のわずかな帯状の平場に立つ。原位置に立っている可能性がある。地上高57.0cm、幅35.0cm、厚さ4.5cm。石材は頁岩。形態は両辺外弯すぼまる。頭部は三角形。ほぼ完形。全体的に風化磨滅。碑面は自然面。裏面は割面。頭部剥離加工。両側辺の一部に剥離加工。種子はサク(勢至菩薩 一周忌主尊)。剥落磨滅。薬研彫を意図しているが彫り方は涅槃点底の十字がないなど不整で浅い。種子の高さ120mm、幅160mm、深さ1.5mm。

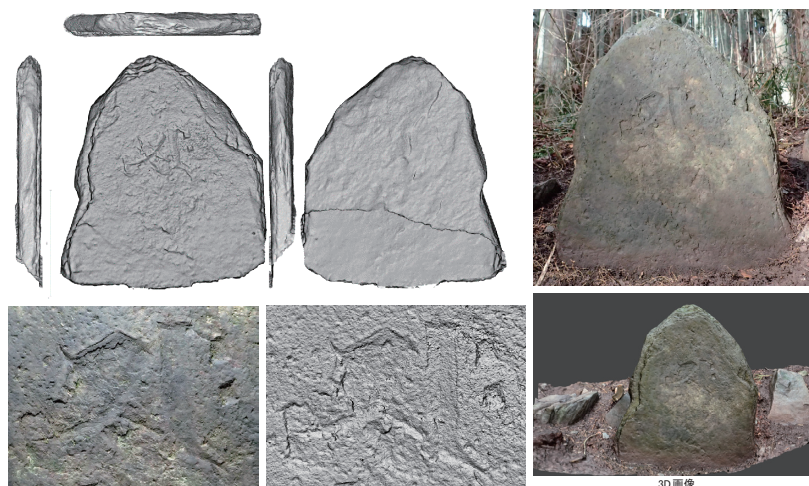
14.5cm、厚さ4.5cm。石材は頁岩?。形態は両辺直立。頭部は三角形。ほぼ完形。碑面の右下の一部破損。全体に磨滅している。円礫を採取し、頭部左辺剥離加工。斜めの石目が種子のレベルだけ消えており、石目と異なる擦痕も右上・下に見えるので研磨しているとみられる。種子はカ(地藏菩薩 五七日主尊)。種子自体は簡略化され、底面は乱れながらも線状になっているが浅く、輪郭不鮮明。種子の高さ110mm、幅55mm、深さ1.6mm。

# 板碑No.98 (C区)

地上高58.0cm、幅26.0cm、厚さ9.5cm。石材は頁岩。形態は長方形。頭部はほぼ平頭形。ほぼ完形だが、碑面はほぼ剥落。自然石を利用。

# 板碑No.97 (D区)

斜面最上段左端から2番目に立つ。原位置に立っている可能性がある。地上高28.3cm、幅



104図 板碑No.96



105図 板碑No.97

全体に剥落が顕著。種子は、剥落のため肉眼ではほとんど見えないが、強力ライト照明及び3D作成によりサ（観音菩薩 百か日忌主尊）と判明。薬研彫だが浅い。種子の高さ60mm、幅95mm、深さ3.0mm。

#### 板碑No99（D区）

No93の下方、斜面中ほど東寄り付近で碑面上部を下に横位下半埋没。長さ49.5cm（残存長）、幅14.0cm、厚さ7.0cm以上。石材は頁岩？。上部欠損。自然石を利用。残存部の上部左に「而生其心」と『金剛般若経』の偈が刻まれている。右側の剥落部に二字分の痕跡があり、同経の「応無所住」が刻まれていた可能性が高い。偈

の間にそれより下げ、ほぼ中心線上に「世久禅門」と刻まれる。「世久禅門」は、A区No46の「世久」と同一人の可能性がある。

#### 板碑No100（D区）

最上段Cブロックの板碑No97の右二つ目。斜面に寄りかかるように立つ。地上高40.0cm、幅22.5cm（左側面の計測可能な個所）、厚さ4.0cm。石材は頁岩？。形態はU字形。頭部はドーム形。右側面下部欠損。種子の大部分とそれ以下は剥落顕著。種子の上端のみ残存し、本板碑群の種子形と重ねるとサクもしくはバクに近似する。種子の高さ25mm以上、幅40mm、深さ2.3mm。



106図 板碑No98



107図 板碑No99



# 板碑No.101 (D区下部)

板碑状の石(立石No.10)の左隣に斜面側に大きく傾いて立つ(観察後傾き補正)。地上高43.5cm(残存高)、幅35.5cm、厚さ7.5cm。石材は頁岩。頭部左半欠損。下半欠損。薬研彫の種子の下端のみ残存。字体はNo.89(カカカーン)に近似するも断定できず。種子の高さ85mm以上、幅50mm以上、深さ2.6mm。

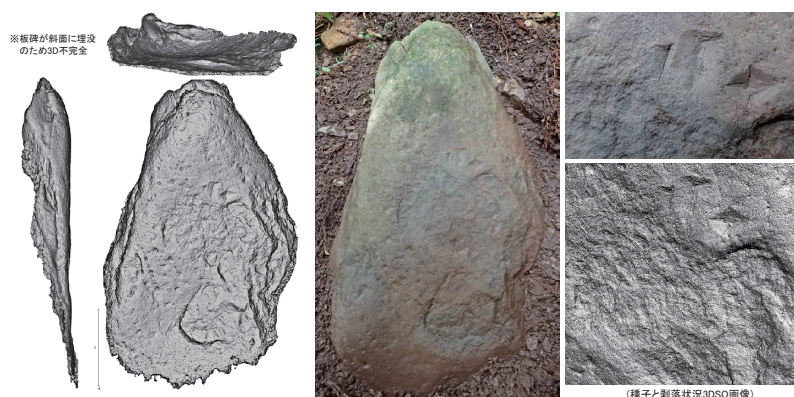
# 板碑No.102 (D区下部)

板碑No.101の西直近。碑面を上、種子を上にして横位(角度36.3°は本来の斜面の角度に近い)。地上高83.0cm、幅36.5cm、厚さ5.0cm。石材は粘板岩。形態は塔形。頭部は不整アーチ形。左上剥落。成形は碑面のみを観察のため不明であるが、割り面を碑面としている。種子は、カ(地藏菩薩 五七日主尊)。薬研彫だが非常に浅い。種子の高さ145mm、幅60mm、深さ0.9mm。

# 板碑No.103 (C区)

板碑No.73の右隣りに立つ。地上高76.0cm、幅24.5cm、厚さ4.0cm(頭部)。石材は頁岩。形態は隅丸長方形。頭部は平頭形。碑面右剥落。下部は左側に寄り小さくなる舌状の形をしており、色が茶系である。本来の埋設レベルを反映していると考えられる。成形は自然石を利用。右側辺は裏から剥離加工して整形。種子は、バン(金剛界大日如来 十三回忌主尊)。薬研彫。字体、彫りがしっかりしており15世紀の前葉以前か。種子の高さ110mm、幅60mm、深さ2.4mm。

種子の下に「道金禪門」。「道」と「金」の間が空くが、これはキズ(右)に接するのを避けたものとする。「道」は「為」の可能性もある。「道金禪門」銘はNo.18. 56がある。ただし、「道」はNo.18は楷書で刻んでおり、不明瞭なNo.56もその可能性が高い。



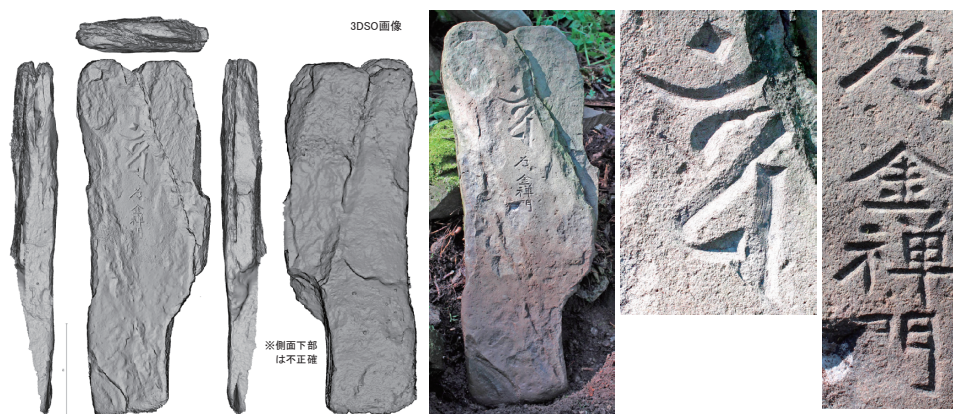
108図 板碑No.100



109図 板碑No.101



110図 板碑No.102



111図 板碑No.103

## 6 C区の「板碑状の石」の検討

周囲に散在する板碑を立て並べたとされる斜面裾のC区にもA、B区と同様に種子や銘文が認められないが、加工などから板碑と認定してよいと考えるものがあり、以下の4基を板碑と認定した。ただし、これ以外についても最終的に板碑と考えられるものは多数あり、後述する。

### 板碑No.104 (C区)

板碑No.76の左に立つ。地上高53.5cm、幅10.5cm、厚さ9.0cm(左側面)。石材は砂岩?。形態は逆U字形。頭部はアーチ形。ほぼ完形。自然石を利用。頭部前面に新しい剥離。通常、

種子を入れる場所に複数の縦方向、帯状の削りが認められ、やや斜めのものもあり、その形態から何らかの種子を刻もうとした可能性もあるが、同様の削り痕跡は頭部の新しい剥離の下にも若干認められるため、種子を刻む前の整形のための削りであった可能性もある。削りの集中範囲の高さ100mm、幅55mm、深さ1.2mm。

### 板碑No.105 (C区)

地上高72.0cm、幅19.2cm、厚さ11.5cm。石材は砂岩?。形態は直方体?。上半左欠損。直方体状の自然石を利用。種子が想定される位置は左部が欠損しているが、残りの右部に多数の刺突による全体として、種子のようにも見える痕跡がある。刺突による種子は他の板碑にもみ



られるが輪郭自体不明瞭な点は異なる。また、他の板碑の刺突はほぼ一定の大きさで回転した引きずりが認められるが、丸く深い点が特異である。また、想定される明瞭な種子が想定されないことから種子とは断定できない。全体としては板碑ではないと断定できないので板碑の

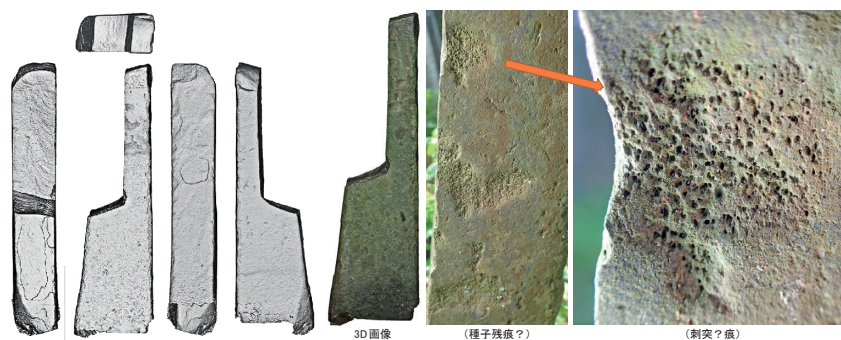
範囲に含めた。種子状範囲の高さ127mm、幅38mm以上、深さ2.4mm。

#### 板碑No106（C区）

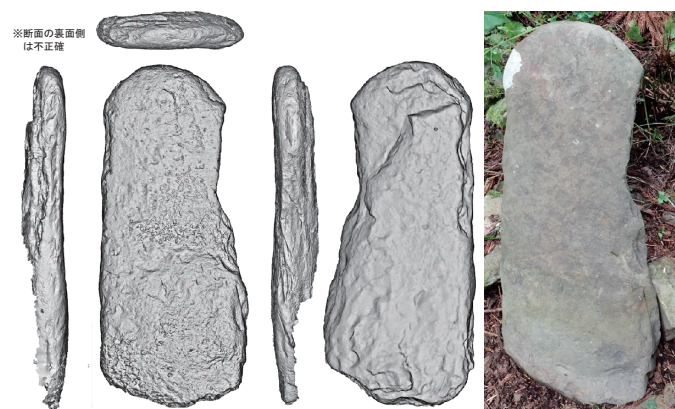
斜面東側裾に位置し、No101の左隣に横位。地上高60.0cm、幅24.0cm、厚さ3.5cm。石材は



112図 板碑No104



113図 板碑No105



114図 板碑No106



115図 板碑No.107

頁岩。形態は逆U字形。頭部はアーチ形。完形だが、碑面上半部剥落。自然石を採取し、頂部剥離加工で整形。種子は剥落により消失した可能性が高い。

#### 板碑No.107（C区）

斜面西側裾に位置し、No.98の右隣に立つ。地上高103.7cmと本板碑群で最も高い。幅21.6cm（基部）、厚さ15.1cm。石材は頁岩。形態は尖頭形。頭部は三角形。完形だが、全面剥落が顕著。自然石を採取。頂部の前面と後面、小さく剥離加工か。種子想定範囲も剥落している。

## 7 考察

現況調査の結果、板碑107基を認定し、従来把握されていなかった背後の斜面が板碑群の原位置である可能性が高いことが判明した。紀年銘のある板碑は14基あり、最古は応永10（1403）年、最新は、宝徳4年（1452）年と考えている。年号は応永、永享、嘉吉、宝徳に渡り、紀年銘では応永末年から永享末年（1423年～1434年）まで12年の空白がある。以下、紙数の関係で、全体としての基礎的な事項について記す。

#### (1) 石材と加工（134図）

石材については正確には能力不足から将来の専門家の鑑定に委ねるとして、頁岩・粘板岩系の薄く板状に割れやすいものが多く、そうでないものが少ないという傾向がある。断定できないものを含めて多い順に頁岩77基、粘板岩（断面の薄板状が顕著なもの）19基で登録した板碑の89%を占める。その他は砂岩8基、花崗岩2基、泥岩1基である。これらの岩石の多くは、原位置とみられる斜面の裾から約60m余の水尻川の河原（116図）に見かける（厳密な対応はできていない。）。しかし、中には板碑No.88のいわゆるスレートは登米の玄昌石にも似ており、



116図 水尻川の河原



50cmに満たないような石材は、周辺に限定されるわけではない。

まとめ表の「成形」については、板碑としての形を作る段階の行為を痕跡から観察した。本板碑群の剥落の進行のため、困難であったが、大別すると4類になる。①「自然石A」は、いわゆる河原石の形状を保っているもの（可能性あるものを含め50基）、②「自然石B」は岩層から自然に乖離・剥離した形状を保っているもの（明瞭な割り痕は認められなかった）、(21基)③「割石A」は背面を割り取っているもの(14基)、④「割石B」は表裏を割り取っているもの(12基)、⑤「割石C」は割った面を碑面としているもの(10基)である。

次の「加工部位」については、ほとんどが剥離加工であり、製作工程としては「整形」するための痕跡と考えている。頭部が存在する板碑96基の内、頭部に加工痕があるものは70基あり、73%に達する。このことは「頭部形態」が不整も含めて46基が三角形であり、次いでアーチ形20基、ドーム形6基、合わせて72基、79パーセントが広義の三角形、いわば山形になっていることと関連すると考えられる。他に平頭形が19基ある。当時の「石塔婆」たる意識としては種子を刻む以外に、極力、頭部は山形を志向し、もしくは平頭形が念頭に置かれたと考えられる。

また、側辺への加工は20基に認められ、側辺をできるだけ直線的にする意図と考えられる。近くの水尻川の河原は、地主さんのお話では様々の石が多数あり、石を採取する人が多かったという。ここが主たる板碑素材の採取地で

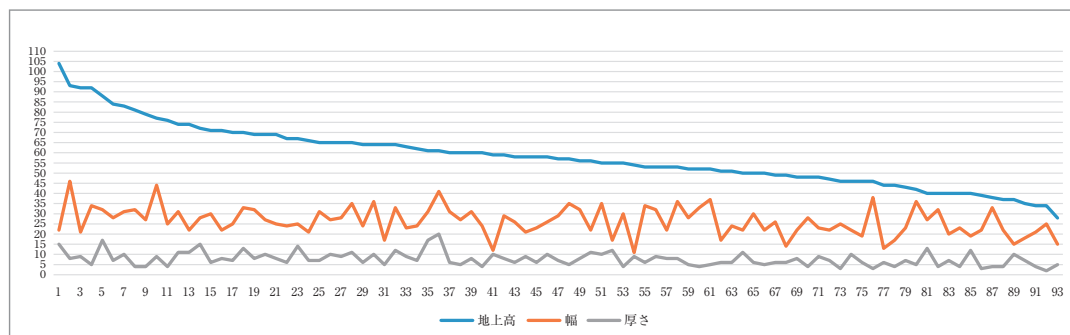
あったとすれば、いわゆる河原石のような丸みのある石は、塔形、三角形で碑面とする平坦面のある石が採られたと考えられる。これらは若干の頭部加工で済まされている。また、岩層から乖離した板状の石が河原に入り込んでいるのも見受けられるので、これらの場合は頭部加工をしたり、平頭形として使っている。断面が平行四辺形のものは右に傾斜するものが多いが、左に傾斜するものも相当数ある。節理面が片方のみでもう片面は割り取って板碑形にしているものも相当数ある。中には地上部のみ両側辺がほぼ平行で、地中に埋める部分は大きくふくらんだものもある。

碑面を整形しているものは9基認められた。No.18のように下端に段を作り、その上を平坦に整形し、銘文を刻んでいるものや、No.91のように種子のみでありながら、碑面をはつって平坦に作り出しているものがある。なお、応永10(1403)年銘No.8は碑面の外縁を縁取り状に削っている事例である。

擦痕から碑面を研磨していると考えられた板碑は21基ある。剥落のため断定できなかったが裏面との比較しての平滑さなどから研磨している可能性を持つものは他に15基ある。いずれも凹凸を消すような研磨ではなく、種子や銘文を刻めるようにする程度である。碑面を他面から特化する意味合いかと考えておきたい。

## (2) 法量

板碑の地上高、幅、厚さを計測可能な93基についてグラフ化したのが117図である。地上高



117図 地上高・幅・高さ

の最高は104cmで最低は28cmであり、この間に満遍なく分布している。後述するが偈や位号を刻む板碑は地上高50cm以上に多い傾向はあるものの、地上高34cmの板碑に位号と考えられる「禪」、37cmの板碑にも偈「而生其(心)」が刻まれている。幅は46cmから11cmであるが、No35は幅17cm、高さ64cmの卵塔形の石に偈「一切善惡」／「都莫思量」、中央に「母大聖靈之應永十一(1404)年十月廿三日」／「甲／申」／「敬／白」と刻まれるなど法量の大きさと刻まれる内容はさほど比例していない。

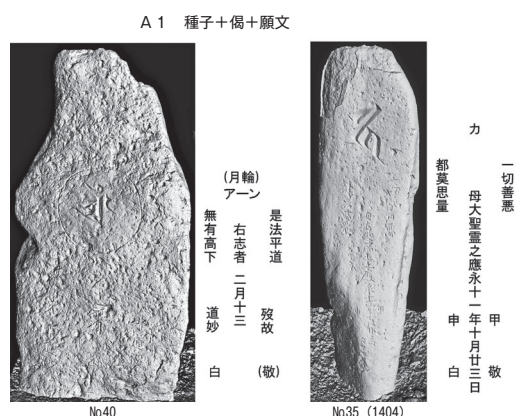
### (3) 板碑の碑面構成

沢内板碑群の碑面構成については種子と碑面の各種要素の組合せからA～E類に分類できる。A類は偈のある板碑で願文もしくは年号年月日もしくは戒名を伴う。A1類は「種子+偈+願文」(「右志趣者」もしくは「右志者」及びNo35の「母大聖靈之」を含める)からなる板碑で、戒名を刻まないA1a類(35)と戒名のあるA1b類(No.6. 22. 32. 40)に分けられ、不明のNo12を含め計7基である。この内、完形では本板碑群唯一月輪を持つ種子のNo40は月日のみ、No32は年号年月日が認められない。

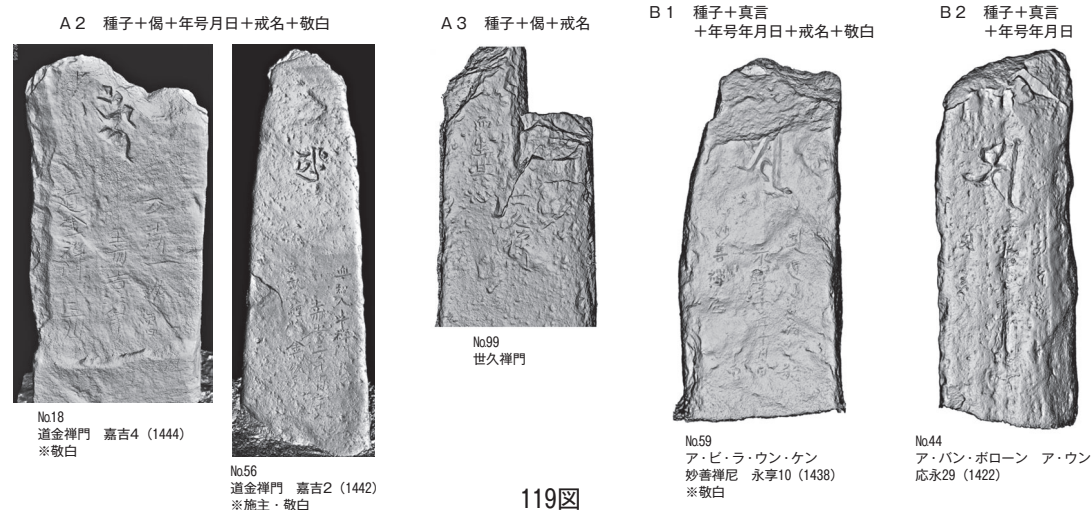
A2類は「種子+偈+年号年月日+戒名+敬白」から成る板碑でNo18(「道金禪門」「敬白」)、56(「道金禪門」「施主 敬白」)の近似性ある

板碑である。A3類は「種子+偈+戒名」である。No99の偈「応無所住 而生其心」の下、中軸線上に「世久禪門」と刻む小形板碑(頭部欠損)が相当する。なお、15. 75はA類と考えられるが欠損のため細分は不明。偈が確認された板碑は11基である。また、A類には女性とみられる戒名は認められない。なお、図の3D画像ソリッドは銘文を見えやすいように強調処理をしている。

B類は真言のある板碑である。B1類は「種子+真言+年号年月日+戒名+敬白」で「アビラウンケン」が右行、「妙善禪尼」が左行に配されるNo59である。B2類は「種子+真言+年号年月日」でNo44である。B3類は「種子+真



118図



119図



言」のNo1. 74であるが左右の真言と剥落の顕著さから本来はB 1かB 2類の可能性を持つ。真言が確認された板碑は4基である。

C類はC 1類が年号年月日を含む簡潔な願文（「右志趣者」）を持つNo10。C 2類が年号年月日と戒名を刻む板碑No77で宝徳4年と推定した最新の板碑である。C 3類は年号年月日のみ刻む板碑No 8（応永10（1403）年の最古の紀年銘）。28. 47. 52. 57である。いずれも種子の軸線下部に一行に配されている。C類は7基である。

D類は「種子+戒名」である。位号ある戒名を刻むNo 9. 19. 25. 31. 41. 60. 65. 70. 103や残存する「禪」銘から禪門あるいは禪尼と推定

されるNo80があり計10基である（「珍禪尼」銘以外剥落しているNo94除く）。また、位号を記さないNo53の「逆修妙清」は本板碑群唯一の「逆修」銘である。No54の「道秀」については本板碑群では男性の「道」が頭に付く位号を持つ戒名であるものが多いことと共通する（女性は頭に「妙」を付けている者が多い。なお、No46の「世久」銘は、偈を伴う板碑No99の「世久禪門」と同一人の可能性がある。D類は計13基である。

E 1類は種子+蓮座の板碑である。確実なのはNo71のみで、蓮は刻線で稚拙である。他にNo 78があるが剥落のため断定できない。E 2類は種子のみの板碑で61基と最も多い。

分類可能な95基のうちA類は12%、B類は4%、C類は6%、D類は14%、E類は64%である。また、戒名が刻まれる板碑のうち、女性とみられる戒名で種子以外の要素が付加されているのは真言、年月日が記されているNo59の「妙善禪尼」のみであった。沢内に「石塔婆」を造立した集団では、女性の社会的地位が男性に比べて相対的に低いのかもしれない。

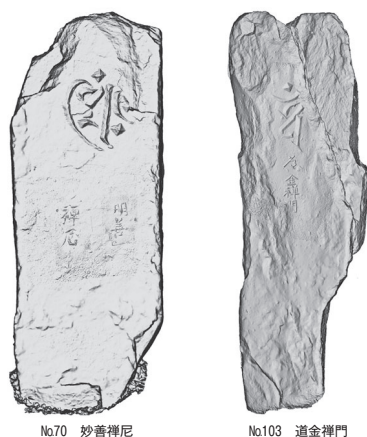
碑面の構成の変遷について、本板碑群の東南約2.4kmに位置する至徳2（1385）年銘妙樹禪尼造立板碑（碑面高1.16m）と比較しておきたい。この

C 1 種子+願文 C 2 種子+年号年月日+戒名 C 3 種子+年号年月日

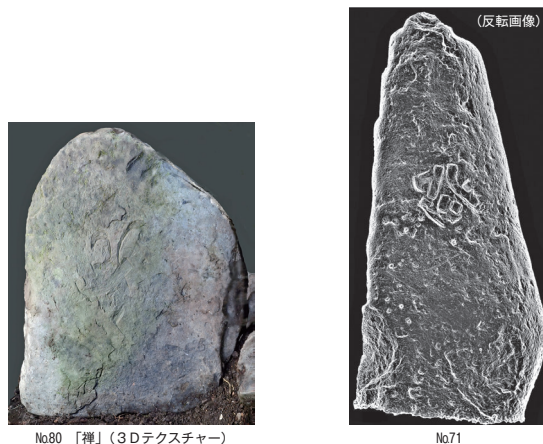


120図

D 種子+戒名(位号)

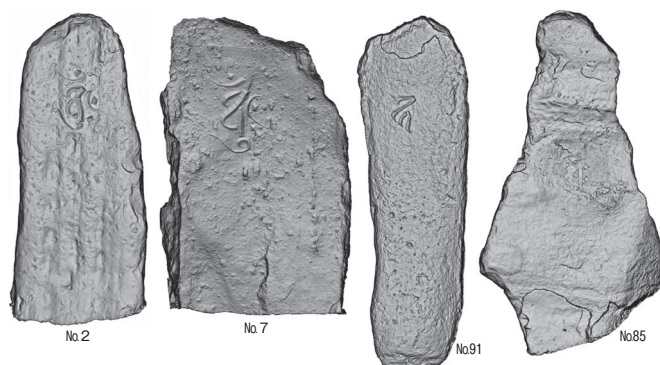


E 1 種子+蓮座

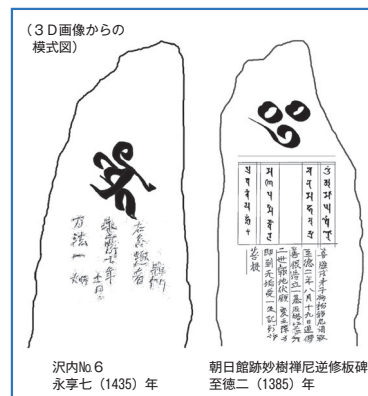


121図

E 2 種子のみ



122図



123図

板碑は禅宗系の逆修板碑として貴重かつ重要な板碑であり、願文が年号年月日を含み、本来の姿に近い稀有な板碑であるが基本的に伝統的な碑面構成を踏襲している。詳しくは拙文<sup>7</sup>をご覧ください。

まず、妙樹禅尼逆修板碑は種子の下に光明真言（追善板碑の場合は「偈」が多い）、その下に願文という上下の構成がしっかりしているが、左図の本板碑群のNo. 6（1435年銘・地上高61cm）を例にとれば、種子の下端に接するように右から〇〇禪門、「右意趣者」年号月日、簡潔な偈が並んでいる。本板碑群のA. B. C. D類は板碑の基本要素から偈もしくは真言、願文のエッセンス（年号月日・仏塔造立の功德を受ける主対象者、「右意趣者」）を階層的、恐らく造立経費のランクを示していると考えられる。時代的な特色としては、南北朝期から室町期への50年の間に碑面構成の簡略化が進み、対象者（〇〇禪門）の位置付けが上昇したと考えられる。

次に沢内板碑群の中での変化であるが、A 1類の応永11（1404）年銘No. 35板碑は卵塔形の小型板碑ながらも種子の下に偈、中央に偈より下げて「母大聖霊之」、続けて「應永十一年十月廿三日」と干支を年の右左に配し、下端に「敬白」を記すという板碑の本来的な願文のルールに基づいている。次いで同じくA 1類の応永24（1417）年銘No. 22板碑では、そのルールを踏襲しつつも、下段右に「禪門」名が登場する。

さらに、A 2類の嘉吉3（1443）年No. 56板碑銘になると禅門名の位置は上昇し、偈の下に左右に配置され、その下に「施主／敬白」が左右に配される。A 3類の種子＋偈＋戒名（中軸線上）のNo. 99は推定地上高50cm程度の板状自然石タイプでA 2類と同様の時期の可能性がある。そしてC 2類の宝徳4年（1452）とした最末期のNo. 77板碑に至ると、種子の下に禅門名が刻まれ、年号は右左に配される。このように板碑における禅門・禅尼名の位置づけの向上が半世紀の間に認められる。これらの戒名については被供養者と考えておきたい。「没故／道妙」と刻まれたNo. 40例は死者であるが、月日のみで年号は刻まれない。「逆修妙清」と刻まれたNo. 53例は生者、造立者である。逆修と刻まれたのは1例であっても、実際は種子だけの板碑に逆修仏事が潜在する可能性はないだろうか。15世紀前半期には、真言宗の影響を受けた十三仏の逆修仏事が禅宗においても盛行していることからその可能性を検討しなければならない<sup>8</sup>。

#### (4) 種子（124～130図参照）

##### ① 彫法・形態からみた変遷

本板碑群の年代は紀年銘のある板碑からみれば応永10（1403）年（以下、西暦で表示）から1452年の49年間だが、種子は彫法、形態、技術レベルからみれば多様であり、大別5類に分けられる。A類（10基）は典型的な薬研彫であり、No. 32、103はいわゆる「切り画」が明瞭である。



B類（29基）は底線のラインが乱れ、形もくずれた薬研彫、C類（11基）は断面の薬研彫のV字形は意識されているものの梵字の形が変形し、専門工人によるとは考えられないもの、D類（8基）は種子の形態は意識されているものの断面が非常に浅く皿型になっているもの（いわゆる「皿彫」）、E類（6基）は底が平坦化したいわゆる「平彫」である。

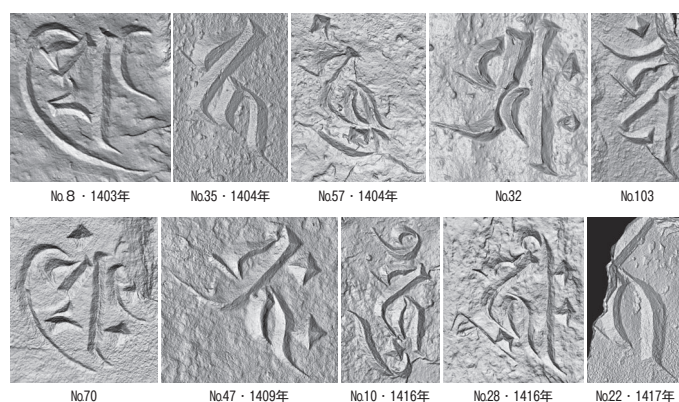
紀年銘のある板碑により時間軸でみると、応永10（1403）年から応永24（1417）年までの種子はほぼ典型的な薬研彫（A類）である。応永10（1403）年銘のNo.8のマンの荘嚴体<sup>9</sup>は碑面の中での面積が大きい。

応永29（1422）年銘の種子サ（No.44）とカ（No.52）はいずれも底線ラインがよれよれになっている（B類）。これは薬研彫の彫法が未熟であることによると考えられる。その傾向はワラビ形点の下端が右下に達し、全体としては軽やかな異形の永享7（1435）年銘No.6のバイの底線も同様である。なお、この異形のバイは他にNo.23. 61. 90があり、No.11. 21. 68. 83の通常形と共存している。類例は石巻市桃生町永井の応永26（1419）年銘板碑、同じく永井岩の沢の永享7（1435）年銘板碑<sup>9</sup>にある。また、追波川河口に位置する14世紀半ばから15世紀前半の大規模な小型板碑群である長塩谷板碑群<sup>10</sup>（石巻市北上町十三浜）においては応永10（1403）年銘板碑、永享2（1430）年銘板碑に認められ、この異形と通常のタイプが両方ある。さらに、

岩手県一関市藤沢町域の板碑においても両者の共存を確認している。年代の詳細については課題である。

永享10（1438）年銘のサ（No.59）は緩やかな曲線を描けず硬直化している。嘉吉3（1443）年銘のアーンク（No.56）及び翌年銘のカーン（No.18）では薬研彫を意図しているものの専門的な彫法は失われて変形している（C類）。宝徳4（1452）年銘とみられる紀年銘としては最新のバーク（No.77）は遺存状況が悪く判然としないが、一応、彫法は薬研彫（B類）となっており、B. C類が15世紀第二四半期頃には並存していたのではないかと考えられる。専門職人に依頼したものとそうでないものがあつたのではないだろうか。依頼主も土豪クラスと名主クラスの差があつたのかも知れない。

時間軸からは手がかりがないD類（皿彫）、E類（平彫）は、それなりの完成形を持つ平彫のNo.85を除けば技術レベルは低く、薬研彫の退化の末期と考える。D類においても薬研彫の輪郭を保つものと逸脱したもの（No.72. 97. 102）がある。前者はB. C類と共存した可能性がある。したがって15世紀第二四半期の頃はさまざまな彫法、形態の種子を持つ板碑が共存している。多様な階層、出自の人々が付近に來住したことの反映である可能性がある。E類の平彫の種子を持つ板碑はNo.80（地上高34cm）に「禪」の字が残存していることから、「戒名」を刻むレベルを保持している。専門職人に依頼しない

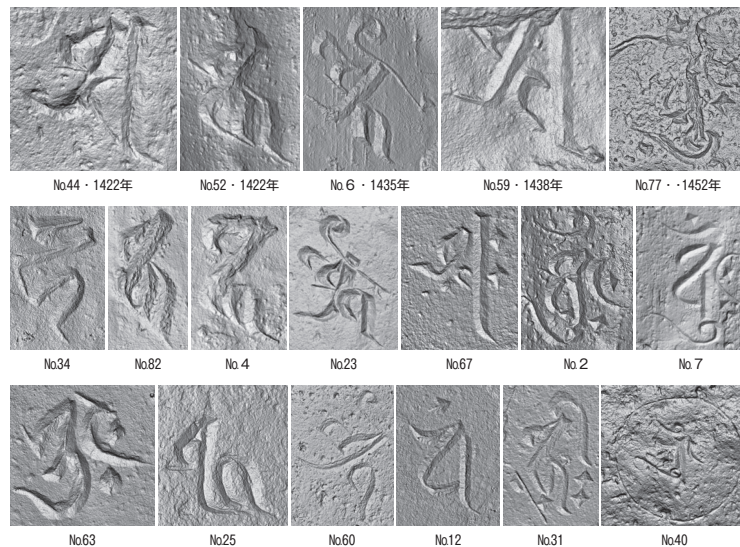


124図 A類（薬研彫a）（画像は3Dソリッド）

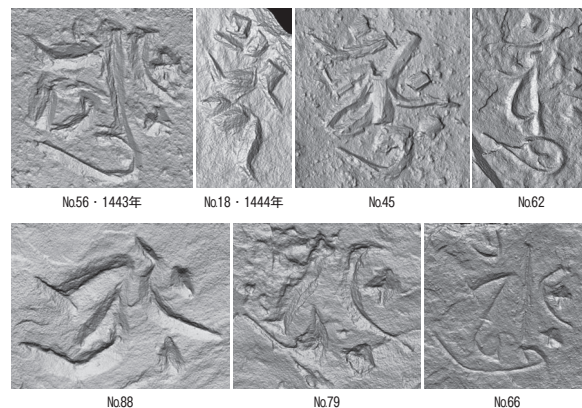
(できない) 下層の人々が参画している可能性がある。彼らを「禅門」「禅尼」として把握し、「石塔造立供養」に参画を図った当時、当地域の仏教の在り方が伺うことができる。年代としては15世紀第二四半期以降、紀年銘板碑の消失した15世紀後半頃の所産の幅で可能性を考えておきたい。周辺地域での平彫の種子の例は石巻市桃生町神取<sup>11</sup>にあるが、年代は不明である。「平彫」の分布・年代については今後の課題である。本板碑群のNo77の「バーンク」は薬研彫りは保持されている。また、128図に本板碑群の東南0.9kmの大船沢板碑群の宝徳3(1451)

年の「カ」を掲げた。本板碑群の15世紀初頭の「カ」から形は崩れていても薬研彫はしっかりと保持されている。本板碑群を形成した人々の中に薬研彫りを専門家に依頼しない(あるいは「できない」)一定数の人々が居たこととなる。

以上のことを種子の彫り痕跡(130図)からみると、1403年銘No8は目視では彫り壁面はつやややかであり、細部をみると長い画は輪郭と並行、短い画には直交する細かな線状削り痕がある。1435年銘のNo6では削り痕が示す工具の使い方は同様であるが、痕跡の凹凸が顕著である。顕著な変化は1443年銘のNo56にみられる。曲線を

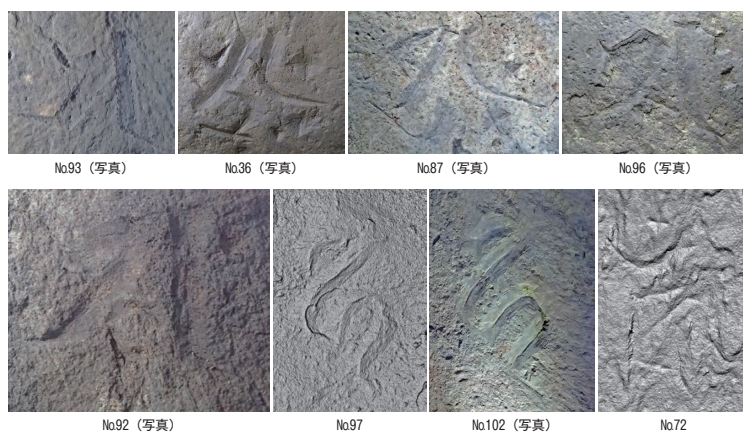


125図 B類(薬研彫b)(画像は3Dソリッド)

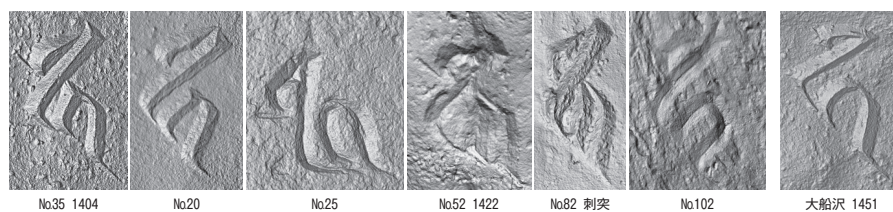


126図 C類(変形した薬研彫)(画像は3Dソリッド)

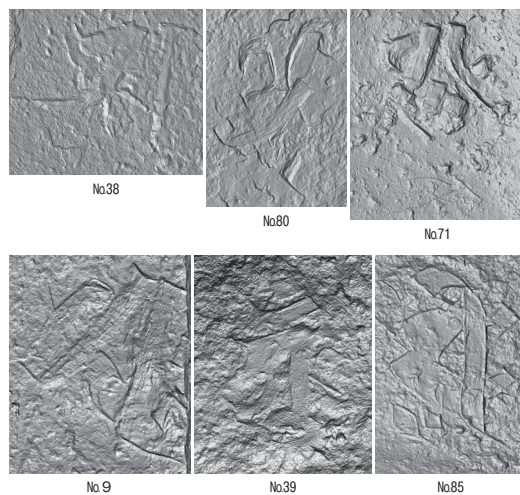




127図 D類（極浅タイプの薬研彫）（No.97. 72の画像は3Dソリッド）



128図 「力」（地蔵菩薩）の変化

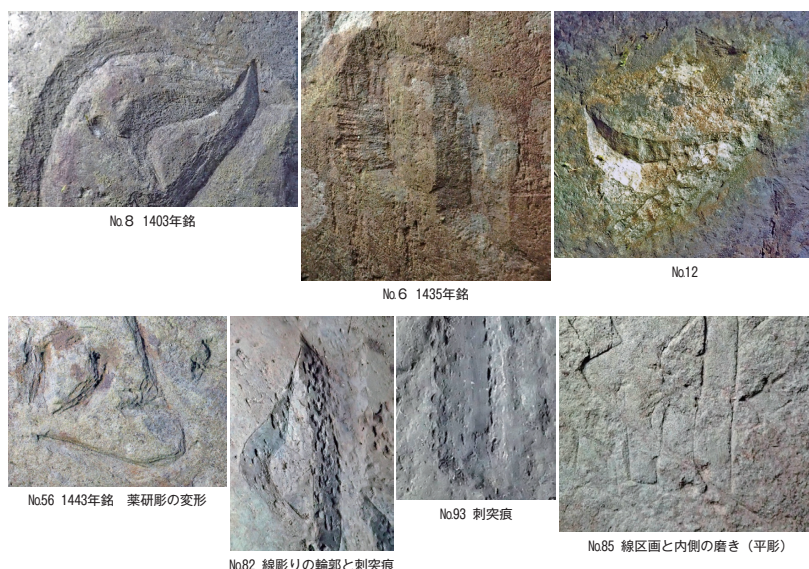


129図 E類（平彫）（画像は3Dソリッド）

彫ることができず、短い直線を繋いでおり、工具の使い方ができていない。専門職人とは考え難い。

No.82は輪郭の細い線と多数の刺突痕が特徴である。いわゆる先ノミのような工具と考えられ

る。薬研彫り技法の衰退の表れとみる。No.85は一見、薬研彫りの前段階とも見えるが、輪郭をとってその中を磨いており、輪郭と並行した細かな線條痕が認められるのでいわゆる「平彫」とみたのは前述の通りである。



130図 種子の彫り痕跡

## ② 種子からみた信仰

種子からみると十三仏信仰の浸透が窺える。すなわち、数の多い順に種子バン（金剛界大日如来 十三回忌主尊）8基、バーンク（金剛界大日如来・五点具足 ※二十七回忌主尊説<sup>12</sup>があるが南三陸町上沢前板碑群では「十三年當相故建立」としてバーンクを用いている永享4年銘板碑があるので十三回忌の可能性が高い）7基と金剛界大日如来が計15基と多い。カ（地藏菩薩 五七日主尊）13基、バイ（薬師如来 七七日主尊）11基、サク（勢至菩薩 一周忌主尊）11基、サ（観音菩薩 百か日忌主尊）6基（サまたはサクは他に3基）、タラク（虚空蔵菩薩 三十三回忌主尊）5基、キリーク（阿弥陀如来 三回忌主尊）5基、ウン（阿閼如来 七回忌主尊）3基、カーン（不動明王 初七日主尊）2基、アーンク（胎藏大日如来 五点具足）は3基であるが、その相当する回忌については断定できない。アーンクは「先祖代々あるいは年回忌の種子または十七回忌」に用いるとする注12の説があり、現在の真言宗では十七回忌に用いる<sup>13</sup>。また、1429～41年を成立下限とする『弘法大師逆修日記事』<sup>14</sup>では十三回忌としてバーンク、アーンクが記されている<sup>15</sup>。バク（釈

迦如来 二七日主尊）1基、ユ（弥勒菩薩 六七日主尊）1基、また、剥落のため断定できないがアン（普賢菩薩 四七日主尊）の種子の板碑が1基ある。そしてモウとモーンクかと読む雄渾な字体の種子が各1基あるが、文殊菩薩（三七日主尊）の莊嚴体の可能性がある。そうすると種子の確認された板碑80基のほとんどは十三仏信仰の盛行の所産（No.40「歿故道妙」を除く）と考えられる。ただし、これらが回忌供養として正確に行われたかは、「道金禪門」銘板碑が嘉吉2年の種子が「アーク」（胎藏大日）、嘉吉4年の種子が「カーン」（初七日主尊）のように疑問がある。追善と逆修が混在している可能性もある。以上のように、回忌主尊としては金剛界大日如来（十三回忌）、地藏菩薩（五七日）、薬師如来（七七日）、勢至菩薩（一周忌）、観音菩薩（百か日忌）、阿弥陀如来（三回忌）、虚空蔵菩薩（三十三回忌）の比率が高い。

特筆されることはダがタラク（虚空蔵菩薩）の右下に刻まれるNo.36が確認されたことである。碑面には他に情報はないが、字義は「施与」で善財童子や金剛利菩薩などの種子とされる<sup>16</sup>。施餓鬼を表す梵字でもあり<sup>17</sup>、南三陸町塩前寺跡に立つ禅宗系の板碑である貞治四（1365）年板



碑に刻まれた偈「若人欲了知 三世一切仏 応観法界性 一切唯心造」が、「破地獄偈」としてこの時期に盛んになった施餓鬼に用いられたことを想起する<sup>18</sup>。鹿兒島県さつま町所在の宝塔には本例と同様のタラクとダの組み合わせが認められることを野口達郎氏より教示いただいた。応永8年（1401）鶴田合戦の供養塔と伝えられ同時代の宗教的環境の共通性が窺える。ダと他の種子との組み合わせは新潟県粟島など相当の類例がある。その性格としては今後の課題としたい。なお、ダは単独としては松島雄島板碑群に例があり、金剛界曼荼羅に属す菩薩が多いことから金剛利菩薩と考えた<sup>19</sup>。

#### (5) 偈について

偈は、6種が11基に刻まれている。①「一切善悪 都莫思量」（子叡『起信論疏筆削記』<sup>20</sup>）1基、②「修此三昧者 現證佛菩提心」（『眞言宗即身成佛義問答一卷』の「修此三昧者現證仏菩提 菩提心云。」が近似。頼瑠選『大日經疏指心鈔』に「修此三昧者 現證佛菩提」<sup>21</sup>）1基、③「無智人中 莫説之經」（法華經では「莫説此經」<sup>22</sup>）1基、④「是法平道（本来は「等」） 無有高下」（鳩摩羅什訳『金剛般若經』<sup>23</sup>）1基、⑤「万法一如」（澄観『大方廣佛華嚴經隨疏演義鈔』、道原『景德伝燈録卷第三十』の『三祖僧璨大師信心銘』他<sup>24</sup>）3基、⑥「応無所住 而生其心」（鳩摩羅什訳『金剛般若經』<sup>25</sup>）4基である。碑面構成との関連では種子+偈+願文（A1類）には「一切善悪 都莫思量」、「修此三昧者 現證佛菩提心」、「是法平道 無有高下」、「万法一如」が使われている。「万法一如」には3基とも戒名が刻まれている。種子+偈+年号年月日（A2類）には「無智人中 莫説之經」が使われている。「応無所住 而生其心」は部分のみ確認されたものがあり、それ以外の類型にも使われた可能性を残す。

偈の位置付けについては室町期における使われ方や詳細な板碑分布論が必要となるため、課題とする。以下、概要のみ記す。「一切善悪 都莫思量」は、子叡（-1038）『起信論疏筆削記』や『禪苑清規』（1202年重刻）所収の『坐禅儀』

にみられるが、中世後期においては臨済宗の僧空谷明応（1328-1407）の『常光国師語録』や同じく大休宗休（1468-1549）の『見桃録』、曹洞宗永平寺5世義雲（1253-1333）『義雲和尚語録』<sup>26</sup>、瑩山紹瑾（1268-1325）の『洞谷開山瑩山和尚之法語』<sup>27</sup>にみられるので主として禅宗に重宝されている。類例としては登米市長谷山の応永15（1408）年碑<sup>28</sup>があり年代が近い。なお、山頂の名刹遮那山長谷寺は弘治3（1557）年に天台宗から修験道に変わったとされている<sup>29</sup>。また、登米市米山町桜岡今泉の応永28（1422）年碑にもあり、年代が近い<sup>30</sup>。少なくとも沢内から西方の北上川流域に分布がある。ただし、この偈の使用例は青森県深浦町の「関の古碑群」<sup>31</sup>にも見られるので地域が限定されるわけではない。

「修此三昧者 現證佛菩提心」については拙文<sup>32</sup>で整理した。この偈に近似するのは空海『即身成仏義』に付されているが空海の真作とはされていない『眞言宗即身成佛義問答一卷』にある「修此三昧者現證仏菩提 菩提心云。」である。「修此三昧者現證仏菩提」は著名な空海の『即心成仏義』の中に示される「この三昧を修するものは、現に仏の菩提を証す」であるが、厳密な出典としては不空訳『金剛頂經一字頂輪王瑜伽一切時處念誦成仏儀軌』である<sup>33</sup>。いうまでもなく空海の『即心成仏義』は眞言宗の基本的な書であり多くの関連書がある。「修此三昧者現證仏菩提」に「菩提心」というフレーズを伴うもので最も年代が本板碑に近いものとしては頼瑠（1226-1304）の『大日經疏指心鈔』がある。頼瑠は眞義眞言宗教学の大成者として知られる眞言僧である。また、覚鑿（『眞言宗即身成佛義章』『心月輪祕釋』）、信証（『住心決疑抄』）、重誉（『祕宗教相鈔』）、房覚（『未決答釈』）といった12世紀に活躍した眞言宗僧の著作に見られる。恐らくは、このような系譜の中で、板碑の偈として「修此三昧者現證仏菩提」と「菩提心」を合体させて、「修此三昧者 現證佛菩提心」というフレーズが形成されたのではないだろうか。板碑への使用例については本例の他には確認できていない。

「無智人中 莫説之經」は前述の『法華經』の他、台密の完成者とされる安然の『真言宗教時義第四』『胎藏金剛菩提心義略問答抄第二』『胎藏金剛菩提心義略問答抄第四』に登場する（SAT 大藏經テキストデータベース2018）。板碑では登米市東和町錦織小山田板碑群に3基あり、1基は「無智人中 莫説此經」の『法華經』（譬喻第三）の本来的な形で康正三（1457）年銘板碑<sup>34</sup>に刻まれている。また、別な1基には「相■性目上座」とあり、各宗派で上位の僧<sup>35</sup>への呼称「上座」が記されている。

「万法一如」については「天台宗の光宗（1276-1350）の『溪嵐拾葉集』に「森羅萬法ヲ一如」とあり、南北朝時代の仁空実導（1309-1388）『遮那業安立章』にもある。さらに三論宗の永観（1033-1111）の撰『往生拾因』、浄土宗の光雲明秀（15世紀）の『愚要鈔』にもある（SATDB）ように天台宗などにおいて中世後期まで「万法一如」偈が共有されていることがわかる。」と一定の整理をした<sup>36</sup>。使用する板碑の分布として室町期には東は田東山西麓から西は長谷山（中田町浅水）周辺、南は本板碑群を含む南三陸町入谷から東和町米谷ライン、北は、北上川沿いの曲田から東和町米川の範囲に大きなまとまりがある。複数個所が集中するのは入谷と長谷山周辺の北上川沿いである。分布の南限は宮城県石巻市皿貝字小沢の大日靈神社裏山所在の板碑が確認されているが年代は明らかではない<sup>37</sup>。そして、「万法一如」の発信源としては板碑群の分布から長谷寺（登米市中田町浅水長谷山）や田東山の天台宗寺院との関わりを想定した<sup>38</sup>。

「応無所住 而生其心」と「是法平等 無有高下」は南北朝期に『金剛般若經』から簡潔な板碑用の偈として選び取られたいわば全国区の偈であるが、室町期においては、前述のより簡潔な偈「万法一如」の分布範囲（147図）にも重なっている。さらに「無智人中 莫説之經」の使用例を加えれば、一関市藤沢町黄海から南方、米山町にかけての北上川流域の板碑群と親近性がある。「万法一如」の志津川湾域の分布からすれば「志津川湾・北上川回廊」とも呼称

すべき板碑文化圏と人・物流が見えてくるのではないだろうか。

偈から推定される宗派としては偈の出典と中世における用例から禅宗、密教が考えられるが、当時は現代と異なり、臨済宗と曹洞宗、真言宗と天台宗までの判別は困難である。沢内の地は寺跡伝承地とされる<sup>39</sup>が、寺院が存在したとすれば、①真言宗をとりこんだ禅宗<sup>40</sup>もしくは②禅宗を取り込んだ密教と考えられる。また、禅宗、密教の複数の宗派の板碑が立てられた地であるという可能性もある。なお、「一切善惡 都莫思量」を刻む板碑No.35（131図）は、小型（地上高64cm）で位牌を意識した形態、法量とも考えられ、禅宗所産の可能性もある。今後の検討課題である。



131図 No.35板碑（3D画像反転）



## (6) 真言について

真言を刻む板碑は、4基あり、特筆されるのはNo.44「応永廿九（1422）年十月日」の紀年銘を持つ板碑で、真言「ア・パン・ボローン」と「ア・ウン」を刻む。これは「胎藏界・金剛界・一字金輪」及び「蘇悉地」を表すと考える。他には「アビラウンケン」（胎藏大日真言・大日報身真言）、「キャカラバア」（五大種子）を刻む板碑1基、「アビラウンケン」のみ1基であり、密教的所産であることを示す。14～15世紀にかけて北上川流域から十三浜・長面浦にかけて一定数の真言系板碑の流れがあり<sup>41</sup>、本板碑群もこの中に含まれることになる。

## (7) 銘文の彫り方の変遷

年号月日の彫法（132図）の様相・変遷についても種子に近似する傾向が見られるので整理する。応永11（1411）年までは断面がV字形と葉研彫りである。ただし、No.8の「五」は軸線から外れ乱れているので造立日決定時に刻み入れた可能性もある。応永23（1416）年になると「応永」を一字化するとともに断面のV字形は乱れ、字の形態も短直線の集合体となっていく。このNo.10の種子はしっかりした葉研彫りなので、種子と銘文の彫り職人は異なると考えられる。応永24（1417）年のNo.22では残存する種子は葉研彫りであるが、銘文の配列は乱れ、字も短直線の集合体となっており、やはり銘文の彫り専門職人の担当とは考え難い。

応永29（1422）年銘のNo.52では「応永」を再

び二文字とするも、断面は浅いU字形となり、ごちない彫りとなっている。石に彫る技術が概ね種子同様、退化していく傾向と考えられる。ただし、永享7（1435）年銘の偈を刻むNo.6や真言を刻む永享10（1438）年銘のNo.59には断面V字形の彫りが見られる。また、No.56と18は稚拙な彫りで近似した字体であるが、宝徳4（1452）年銘の字体は初期のシャープさはないもののしっかりした字体である。これも種子と同様、階層差があり、これと職人のレベル差が対応していると考えられる。概ね15世紀第二四半期ころにはこのような階層差が共存していたと考えられる。

## (8) 戒名を刻む板碑（133図）

戒名を刻む板碑は21基確認された。この内「禪門」「禪尼」の位号を持つ戒名を刻む板碑は18基ある。「禪門」は11基、「禪尼」は6基、剥落のため「禪」の字のみが残った板碑が1基である。「禪門」位号は「道金」3基、「道泉」2基、「明泉、道春、覚圓、覚円、世久」、「■禪門」である。「覚圓、覚円」は同一人物の可能性もある。前述のように十三仏信仰の浸透が考えられるので回忌供養に関連して述べる。「道金禪門」を対象に種子から初七日（カーン）、十三回忌（パン）、十七回忌？（アーク）の回忌供養が行われている。また、「道泉禪門」は百か日忌もしくは一周忌（サもしくはサク）の回忌供養が行われている。

「禪尼」位号は「妙珍」が3基あり、種子の

年号	応永10(1403)	応永11(1404)	応永11(1404)	応永11(1404)	応永23(1416)	応永23(1416)	応永24(1417)	応永29(1422)	応永29(1422)	永享7(1435)	永享10(1438)	嘉吉3(1443)	嘉吉4(1444)	宝徳4(1452)年
番号	No.8	No.47	No.57	No.35	No.28	No.10	No.22	No.44	No.52	No.6	No.59	No.56	No.18	No.77
年号月日	応永十年十月五日	応永十一年正月五日	応永十一年正月五日	応永十一年正月五日	応永二十三年正月五日	応永二十三年正月五日	応永二十四年正月五日	応永二十九年正月五日	応永二十九年正月五日	永享七年正月五日	永享十年正月五日	嘉吉三年正月五日	嘉吉四年正月五日	宝徳四年正月五日
画像														

132図 年号月日の比較

判明するものはサク（七七日）とバイ（一周忌）であり、同一人物を対象とした回忌供養を行っていることが推定できる。ほとんど剥落した碑面に「珍禪尼」の文字のみ残存している板碑があり、「妙珍禪尼」の可能性を含めると計四回の回忌供養を行ったことになる（種子不明2基）。この他「明善」があり、「禪尼」とだけ確認できる板碑がある。また、後述する「逆修妙清」（No.53）は碑面の剥落が激しいので、「禪尼」が下に続いていた可能性もないわけではない。また、種子バーンクの下に「世久」とのみ刻まれた板碑があり、その下には目立った剥落はない。調査終盤に「世久禪門」銘板碑（No.99 種子欠損）が発見されたため「世久」が後に「禪門」の位号を得た可能性もある。後述する「歿故／道妙」銘のNo.40板碑は「道妙」の一字分下に「敬白」の「白」が刻まれているため位号が刻まれているのは確実である。月輪に囲まれた「アーン」（除憂冥菩薩？）の板碑に刻まれた「歿故道妙」は十三仏信仰とは違う特別の位置付けのようである。また、「道秀」銘のNo.53板碑は、戒名の下は剥落していないので位号は刻まれている。なお、本板碑群の東南約0.9kmのほぼ同時期の大船沢板碑群には、「道秀禪門」と刻まれた種子バーンクの板碑がある。

男性とみられる「道」（ただし、「為」の崩し字の可能性あるものも含む）は7基と戒名に最も多く使われている。女性の戒名は頭に「妙」と付けるものが多く、「明善禪尼」の「明」もまた、「みょう」と読んだ可能性がある。

以上からすれば、15世紀前半のこの地域では、寺院より戒名を授けられ、さらに「禪門」「禪尼」の位号を持って把握される人々が、男性6人以上、女性が4人以上、戒名のみの方が4名存在し（戒名のみから禪門を取得した「世久」を含む）、僧侶の指導の下に、板碑造立を組み込んだ、十三仏信仰に基づく回忌供養を行っていたと考えられる。仮に14人が十三仏の供養を石塔婆造立によって行った場合、182基造立したことになり、この数は板碑に「板碑状の石」を加えた数に近い。前述のように種子の数に偏りがあるので、複数の種子に限った場合は初七日、五七日、七七日、百か日、一周忌、三回忌、七回忌、十三回忌、三十三回忌、三十三回忌の10回とすれば、仮りに20人×10回の立塔としても同様の数字となる。十三回忌や地藏信仰と関わる五七日、百か日忌などを重要視して、全回忌に同じグレードでなく、碑面構成要素の多寡を加減したこともあったのかもしれない。

番号	戒名	銘文	地上高	種子	仏尊	回忌
56	道金禪門	偈「無智人中 莫説之経」〔嘉吉二(1442)年十月二十八日〕「道金禪門」〔施主 敬白〕	84	アーク	胎蔵界大日如来など	十七回忌？
18	道金禪門	偈「方法一如」〔嘉吉二二(1444)年〕「三月」〔道金禪門〕「敬白」	53	カーン	不動明王	初七日
103	道金禪門	「道金禪門」	76	バン	金剛界大日如来	十三回忌
19	道泉禪門	「道泉禪門」	62	サ or サク	観音 or 勢至	百か日忌 or 一周忌
31	道泉禪門	「道泉禪門」	65	キリーク	阿彌陀如来	三回忌
22	明泉禪門	偈「修此三昧者」〔現證佛菩提心〕「右志者為過去聖靈」〔永廿四(1417)年四月日〕「明泉禪門」〔孝子〕「敬白」	63～	カ	地藏菩薩	五七日
99	世久禪門	偈「而生其心」	50	不明		
46	世久	「世久」	79	バーンク	金剛界大日如来	十三回忌
32	党円禪門	偈「方法一如」〔右志趣者〕「党円禪門」	58	サク	勢至菩薩	一周忌
77	党圓禪門	「宝徳 二(1452)年」〔十月十七日〕「党圓禪門」〔※沢内板碑群最新年〕	88	バーンク	金剛界大日如来	十三回忌
9	道春禪門	「道春禪門」	51	サ	観音菩薩	百か日忌
6	■■■禪門	偈「方法一如」〔永享七(1435)年〕「十一月日」〔右志趣者〕「■■■禪門」	61	バイ	薬師如来	七七日
54	道秀	「道秀」	56	サ	観音菩薩	百か日忌
40	道妙	月輪 「是法平道」「無有高下」「右志者 二月十三」〔歿故〕「道妙」	53	アー	開敷華王如来	
41	妙珍禪尼	「妙珍禪尼」	74	不明		
60	妙珍禪尼	「妙珍禪尼」	60	バイ	薬師如来	七七日
65	妙珍禪尼	「妙珍禪尼」	69	サク	勢至菩薩	一周忌
94	珍禪尼	「珍禪尼」	67	不明		
70	明善禪尼	「明善禪尼」 右左に分ける	70	モーンク？	文殊菩薩の莊嚴体か	三七日
59	妙善禪尼	ア・ビ・ラ・ウン・ケン「永享十(1438)年十月日」〔妙善禪尼〕「敬白」	46	サ	観音菩薩	百か日忌
25	禪尼	「禪尼」	67	カ	地藏菩薩	五七日
80	禪	「禪」	34	バイ	薬師如来	七七日
53	妙清	「逆修妙清」	70～	サク	勢至菩薩	一周忌

133図 板碑の戒名と属性表



## (9) 注目される銘文の用語

沢内板碑群において初めて「逆修」と明記された板碑を確認した<sup>42</sup>。No53板碑は種子は破損しているがサク（勢至菩薩 一周忌の主導）かとみられ、十三仏の回忌供養体系に逆修供養が組み込まれていたことを示す点で重要である。南北朝期には、在地領主一族が行っていた逆修の板碑造立<sup>43</sup>が室町期に普及していたことを示している。

「歿故」が確認された。No40板碑は地上高53cmと平均値である59cmを下回るが月輪を持つ点で本板碑群中唯一であり、種子アーン（除憂冥菩薩？）も特異であるが。右下に「歿故」、左下に「道妙」とある。「歿故」の板碑銘類例は埼玉県狭山市徳林寺の延文六（1361）年銘板碑などが知られるが、板碑には少なく、位牌に多い。宮城県内では仙台市岩切東光寺の応長元（1311）年銘板碑が知られる。ただし、その「没故沙弥向阿霊位」は構成、筆体に検討が必要である。位牌は室町期の土豪の居館跡である仙台市中田南遺跡から出土している。「妙金禅尼」と墨書されており、この時期に土豪層に普及していることを示している<sup>44</sup>。「歿故」の指摘及び事例については野口達郎氏より種々のご教示をいただいた。位牌や禅宗の影響など今後の課題である。

## (10) 銘文の月名の偏りについて

板碑の銘文の月名の偏りが注目される。月名を入れたものは13基あるが、集中しているは「十月」が7基ある。日にちが記されているのは5. 17. 23. 28日である。次いで「二月」が3基あり、日にちが分かるのは13・16日で「彼岸」の可能性もある。この他、3. 4. 11月を記しているのが各1基ある。「十月」が造立月とすれば、宗教指導者により造立の月に限定傾向があるためだろうか。一つの可能性としては10月が石塔婆（板碑）造立・法要の月として定められていた可能性もある。本板碑群以外でも、南三陸町域では14世紀末期の応永年間に入ってから2. 10. 11月に集中してくる傾向が確かにあるので室町期の特徴とみられる（146図）。広

域の板碑の検討が課題である。このような傾向は関東の庚申待ち板碑に近似する傾向であることは注目される<sup>45</sup>。磯野治司氏は埼玉県で最も板碑の造立がなされ、15世紀以降の個人名板碑が多い北足立区の板碑を分析し、2. 10月が多い傾向を指摘し、「庚申会」など「待ち行事」との関係に注意したいとされている<sup>46</sup>。No40の板碑は年号がなく日にちのみ「二月十三日」と記され、本板碑群で唯一「歿故道妙」と刻まれていることは、彼岸の造立であることと関係する可能性もある。

## (11) 寺院伝承地について

当地は「宮城県遺跡地名表」及び「宮城県遺跡地図」（宮城県文化財課HP）では「沢内寺跡」として登録されている（南三陸町 HP では「沢内板碑群」）。『志津川町史Ⅲ 歴史の標』の「古寺院があったとみられ、その寺が「入谷寺」というものでなかったかとも言われている。」を受けていると思われる。ただし、入谷寺については通称「寺沢」の別な場所が登録されている。佐藤正助氏の『志津川物語』では、「寺があったと伝える」とある。今回は、詳細な検討はできなかったが、沢内の地内で寺院の可能性ある平場は二か所である（7図）。一つは現在のA・B区であり、南北約10m、東西5mほどの地が周囲より小高い平坦地であり、沢からの水も避けられる場所となっている。もう一つはD区の本래の板碑群が立てられたと推定した斜面の上が平場となっている。おおよそ東西10m、南北5mほどである。いずれも小規模なものである。寺庵など中世の何らかの遺構があった可能性があり、将来の細密な地表起伏図の作成、確認調査に待ちたい。

## 8 斜面付近（C. D区）の板碑の可能性ある石と板碑の様相

板碑107基のうち、種子や銘文が確認されたものは99基である。残りの8基は、種子が剥落によって消滅したと判断したもの6基と種子とは断定できないが種子想定部に痕跡を持

番号	頭形	地上高	幅	厚さ	種子	十三仏主尊	回忌	石材	成形	加工	特記 (年号は赤色 戒名・偈・真言など重要事項は太字)
1	三角	77	44	9	タラーク	虚空蔵	33回忌	頁岩?	自然石B	頭部・側辺	真言「ア・ビ・ラ・ウン・ケン」「キャ・カ・ラ・バア」
2	三角	83	31	10	バーンク	金剛界大日	13回忌?	頁岩?	自然石A	頭部	種子五点具足
3	三角	60	31	6	サ	観音	100か日忌	頁岩?	割石A	頭部	
4	三角	35	18	7	カ	地藏	57日	頁岩?	自然石A	頭部	
5	平頭?	64	24	6	バーンク	金剛界大日	13回忌?	頁岩?	自然石B	側辺	種子は五点具足 (特異形)
6	三角	61	31	17	バイ	薬師	77日	頁岩?	自然石A	側辺	偈「万法一如」「永享七(1435)年」「十一月日」「右志趣者」「■ ■禪門」
7	三角	46	25	3	バーンク	金剛界大日	13回忌?	頁岩?	割石A	頭部	種子は五点具足
8	三角?	65	31	7	モウ?	文殊?	37日?	頁岩?	自然石A	頭部・側辺	「応永十(1403)年十月五日」紀年銘は沢内板碑群最古
9	三角	51	17	6	サ	観音	100か日忌	頁岩?	割石B	頭部	「道春禪門」
10	三角	92	21	9	ウン	阿闍	7回忌	頁岩	自然石B	頭部・側辺	「右志趣者 応永廿三(1416)年二月日」
11	三角	57	29	7	バイ	薬師	77日	砂岩?	自然石A	頭部	
12	平頭	65	27	10	パン	金剛界大日	13回忌	粘板岩	割石B	頭部	「応?」「右志」」「而■」偈「応(無所住)」「而(生其心)」(「金剛般若経」)
13	三角	59	12	10	不明	不明		砂岩?	割石C	不明	
14	三角	49	26	6	不明	不明		頁岩?	自然石A	頭部・側辺	
15	三角	37	22	4	サ or サク			頁岩?	割石A	頭部	偈「応(無)(所)(住)」、「而生其心」(「金剛般若経」)
16	平頭	49	14	6	不明	不明		頁岩?	自然石A	頭部	
17	不明	67~	23	14	バイ	薬師	77日	頁岩	割石C	不明	
18	不明	53	34	6	カーン	不動	初7日	頁岩	割石C	頭部・碑面・側辺・背面	偈「万法一如」「嘉吉二(1444)年」「道金禪門」「敬白」「三月」
19	アーチ	62	24	7	サ or サク			頁岩	自然石A	なし	「道?泉禪門」
20	三角	92	34	5	カ	地藏	57日	頁岩?	自然石A	頭部	
21	平頭	63	23	9	バイ	薬師	77日	頁岩	自然石A	頭部	
22	不明	63~	35	8	カ	地藏	57日	頁岩	自然石B	不明	偈「修此三昧者」「現證佛菩提心」「右志者為過去聖靈」「応永廿四(1417)年四月日」「明泉禪門」「孝子」「敬白」
23	不明	76~	36	5	バイ	薬師	77日	頁岩	自然石B?	頭部・側辺	
24	アーチ	51	24	6	不明	不明		頁岩	自然石A	頭部	
25	アーチ	67	24	6	カ	地藏	57日	頁岩?	自然石A	頭部	「禪尼」
26	三角	72	28	15	カ	地藏	57日	頁岩	自然石A	頭部・碑面	
27	三角	44	13	6	不明	不明		頁岩	自然石A?	なし?	
28	三角	81	32	4	キリーク	阿弥陀	3回忌	頁岩	割石B	頭部・側辺	「応永廿三(1416)年 丙申 十月日」
29	三角	64	36	10	サク	勢至	1周忌	頁岩	割石C	頭部・側辺?	
30	平頭	46	22	10	キリーク	阿弥陀	3回忌	頁岩	割石B	頭部	
31	三角	65	28	9	キリーク	阿弥陀	3回忌	頁岩	自然石B	頭部	「道?泉禪門」
32	平頭	58	26	6	サク	勢至	1周忌	頁岩	自然石B	頭部・側辺	偈「万法一如」「右志趣者」「覚円禪門」
33	アーチ	50	22	11	サク	勢至	1周忌	頁岩	自然石A?	頭部	
34	三角	52	28	5	カ	地藏	57日	粘板岩	自然石A	頭部・側辺	
35	アーチ	64	17	5	カ	地藏	57日	頁岩	自然石A	頭部	偈「一切善悪」「都莫思量」「母大聖靈の 應永十一(1404)年十月廿三日」「甲申」「敬白」
36	アーチ	42	36	5	タラーク+ダ	虚空蔵	33回忌	頁岩	自然石A	頭部	
37	ドーム	40	27	13	ユ	弥勒	67日	頁岩	自然石A	なし	
38	三角	40	32	4	サ or サク			粘板岩	自然石B	碑面・頭部・側辺	種子は平彫
39	平頭	55	35	10	アーンク	胎蔵界大日	17回忌?	頁岩?	割石C	碑面・頭部・側辺	種子は五点具足 輪郭平彫
40	平頭	53	32	9	アー	除憂冥菩薩?		頁岩	自然石A	頭部	月輪「是法平道」「無有高下」、「右志者 二月十三」、「殞故」、「道妙」
41	アーチ	74	31	11	不明			粘板岩	自然石B	頭部・側辺	「妙殊禪尼」
42	平頭	55	17	12	サ	観音	100か日忌	花崗岩?	自然石A	頭部	
43	ドーム	50	30	6	ウン	阿闍	7回忌	頁岩	割石A	頭部	
44	三角	67	25	14	サ	観音	100か日忌	頁岩	自然石A	頭部・背面	「ア・バン・ボローン」「ア・ウン」(胎蔵界・金剛界・一字金輪・蘇悉地)「応永廿九(1422)年十月日」
45	三角	60	27	5	アーンク	胎蔵界大日		頁岩	自然石A	頭部	
46	三角	79	27	4	バーンク	金剛界大日	13回忌?	頁岩	割石A	頭部	「世久」
47	三角	65	35	11	バク	釈迦如来	27日	頁岩	割石B	頭部・碑面	「應永十一(1409)年二月十六」
48	三角	48	22	8	サ	観音	100か日忌	頁岩?	自然石A	頭部	
49	三角	55	30	4	サク	勢至	1周忌	頁岩	自然石A	頭部	
50	アーチ	74	22	11	サク	勢至	1周忌	頁岩	割石C	頭部・側辺	
51	不明	48	28	4	パン	金剛界大日	13回忌	頁岩	割石B	頭部・側辺	
52	ドーム	58	21	9	カ	地藏	57日	頁岩	自然石A	頭部	「応永廿九(1422)年十月日」「十」は「十一」の可能性もある
53	不明	76~	41	6	サク	勢至	1周忌	粘板岩	割石B	不明	「逆修妙清」
54	三角	56	32	8	サ	観音	100か日忌	頁岩	自然石A	頭部・側辺	「道秀」
55	平頭?	50	22	5	バイ?	薬師?		粘板岩	自然石B	頭部	
56	三角	84	28	7	アーク	胎蔵界大日		頁岩	割石A	頭部	偈「無智人中 莫説之経」「嘉吉二(1442)年十月二十八日」「道金禪門」「施主 敬白」
57	アーチ	59	29	8	ウン	阿闍	7回忌	頁岩	自然石A	頭部・側辺	「応永十一(1404)年二月日」
58	不明	93	46	8	カ	地藏	57日	粘板岩	割石B	側辺	
59	平頭	46	19	6	サ	観音	100か日忌	頁岩	割石A	頭部・背面	「ア・ビ・ラ・ウン・ケン」「永享十(1438)年十月日」「妙善禪尼」「敬白」
60	三角	60	31	8	バイ	薬師	77日	頁岩	自然石A	なし	「妙殊禪尼」
61	平頭	40	20	7	バイ	薬師	77日	頁岩	自然石A	頭部	小型ながら長方形碑面を意識
62	平頭?	34	21	4	バーンク	金剛界大日	13回忌?	粘板岩	割石B	なし	
63	三角	58	23	6	タラーク	虚空蔵	33回忌	花崗岩?	自然石A	なし	
64	平頭	71	30	6	カ	地藏	57日	粘板岩	自然石B	頭部背面	
65	アーチ	69	32	8	サク	勢至	1周忌	頁岩	自然石A	頭部・側辺・背面	「妙殊禪尼」



番号	頭形	地上高	幅	厚さ	種子	十三仏主尊	回忌	石材	成形	加工	特記（年号は赤色 戒名・偏・真言など重要事項は太字）
66	不明	34～	25	5	バーンク	金剛界大日	13回忌？	粘板岩	割石C？	背面	
67	三角	69	27	10	サク	勢至	1周忌	頁岩	自然石A	なし	
68	三角	56	22	11	バイ	薬師	77日	頁岩	自然石A	なし	
69	不明	45～	30	7	キリーク？	阿弥陀？	3回忌？	粘板岩	割石A	不明	
70	アーチ	70	25	7	モーンク？	文殊？	37日？	頁岩	自然石B	頭部	「明善禪尼」右左に分ける
71	三角	44	17	4	タラーク	虚空蔵	33回忌	頁岩	割石A	頭部	蓮座（線刻）種子は平彫
72	三角	48	23	9	バン	金剛界大日	13回忌	頁岩	自然石A	碑面	種子に仰月点
73	三角	53	22	8	バン	金剛界大日	13回忌	粘板岩	自然石B？	頭部・碑面	
74	三角	64	33	12	サク	勢至	1周忌	頁岩	割石C	頭部・側辺	左右に真言「ア・ビ・ラ・ウン・ケン」
75	三角	66	21	7	カーン	不動	初七日	頁岩	割石A	側辺・裏面	偏「而生其」
76	三角	43	23	7	バ	金剛蔵？		頁岩	割石A	なし	
77	アーチ	88	32	17	バーンク	金剛界大日	13回忌？	頁岩	自然石A	頭部	「宝徳 二年」「十月十七日」「覚園禪門」沢内板碑群最新1452年か
78	三角	71	22	7	バン	金剛界大日	13回忌	頁岩	自然石A	頭部	
79	平頭	69	25	8	タラーク	虚空蔵	33回忌	粘板岩	自然石B？	頭部	
80	アーチ	34	25	2	バイ	薬師	77日	頁岩	割石A	頭部・側辺	「禪」種子は平彫
81	ドーム	50～	15	7	バン	金剛界大日	13回忌	砂岩	自然石A	側辺	種子に仰月点
82	不明	35～	31	2	カ	地藏	57日	頁岩	割石A	側辺 種子先ノミ痕	
83	平頭	62	15	10	バイ	薬師	77日	粘板岩	割石B	なし	
84	不明	56～	24	6	バorバン			頁岩	自然石B？	側辺	
85	アーチ	80	41	20	キリーク	阿弥陀	3回忌	砂岩	自然石A	種子周辺	種子は輪郭のある平彫
86	アーチ	58	22	3	サク	勢至	1周忌	粘板岩	割石B	頭部・碑面	
87	平頭	84	36	8	タラーク	虚空蔵	33回忌	砂岩	割石B	なし	
88	アーチ	35～	26	3	タラーク	虚空蔵	33回忌	粘板岩	自然石B？	頭部	
89	三角	71	22	8	カorカーン	地藏or不動		粘板岩	自然石B	頭部	
90	ドーム	44～	16	11	バイ	薬師	77日	砂岩？	自然石A	なし	円礫
91	三角	106	33	13	カ	地藏	57日	砂岩？	自然石A	上半部をはつる	円礫
92	三角	52	33	4	サク	勢至	1周忌	粘板岩	割石C	頭部	種子は非常に浅く「血彫」。
93	三角	62～	36	9	サ	観音	100か日忌	頁岩	自然石B？	頭部・碑面	浅い逆台形の断面 壁と底の接線にノミ？の刺突痕跡
94	不明	67～	37	9～	不明			頁岩	自然石B？	碑面上部 頭部 側辺	「弥禪尼」
95	アーチ	46	38	3～	サ	観音	100か日忌	頁岩	自然石A	不明	円礫
96	三角	57	35	5	サク	勢至	1周忌	頁岩	割石A	頭部・側辺	種子は涅槃点十字ないなど不整で浅い。原位置に立つ可能性。
97	三角	28	15	5	カ	地藏	57日	頁岩？	自然石A	頭部	種子は命点認められず一筆書き風で極めて浅い。円礫
98	平頭	58	26	10	サ	観音	100か日忌	頁岩	自然石A	不明	
99	不明	50～	14	7	不明			頁岩？	自然石A	不明	偏「而生其心」 法名「世久禪門」はA区No46の「世久」と同一人の可能性。
100	ドーム	40	23	4	サクorバク			頁岩？	自然石A	不明	円礫
101	不明	44～	36	1	カorカーン？			頁岩	自然石A	不明	
102	アーチ	83	37	5	カ	地藏	57日	粘板岩	割石C	不明	種子は葉研彫り風（底面ラインはある）だが命点なく非常に浅い。No97に近似。
103	平頭	76	25	4	バン	金剛界大日	13回忌	頁岩	自然石A	側辺	種子の下に「道金禪門」
104	アーチ	54	11	9	不明			砂岩？	自然石A	碑面	
105	アーチ	72	19	12	不明			泥岩？	自然石B	不明	
106	不明	60	24	4	不明			頁岩	自然石A	頂部	
107	三角	104	22	15	不明			頁岩	自然石B	頂部	

※割石 A：背面割り面 B：表裏割り面 C：碑面割り面 自然石 A：いわゆる河原石 B：岩層から乖離した可能性

134図 沢内板碑群板碑表

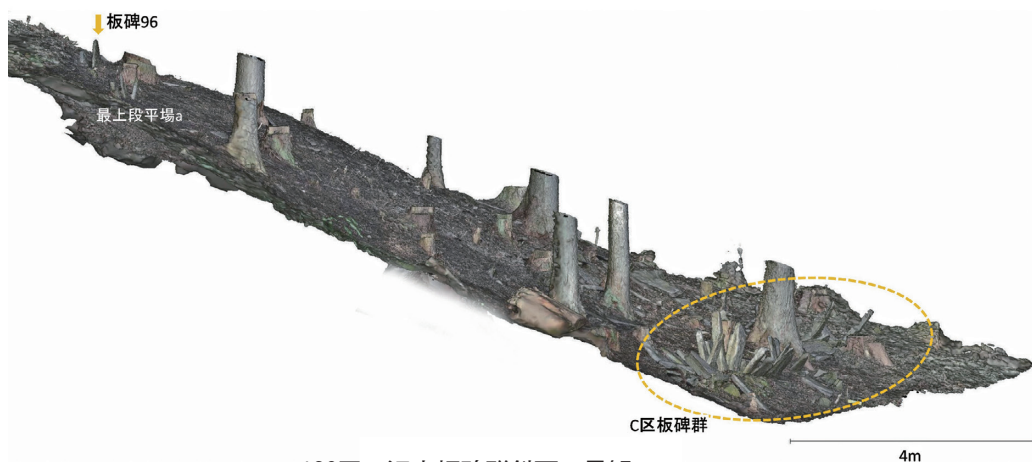
つもの（No104. 105）である。

斜面（D区）の刈払いの結果、C. D区には以上の他に板碑の可能性がある石（以下、板碑状の石）が23基立ち（137図No黄色とNo86）、70基が横位で存在していた（計93基）。立っているものと横位のものの裏返しの確認（観察後原状に復す）を行った結果、種子や銘文を確認できなかったものは88基である（No87は木株の中、No88は急斜面に側面を見せている状態であり、遺跡の損壊の恐れがあるため板碑全体を観察できなかった。）。そして、A. B区周辺を含めて板状の石を含め多数の石が顔を出してお

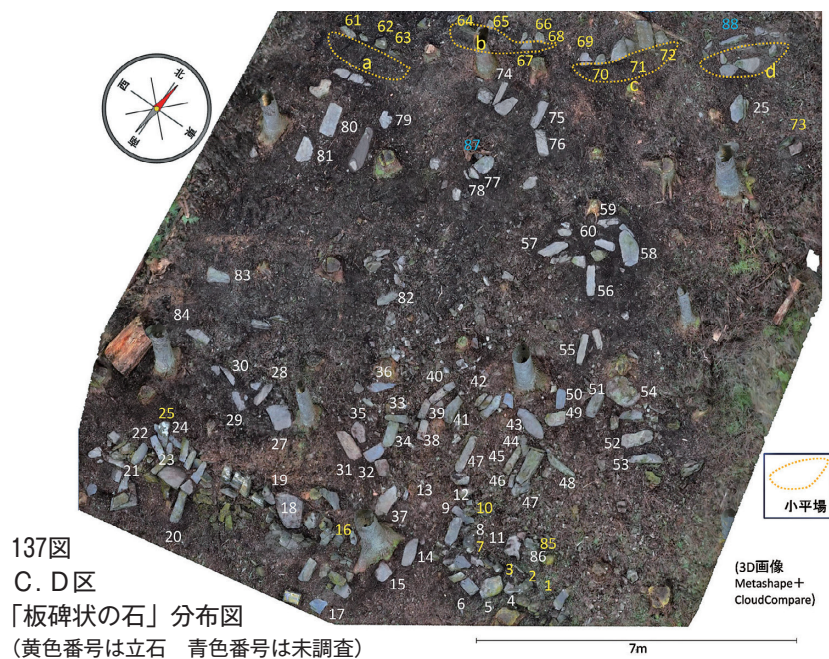
り、さらに埋没した板碑も想定される。これらのうち、137図No1. 2. 3. 7. 10. 16. 25（C区）は、先代の地主さんが付近の「板碑」様と認識したものを斜面裾部に立て並べたものである。あるいは当時は種子などが確認できたのかも知れない。No61～72は板碑と混在して傾斜の緩やかな平場状のエリア（「最上段」と呼称）に立ち、原位置の可能性はある。以下、立っている板碑状の石について若干の検討を行う。斜面に横位に存在する多数の板碑状の石については現状の変更を恐れて十分な検討はできなかった。将来の課題としたい。



135図 斜面裾（C区）・斜面（D区）の板碑群、板碑状の石（3D画像）



136図 沢内板碑群斜面の景観（3D画像）





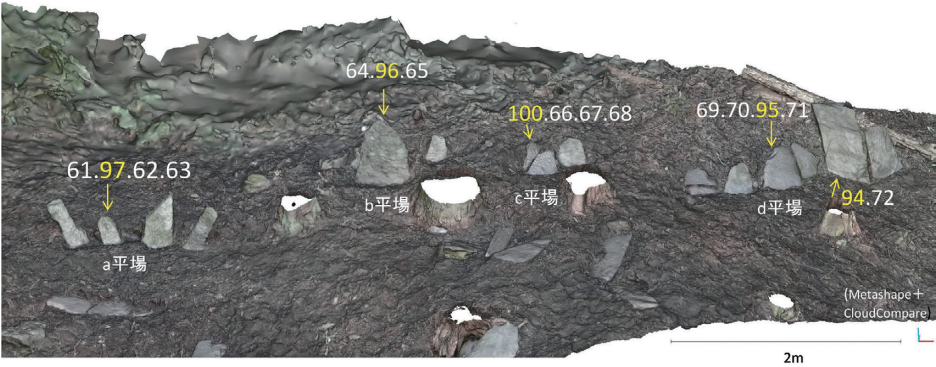
(1) 斜面に立つ板碑状の石と板碑

138図をご覧いただきたい。斜面に立つ板碑状の石を観察し、板碑とともに比較した。板碑状の形態を持ち、特に頭部などに剥離加工を持つもので剥落が顕著な板碑状の石全体番号62. 63. 68は板碑の可能性が高い。平坦面が滑らかな板碑状の石61. 63は墨書の可能性もある。しかし、これらの配列が板碑造立当初のもので

あったかは疑問がある。板碑96を除き、上端部の斜面に、石片とともに張り付けた状態であり、中には66. 67のように重ねたものや69 a. bのように破片を上下に配置したものがある。これらは、(先代以前の地主さんなどが)倒伏や破損した板碑のうち小型のものを斜面最上段の斜面に再配置した可能性がある(あるいは大型の板碑などを選んで裾にまとめたか)。69 a や71

番号	全体番号	位置	地上高(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	石材	初見(太字は加工)
1	61	最上段 a 平場	45.6	18.5	8	頁岩?	整形なし。前面は凹凸あるが平坦面あり。
2	板碑97		28.3	14.5	4.5	頁岩?	頭部 <b>左辺剥離加工</b> 。種子「力」。
3	62		46	25.7	7	頁岩?	<b>頂部剥離加工</b> 。
4	63		42.3	14	5.5	頁岩?	頂部破損しているが一部に <b>剥離加工</b> 残る。
5	64	最上段 b 平場	41	20	5.5	粘板岩	前面剥離 板碑96裏に直近。裏面は大部分斜面に埋没。
6	板碑96		57	35	4.5	頁岩	頭部・ <b>側辺剥離加工</b> 。種子「サク」
7	65		24.5	18.5	5	頁岩?	前面凹凸、剥落あり。裏面は大部分斜面に埋没。
8	板碑100	最上段 c 平場	40	22.5	4...(左側面)	頁岩?	円礫素材。種子「サク」または「バク」か。
9	66		33.5	27.3	2.2	砂岩	前面に凸線が走るが左半分は平坦。
10	67		27	28	5	スレート(粘板岩)	断片 前面剥落。
11	68		33.2	27	4.4以上	頁岩?	頭部 <b>剥離加工</b> 。前面剥落顕著。
12	69a	最上段 d 平場	20.5	31	5	スレート(粘板岩)	板碑頭部の可能性。下半欠損。下方の69 b は別個体破片。
13	70		28	21	5...(左側面)	粘板岩	頭部 <b>整形</b> 。種子剥落した板碑の可能性。
14	板碑95		46	37.5	3以上	頁岩	種子「サ」
15	71		36.0(残存)	23.0(残存)	2.5...(左側面)	スレート(粘板岩)	頭部 <b>剥離加工</b> 。板碑断片の可能性。前面剥落。
16	板碑94		67	36.5	8.5以上	頁岩	碑面ほとんど剥落だが「 <b>■</b> 珍禅尼」残存。
17	72	東斜面	46	29.5	2.5...(左側面)	粘板岩	頭部 <b>剥離加工</b> 。板碑の可能性。
18	73		42	39	11.5	頁岩?	斜面側広面は平坦。山側は剥落。加工なし。

138図



139図 D区最上段 a. b. c. d 小平場に立つ板碑(黄色番号)・板碑状の石(3D画像)



140図 D区 板碑状の石No.73展開図

は板碑破片の様相も示しているとともに、再配置が土留めの意味合いを持っていることをも示唆している。ただし、板碑96は周囲の平場状地形とともに造立当初の姿を反映している可能性がある。なお、東側斜面の73については平場状の地形は認められない。なお、66は67の背後に接しており139図では見えない。

(2) C区に立つ板碑状の石と板碑

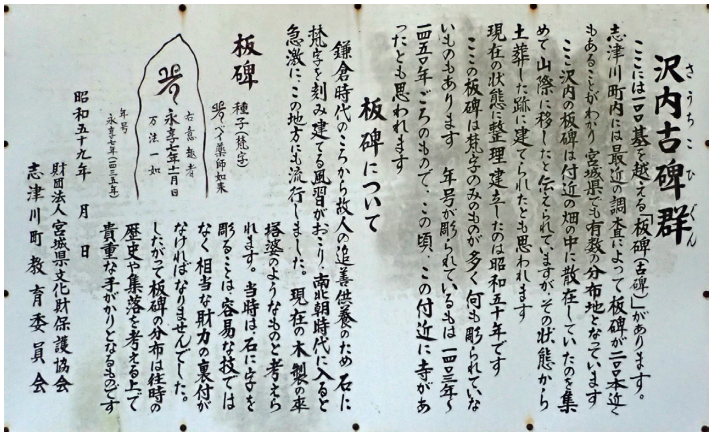
C区（斜面裾）には種子や銘文の確認できない板碑状の石が26基確認された。この内、8基は板碑列に混在して立っているものである。この内、141図にまとめたように板碑状の石全体番号1・10・16は頭部の加工が認められる。種子は剥落した可能性があるものである（種子を刻む前の可能性がないわけではない）。また、

番号	全体番号	地上高(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	石材	所見(太字は加工)
1	1	25.7	25.2	4.5	頁岩	前面平坦。 <b>頂部に剥離加工</b> 。埋没部に種子の可能性もある。
2	2	85	20.5	17.5	砂岩?	左に弯曲しているが前面は平坦面。頭部右側は欠損。
3	3	44.5	26	4	頁岩?	自然石だが前面のみ平坦。板碑用に選択された石。
4	7	63	23.5	9	砂岩?	自然石の上部左半欠損。前面は平坦面。左半剥落。
5	10	71	25	9	頁岩	左半破損。前面は平坦。 <b>頭部加工</b> 。
6	16	60	24	4.5	頁岩?	<b>頭部剥離加工</b> 。
7	25	80	27	5	粘板岩?	加工なし。前面・後面とも平坦。後面剥落多い。
8	85	30.5	36.6	8	頁岩?	上部破損。前面平坦。

141図 C区に立つ板碑状の石

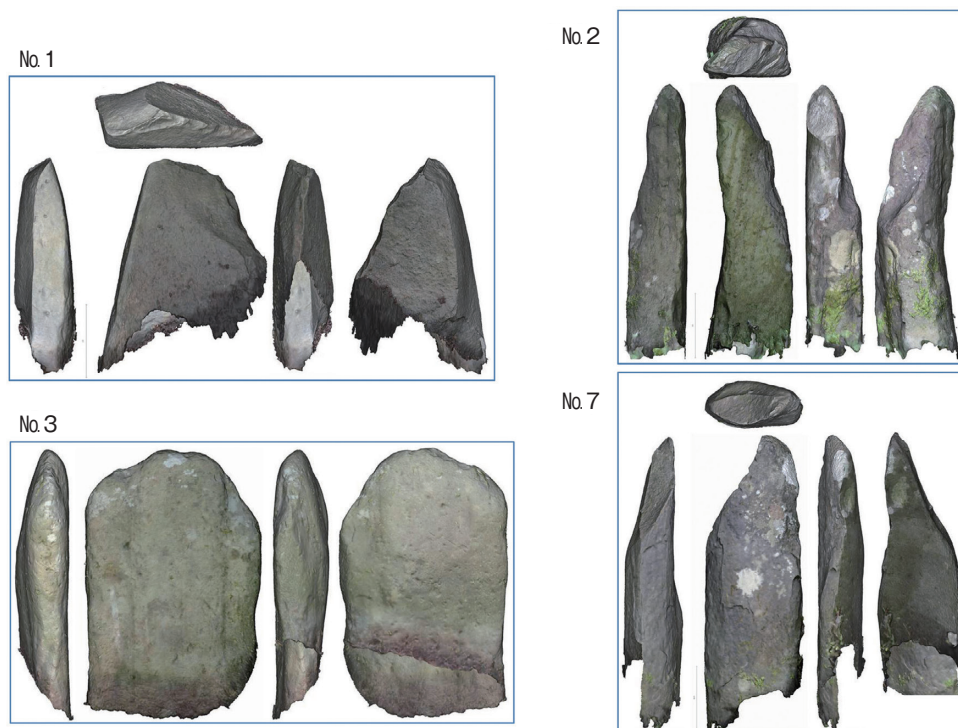


142図 板碑状の石No.86の確認状況

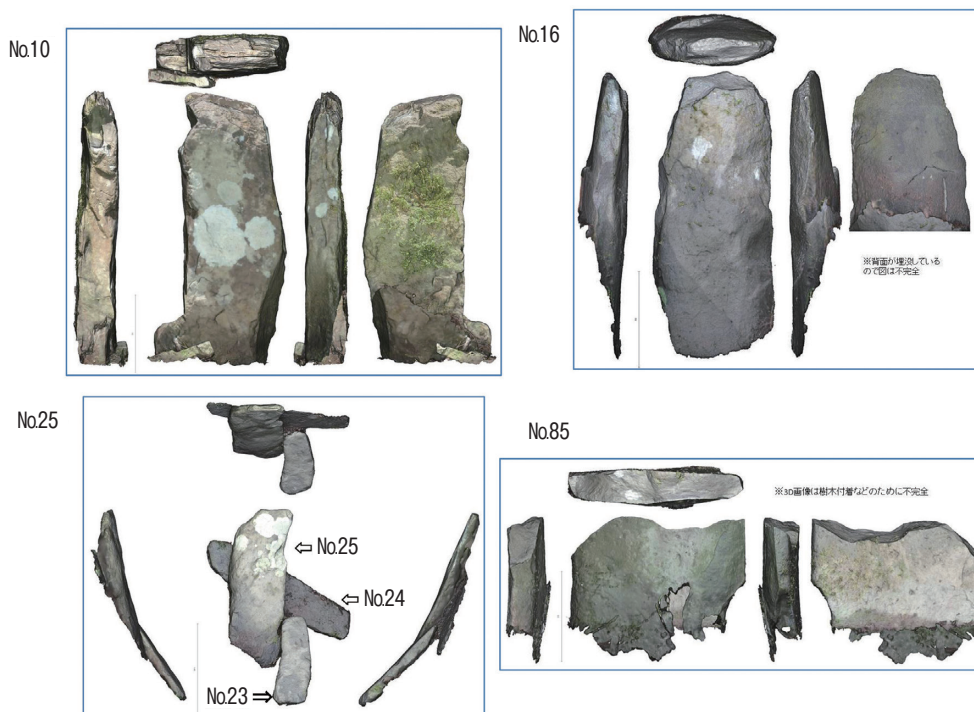


143図 「沢内古碑群」説明板





144図 C区 板碑状の石（立石）1



145図 C区 板碑状の石（立石）2

本板碑群の板碑では、加工の認められないものが相当数あることから、剥落の多い状況から板碑の可能性はある。No.3 は外観上は板碑38に近似している。

137図の四か所の小規模な「平場」（緩やかな斜面だが全体と比べて明らかに「平坦な場所」の意）に名残りを留めるように、本来はこの斜面にいくつもの小さな平場を作り、板碑が立てられていたもので、年月とともに多くが倒伏し、斜面下に落下し、土地所有者がA. B. C区に板碑を移動し立て並べたと考えられる。斜面であるD区の板碑群は原位置を反映しているものとして貴重である。特に斜面上部に立つ板碑群の多くは配置状況から、再配置や土留めに利用された可能性があるものの原位置に近いものと考えられる。横位の板碑状の石については裏返し確認の際、142図のように土と接する板碑の表面が剥離する傾向があった。また、全体としても井内石（宮城県石巻市稲井町井内で産出する粘板岩）に比較して剥落の傾向が顕著である。したがって板碑状の石と捉えた88基については大部分、板碑と認められるのではないかと考える。一部は板碑用の石材として持ち込まれたものを含む可能性があるが、地表に顕著な石屑の存在は認められない。

## 9 課題と予察（147図）

大きな課題は、沢内板碑群を歴史的位相にどう位置付けるかということである。15世紀前半期において、戒名が刻まれた板碑が21基と顕著であることが注目される。関東地方での「禅門・禅尼」銘板碑は14世紀初頭から増え始め、後半には急上昇して<sup>47</sup>、1400年を境として「禅門」「禅尼」銘板碑が主流となること<sup>48</sup>と概ね軌を一にすることは、県内の板碑でもほぼ同じであるものの地域史とどう関わるかという具体相の検討はこれからである。

本板碑群に近く、ほぼ同時期に戒名が板碑に集中的に刻まれる板碑群に十三浜の長塩谷板碑群<sup>49</sup>（石巻市）がある。追波川（北上川）河口を挟んで対岸の三陸南部沿岸最大の板碑群である

海蔵庵板碑群（鎌倉・南北朝・室町期159基<sup>50</sup>）とともに北上川と沿岸各地への流通の一大拠点に形成された板碑群である。長塩谷板碑群は南北朝期から室町期にわたる96基であり、戒名を刻む板碑は35基、このうち位号を持たない戒名の板碑も多く13基ある。これらは長面浦から河口付近に形成された港・流通拠点に関わる広い階層の人々が宗教的に把握された結果であることは明らかである。しかし、沢内板碑群は志津川湾から遠い谷合の奥に室町期に限って形成されている点が異なる。沢内から羽沢峠を越えれば葛西氏家臣の小城下町が想定されている日根牛<sup>51</sup>（登米市）に着く。ここが中世の北上川水運と志津川湾を結ぶ流通拠点であることは、南北朝期に結縁衆100人による板碑が立てられたことや小城下町地名が残ることでもわかる。とすれば、沢内は志津川湾から山越えて北上川に到る中継地の役割であろうか。付近の「大金山」（2図）など金山伝承地が室町期に遡るのであれば、その重要性は増すこととなる<sup>52</sup>。なお、以上の板碑群は紀年銘では15世紀半ばに一斉に終焉する。この追波湾から志津川湾一帯に共通する画期の解明は大きな課題である。

志津川湾一帯における戒名を刻む板碑の登場は延文4（1359）年、南三陸町戸倉波伝谷板碑群の一つに「右■■■為円■■■禅尼 孝子敬白」とあり、禅尼の位号が初めて登場する。この付近は、弘安6（1283）年銘の本吉郡最古の板碑が立てられた地であり。鎌倉後期の港が想定される地である<sup>53</sup>。「禅門」の位号が登場するのは、やや遅れて志津川中瀬町板碑群の応安3（1370）年銘「右志過去正智禅門之為三十三■■■之忌辰故也」の正智禅門の三十三回忌の板碑である。そして、大雄寺境内の二基の大型板碑の内、応安5（1372）年銘「■■■禅定門」銘板碑は一方の「平甲州廣蓮」銘板碑とともに地域領主の存在を示す重要な板碑であり、水尻川下流域の当時の河口に近い一帯に禅定門—禅尼の階層が見えてくる。そして戒名を刻む板碑が集中する沢内板碑群は15世紀初頭から形成が開始されるのであるが、鎌倉後期の志津川湾南岸の板碑群形成からからしだいに内陸に入り、北上川流域に到



112 南三陸町・沢内板碑群——室町期の大規模な十三仏石塔婆造立の場——

番号	西暦	年号月日(干支略)	所在	主尊など	偈	真言	願文(赤字は戒名含む銘文)	法量(高さ・幅・厚さ)	備考
1	1283	弘安6年7月25日	戸倉波伝谷	アク(天鼓雷音・不空成就)	なし	なし	右志者過去慈父靈雲往生極楽故也 孝子敬白	142.(地上高)30.25	本吉郡最古碑 掘り出し後、全長2.24m幅30cm厚さ30cm
2	1289	正応2年	戸倉波伝谷	不明	不明	不明	不明	137.28.14(掘り出し後)	弘安六年碑に並ぶ。銘文は年号のみ残存し、他部は剥落
3	1299	正安元年10月	戸倉波伝谷	アン(普賢)	なし	なし	右志者為過去□雲□	70.25.15	
4	1303	乾元2年7月廿日	志津川細浦	バク(釈迦)	諸行無常 是生滅法 性滅々己 寂滅為楽	なし	敬白	100.65.10	偈の出典は『涅槃經』
5	1316	正和5年12月廿八日	志津川細浦	キリーク(阿弥陀)	なし	なし	なし	不明	
6	1318	文保2年4月5日	志津川細浦	バク(釈迦)	なし	なし	なし	110.40.35	
7	1333	正慶武節5月19日	志津川細浦	バク(釈迦)	なし	なし	なし	90.60.18	
8	1344	康永3年2月	志津川細浦	キリーク(阿弥陀)	なし	なし	なし	80.50.20	
9	1345	康永4	戸倉寺浜	カーン(不動)	今此三界 皆是我有 其中衆生 悉是吾子	なし	志又	100.40.	偈の出典は『妙法蓮華經比喩品』
10	1345	康永4年	戸倉寺浜	バン(金・大日)	十方佛土中 唯一乘佛法 無二亦無三 除佛方便説	なし	志者乃□□當□□示□□孝子敬白	110.55.20	偈の出典は『妙法蓮華經方便品』
11	1347	貞和3年8月廿日	志津川新井田館	バン(金・大日)	今此三界 皆是我有 其中衆生 悉是吾子	なし	下部に「孝子ノ敬白」	60.30.10	偈の出典は『妙法蓮華經比喩品』2016.9再発見
12	1349	貞和5年11月廿1日	戸倉慈眼寺	サク(勢至)	なし	なし	右志者大悲母亡□□年辰故也 孝子敬白	100.40.9	波伝谷から移動 震災津波後不明
13	1350	貞和6年5月	戸倉寺浜	カ(地藏)	諸行無常 是生滅法 性滅々己 寂滅為楽	なし	なし	85.32.	偈の出典は『涅槃經』
14	1351	観応2年6月10日	戸倉若宮館	バン(金・大日)	十方三世仏 一切諸菩薩 八万諸聖教 皆是阿弥陀	なし	なし	110.25.8	「浄土経古徳の偈」「偈頌」(川勝政太郎)
15	1353	文和2年4月3日	志津川細浦	サク(勢至)	如来証□□ 永断於□□ □□至心□ 常得無量□	なし	一周忌	106.45.33	偈の出典は『涅槃經』の「如来証涅槃 永断於生死 若有至心聴 常得無量衆」主尊は十三仏の一周忌に対応。
16	1354	文和3年10月	戸倉寺浜	サク(勢至)	一念弥陀佛即滅(無量)罪 現受無比樂 後生(清浄土)	なし	施主 敬白	65.30.	出典は「観世音菩薩往生浄土本縁經」(『偈頌』(川勝政太郎))
17	1354	文和3年	戸倉波伝谷	カーン(不動)	なし	なし	孝子敬白	130.60.	
18	1355	文和4年6月	志津川細浦	キリーク(阿弥陀)	なし	なし	なし	105.50.25	
19	1355	文和4年10月日	戸倉上沢前	バン(金・大日)	なし	なし	為文?五了?十三 拜孝子敬白	85.30.10	十三回忌とすれば、十三仏の主尊と対応する。
20	1356	文和5	戸倉寺浜	バン(金・大日)	是法平等 無有高下	なし	なし	不明	偈の出典は『金剛般若經』
21	1358	延文3年	入谷堂の森	カ(地藏)	今此三界 皆是我有 其中衆生 悉是吾子」)	なし	なし	72.33.3	偈の出典は『妙法蓮華經』比喩品
22	1359	延文4年11月 日	戸倉神社	不明	なし	なし	右□□為円□禪尼 孝子敬白	130.25.22	
23	1360	延文5年3月日	戸倉波伝谷	マン(文殊)	なし	なし	志者	92.22.10	
24	1361	延文6年年	戸倉上沢前	アン(普賢)	なし	なし	右趣意□□	70.30.10	
25	1362	康安2年2月	戸倉慈眼寺	バク(釈迦)	なし	なし	なし	72.30.9	波伝谷から移動 震災津波後行方不明
26	1362	康安2年11月日	戸倉塩前寺跡	カ(地藏)	なし	なし	右志者慈父為?霊息辰也 孝子	71.46.8	
27	1363	康安3年正月	戸倉波伝谷	バク(釈迦)	なし	なし	右志趣?聖霊	68.19.12	
28	1363	貞治2年2月 日	戸倉神社	カ(地藏)	なし	なし	右志趣者悲母生雲三十五日之 乃至(法界平等利益)也	115.50.12	地藏は十三仏の35日の主尊に対応
29	1363	貞治2年6月 日	戸倉塩前寺跡	ウン(阿閼)+キリーク(上)・サ(右)・サク(左)(阿弥陀三尊)	有為法如夢幻泡影如露亦如電応作如是	なし	右造立塔婆者為 道公□當七年也		偈の出典は『金剛般若經』ウンの上にキリークを涅槃点を下に配して接合十三仏の七回忌主尊、阿閼如来に相当
30	1363	貞治2年2月3日	入谷信倉千人仏	キリーク(阿弥陀)	なし	光明真言	なし	175.80.33	惣供養塔の可能性
31	1365	貞治4年2月日	戸倉塩前寺跡	サク(勢至)	若人欲了知 三世一切仏 応觀法界性 一切唯心造	なし	右志趣為道性尼 一周忌辰故也 敬白	125.23.11	偈の出典は『華嚴經』 禪宗で重用される「幻住庵清規」付録「開甘露門」(1317年)の「破地獄偈」 勢至は十三仏の一周忌主尊
32	1369	応安2年2月 日	戸倉神社	キリーク(阿弥陀)	なし	なし	右志趣者為悲母雲□ 第三千□法界衆生也 敬白	93.28.15	
33	1370	応安3年?月廿日	志津川中瀬町	バン(金・大日)	諸行無常 是生滅法 性滅々己 寂滅為楽	なし	右志過去正智禪門之為三十三□之忌辰故也	12.50.20	震災津波で一部破損 出典は『涅槃經』
34	1371	応安4年?日	志津川大雄寺	バイ(薬師)	我此名号 一經其耳 衆病悉除 身心安楽	なし	右志者為平甲州廣蓮 七分全得現世安穏後生善処 敬白	180+(全長).70.14	震災津波で一部破損 偈の出典は『薬師經』
35	1372	応安第53月13日	志津川大雄寺	サク(勢至)	なし	なし	□□禪定門小祥□□造立塔婆□故也 伏願 右志者速證三明□依 分利有□故也 敬白	185(全長).71.11	震災津波で一部破損 小祥は一周忌であり、十三仏の勢至菩薩主尊に対応
36	1376	永和2年11月28日	戸倉寺浜	カ(地藏)	なし	なし	なし	64.46.10	
37	1377	永和3年6月 日	戸倉神社	カ(地藏)	なし	なし	敬白	123.45.22	
38	1378	永和4□10月25日	戸倉若宮館	不明	なし	なし	為□□敬白	100.30.14	
39	1381	永徳元年10月	戸倉波伝谷	カ(地藏)	なし	なし	なし	56.28.	
40	1382	永徳2年3月□日	戸倉長清水	バン(金・大日)		なし	右志趣意□戒□□ 為三十三界□□並万利也 敬白	133.50.10	下記と双碑か
41	1382	永徳2年3月□日	戸倉長清水	バク(釈迦)		なし	右□趣□□□□里□ 亦三十三界□□元之也 敬白	115.45.3	上記と双碑か
42	1383	永徳3年3月□日	戸倉長清水	(上部欠損)		なし	なし	50.40.5	
43	1383	永徳3年7月17日	戸倉大平館	カ(地藏)	なし	なし	敬白	100.23.15	
44	1383	永徳3年7月	志津川海門寺	カーン(不動)	一切□□ 皆徳安惣 □欲□海 □□恩□	なし	なし	不明	
45	1383	永徳3年7月	志津川細浦	カ(地藏)		なし	敬白	60.23.15	
46	1385	至徳2年2月10日	戸倉塩前寺跡	力等十仏(カ・バク・カーン・ユ・マン・サ・サク・アン・バイ・キリーク)	なし	なし	右志趣者峯秀庵主為法界平等利益故也	77.33.9	

番号	西暦	年号月日(干支略)	所在	主尊など	偈	真言	願文(赤字は戒名含む銘文)	法量(高さ・幅・厚さ)	備考
47	1385	至徳2 念7 月日	戸倉寺浜	キリーク(阿弥陀)	なし	なし	なし	70.3	
48	1385	至徳2 年8 月19日	志津川朝日館跡	イ(地藏)	なし	光明真言	菩薩戒弟子妙樹禪尼消取至徳二年八月十九日逆修善根造立一基石塔以莊嚴二世報地伏願交五障身即到无垢受一生記頓証菩提	90.57.15	
49	1386	至徳3年正月6日	戸倉波伝谷	バイ(業師)	なし	なし	なし	146.30.13	
50	1389	康広元年11乙巳	戸倉滝浜松林寺	パン(金・大日)	なし	なし	なし	110.45.	
51	1391	明德2年	志津川平磯館	ウン(阿闍)	なし	なし	右志者為慈母?十三年?往生	63. 15.10	
52	1393	明德4年3月廿4日	入谷公民館裏山	ウン(阿闍)	なし		右志者為慈母 十三年之往生極楽也	85.40.	
53	1393	明德(下方欠損)	戸倉神社	サク(勢至)	応无所住 而生其心	なし	右志?者?世妙?宗 乃至(法界平等) 利(益)	90.39.7	偈の出典は「金剛般若経」※1390-1393
54	1395	応永	志津川中瀬町	イ(地藏)		光明真言	信心禪門五七日之 右志者為 孝子 敬白 応永乙亥十月廿七日	148.60.12	五七日の十三仏信仰における本尊は、地藏菩薩であり、種子イは地藏菩薩
55	1395	応永2	戸倉寺浜	バイ(業師如来)	なし	なし	なし	75.20.15	
56	1397	応永4□	戸倉波伝谷	パン(金・大日)	なし	なし	志為意趣 三□二□□	65.36.	
57	1397	応永4 年2 月12日	戸倉神社	カン(不動)	なし	なし	敬白	138.39.20	
58	1397	応永4 年10月 日	戸倉神社	キリーク(阿弥陀)	今此三界 皆是我有 其中衆生 悉是吾子	なし	敬白	115.40.13	偈の出典は「妙法蓮華経」
59	1403	応永10年	戸倉寺浜	パン(金・大日)	応無所在 而生其心	なし	なし	30.30.	偈の出典は「金剛般若経」
60	1403	応永10年10月5日	入谷沢内	モウ?不空羂索?		なし	応永十年十月五日	65.31.7	
61	1404	応永11年8 月 日	戸倉寺浜	キリーク(阿弥陀)	是法平等 無有高下	なし	敬白	不明	偈の出典は「金剛般若経」
62	1404	応永11年2 月日	入谷沢内	ウン(阿闍)		なし	応永十一年二月日	59.29.8	
63	1404	応永11年10月23日	入谷沢内	カ(地藏)	一切善悪 都莫思量	なし	母大聖雲之應永十一年十月廿三日甲申 敬白	64.17.5	偈の出典は子叡「起信論疏筆削記」
64	1406	応永13年11月日	入谷水口沢館	カ(地藏)	□法 □宝	なし	不明	70.23.5	
65	1406	応永13年11月日	入谷公民館裏山	パン(金・大日)	生死事大 無常迅速	なし	なし	80.40.	偈の出典は「六祖壇経」
66	1406	応永13	戸倉寺浜	サ(観音)	是法平等 無有高下	なし	生實禪門	70.35	偈の出典は「金剛般若経」
67	1408	応永15年7 月	戸倉上沢前	イー(地藏)	なし	なし	□銀禪尼	60.20.10	
68	1409	応永11年2 月16	入谷沢内	バク(釈迦)		なし	應永十一年二月十六	65.35.11	
69	1413	応永20	戸倉寺浜	サ(観音)	而生其心	なし	なし	48.24.	偈の出典は「金剛般若経」
70	1415	応永廿2 年2 月	戸倉寺浜	バーンク(金・大日)	なし	なし	志者道□□為三十三回	63.36.	十三仏の33回忌主尊は虚空蔵菩薩
71	1416	応永廿3 年10月日	入谷沢内	キリーク(阿弥陀)		なし	応永廿三年 丙申 十月日	81.32.4	
72	1416	応永廿3 年2 月日	入谷沢内	ウン(阿闍)		なし	右志趣者応永廿三年二月日	92.21.9	
73	1417	応永廿4 年4 月日	入谷沢内	カ(地藏)	修此三昧者 現證佛菩提心	なし	右志者為過去聖雲 応永廿四年四月日 明泉禪門 孝子 敬白	63以上 .35.8	偈の出典は不空訳「金剛頂經一字頂輪王瑜伽一切時処念誦成仏儀軌」
74	1418	応永廿5 年11月日	入谷桜沢	カン(不動)	方法一如	なし	□□禪門		偈の出典は澄觀「大方廣佛華嚴經隨疏演義鈔」など
75	1419	応永廿6 年2 月	戸倉水戸辺	パン(金・大日)	なし	なし	右意趣及者□之故也 乃至法界平等利益弥也	61.11.5	
76	1420	応永27年8 月?日	志津川廻館	サク(勢至)	なし	なし	志趣者□		
77	1422	応永29年10月日	入谷沢内	サ(観音)		ア・バン・ボローン・ア・ウン	応永廿九年十月日	67.25.14	「ア・バン・ボローン」「ア・ウン」は胎藏界・金剛界・一字金輪、蘇悉地
78	1422	応永29年? 月日	入谷沢内	カ(地藏)		なし	応永廿九年十一月? 月日	58.21.9	
79	1432	永享4 年10月廿5日	戸倉上沢前	バーンク(金・大日)	なし	なし	右意趣者道智禪門十三年當相故建立	65.35.5	13回忌主尊は金剛界大日如来でパンだが、ここではバーンクの可能性
80	1435	永享7 年11月日	入谷沢内	バイ(業師)	方法一如	なし	永享七(年/十一月日 右志趣者)□□禪門	61.31.17	
81	1438	永享10年十月日	入谷沢内	サ(観音)		ア・ビ・ラ・ウン・ケン	永享十年十月日 妙善禪尼 敬白	46.19.6	
82	1442	嘉吉2 年10月28日	入谷沢内	アーク(胎・大日など)	無智人中 莫説之経	なし	嘉吉二年十月二十八日道金禪門 施主 敬白	84.28.7	偈の出典は鳩摩羅什訳「妙法蓮華経」では「無智人中莫説此経」
83	1444	嘉吉4 年	入谷沢内	カーン(不動)	方法一如	なし	嘉吉二年三月 道金禪門 敬白	53.34.6	
84	1451	宝徳3 年11月11日	入谷大船沢	カ(地藏)	造作五逆罪 常念地藏尊	なし	宝徳三年十一月十一日 妙善善人	77.28.7	偈の出典は平康頼「宝物集巻第3」
85	1452	宝徳4? 年10月17日	入谷沢内	バーンク(金・大日)		なし	宝徳二年 十月十七日 梵園禪門	88.32.17	従来は宝徳2 年とみるが「二」が小さい 南三陸町最新

(「歴史の標」1991の板碑一覧を補正・追加) 200926 偈の出典は加藤政久「石仏偈頌辞典」 国書刊行会 1990など 200927改訂

## 146図 南三陸町域紀年銘板碑表

る山の道の中継拠点への人の動きを示している可能性がある。

本板碑群の応永24(1417)年「明泉禪門」銘板碑は板碑に類例のない偈「修此三昧者 現證佛菩提心」を刻むが、これは空海の『即身成仏義』に登場する「修此三昧者 現證佛菩提」と

大乘仏教に通底する「菩提心」を結合したものである。この他の偈「一切善悪 都莫思量」、「是法平道 無有高下」、「万法一如」、「無智人中 莫説之経」、「応無所住 而生其心」はいずれも禅宗で重用されるものであるが、室町期であれば各宗で共有している可能性がある。そして偈



「万法一如」を含むこれらの偈の組合せは、当地から北方、田東山に通じ、麓の壇の上板碑群など板碑群、米山町域から一関市藤沢町黄海、長谷山などの北上川流域と親近性があり、志津川湾と北上川を結ぶ山の道の文化圏が見えてくる。また、北上川下流、石巻湾に及ぶ偈「是法平道 無有高下」「応無所住 而生其心」の広域使用域の示す「南三陸沿岸・北上川回廊」の広域文化圏も考えられる（147図）。

「禪門」「禪尼」との関わりから本地域の禪宗の教線について記す。文和5（1356）年に開始された戸倉寺浜板碑群の偈「応無所住 而生其心」、「是法平等 無有高下」（金剛般若經）を多用する禪宗系板碑群の形成には、在地の寺庵が関与していると考えている。戸倉折立の塩前寺跡に立てられた貞治2（1363）年「右造立塔婆者為道公（当）相七年也」の板碑は「有為法如夢幻泡影如露亦如電応作如是」（『金剛般若經』）の偈から禪宗の庵主「道公」の追善塔婆と考えられる。貞治4（1365）年銘板碑の偈「若人欲了知 三世一切仏 応観法界性 一切唯心造」（『華嚴經』）は、板碑としては類例を見い出していないが、恐らく禪宗の板碑である。ここには至徳2年（1385）銘、右志趣者岬秀庵主の板碑も存在し、付近に「岬秀庵」という庵があったと推定される。さらに同年銘の朝日館跡に立つ妙樹禪尼逆修板碑は「受一生記」など『瑩山清規』など禪宗清規の回向などに使われる用語を願文に引用している。寺浜、塩前寺跡、朝日館跡と続く禪宗系板碑は14世紀半ばから後葉にかけて臨済宗建長寺系、直接的には、松島円福寺派の教線を主とする教線によるものかと考えた<sup>54</sup>。

曹洞宗の教線については応永2（1395）年に鶴野館跡近

くの高台に創建された入谷の普門院（桜葉沢）が注目される。寺伝では越後「高雲寺」で修業した道入が開いたとされ、蔵王権現から巻物を授かったという伝承がある<sup>55</sup>。村上市の耕雲寺五世の瑚海仲珊（1390－1469）は応永年間に東安寺（名取市）、長祿2（1458）年に瑞雲寺（丸森町）を創建<sup>56</sup>しており、勧請開山と考えれば室町末期から戦国期に鶴野館主との関わりで開山した可能性はある。もう一つの入谷の曹洞宗寺院である龍門院（水口沢）は弘治元（1555）年に沢内板碑群の北西1.8kmの寺沢に大雄寺の末寺として創建されたとの伝承がある。大雄寺の創建は異説が多いが永正年間（1504－1520）説は比較的整合性がある。とすれば14世紀後半、南北朝期の臨済宗の教線の伸長、室町期の曹洞宗の教線の伸長の中で、在地の天台宗もしくは真言宗の寺院が禪宗寺院の戒名授与策の推進に連動したことは考えられる。なお、室町期において臨済宗は板碑造立策を保持していることは松島・雄島の板碑群においても確認さ



147図 室町期「万法一如」系偈のある板碑分布図

れる<sup>57</sup>が、曹洞宗は確認できていない。なお、位牌は前述のように仙台中田南遺跡での出土例から15世紀前半期の土豪層に普及していたことが知られる。

沢内板碑群は紀年銘では宝徳4（1352）年銘板碑をもって終了する。その後細々と無紀年銘の小型板碑の造立が進められた可能性はあるものの、僧の主導する石工など板碑造立体制の終焉は明らかである。同時期の大船沢板碑群も紀年銘では宝徳3年（1451）銘板碑をもって造営を終了する。志津川湾沿岸で唯一板碑造立が続いていた戸倉上沢前板碑群においても永享4（1432）年10月25日バーンク種子「右意趣者道智禪門十三年當相故建立」の紀年銘を最後としている。そればかりか戸倉半島を南下した追波湾の大規模板碑群の造営も終了するのは前述の通りである。一方、15世紀後半期には、気仙沼市本吉町津谷では、臨済宗寺院の主導とみられる小型板碑群も確認され、16世紀には「万法一如 皆是大日」の偈を持つ板碑は栗駒町や一関市にまで達している。地域による供養方法の選択や集団の移動、地域支配者の動向、寺院宗派の動向など解明すべき課題は多い。

## 終りに

室町期の15世紀前半期を中心として、志津川湾域西部最奥の谷合いの斜面に十三仏信仰に基づく石塔婆を造立して故人を供養し、自らも現世・来世の幸せを願った。それは「戒名」を授けられた10数人の男女を中心とした集団であり、土豪に率いられた名主たちとその家族から成る一時的集落の存在であったのではないか。寺庵の僧の差配の元、下の河原などから選出された石材を仏塔形に整形し、忌日ごとに、種子や銘文を刻んで造立する体制ができており、推定200基に及ぶ板碑群が残された。中には偈、願文など具備したランクの高い板碑でありながら、その彫法などの稚拙さから自分たちで製作したような板碑も相当数ある。それはこの集団が岩石の扱いに慣れていなかったからではないだろうかと思いがふくらむ。

それから500年余の歳月の中で、その板碑群が歴代の地主さんはじめ多数の人々の努力により保存されてきたことに感動を覚えざるを得ない。しかしながら、今や、板碑の剥落、劣化は著しい。皆さまのご協力のもと、懸案であった現況調査と記録を残し得たことに感謝したい。

この8年間、東日本大震災津波からの復興に励む三陸南部沿岸の人々の温かいご協力をいただきながら、南三陸の豊饒なる歴史文化遺産にめぐり逢い感動の日々を過ごした。津波からかろうじて残った板碑が「復興関連工事」で次々と消滅、行方不明となる実態も観て来た。ほとんどの中世古文書・記録が消失した地域における石造文化遺産の重要性、保護、活用を関係機関および一般の方々に働きかけていきたい。

## 注

- 1 佐藤正助『志津川物語』N S K 地方出版 1985  
志津川町教育委員会『志津川町史Ⅲ 歴史の標』1999
- 2 田中則和「三陸町域における板碑・城館跡の概要」『宮城考古学 第19号』宮城県考古学会 2017
- 3 田中則和『南三陸の山城と石塔—東日本大震災後の調査でわかったこと』河北新報社出版センター 2018
- 4 南三陸ふるさと研究会「南三陸町の産金遺跡」『南三陸ふるさと研究誌 第1号』2008
- 5 3D画像はMetashape（スタンダード版 Agisoft 社）を用い、Cloud Compare（フリーソフト）でスケールを付加した。種子・銘文の図についてはMetashape段階の図で歪みは修正されていない。
- 6 SAT大正新脩大藏經テキストデータベース
- 7 田中則和「妙樹禪尼の逆修「石塔」造立—南北朝南三陸の時空（序論）」『六軒丁中世史研究 17』東北学院大学中世史研究会 2019
- 8 伊藤良久「中世曹洞宗禪語録に見る禪僧と檀越—師檀関係から寺檀関係へ—」『印度學佛教學研究 56』日本印度学仏教学会 2008
- 9 勝倉元吉郎『桃生・山内首藤氏と板碑』桃生町教育委員会 1999
- 10 北上町史編さん委員会編『北上町史資料編』北上町 2005
- 11 勝倉元吉郎『桃生・山内首藤氏と板碑』桃生町



- 教育委員会 1999
- 12 青木恭充「十三仏並びにその他年回忌等種子、真言」『十三仏の世界』ノンブル社 2012
- 13 山路天酬編『改訂新版 回忌法要次第』青山社 2009
- 14 清水邦彦『『地藏十王経』考』印度學佛教學研究 51(1) 日本印度学仏教学会 2002
- 15 渡辺章悟『追善供養の仏様 十三仏信仰』溪水社 1989
- 16 小峰智行『梵字字典』東京堂出版 2018  
田中真吾『「ㄣ」と「ㄤ」について（阿賀北板碑考続論）』私家版 1992
- 17 青木恭充「十三仏並びにその他年回忌等種子、真言」『十三仏の世界』ノンブル社 2012
- 18 田中則和「妙樹禪尼の逆修「石塔」造立」『六軒丁中世史研究17』東北学院大学中世史研究会 2019
- 19 田中則和「「霊場」における板碑造立—松島」『季刊考古学 第147号』雄山閣 2019
- 20 「SAT大正新脩大藏經テキストデータベース」、加藤政久『石仏偈頌辞典』国書刊行会 1990
- 21 「SAT大正新脩大藏經テキストデータベース」
- 22 「SAT大正新脩大藏經テキストデータベース」、加藤政久『石仏偈頌辞典』国書刊行会 1990
- 23 加藤政久『石仏偈頌辞典』国書刊行会 1990
- 24 「SAT大正新脩大藏經テキストデータベース」、加藤政久『石仏偈頌辞典』国書刊行会 1990  
田中則和「南三陸町壇の上板碑群：室町期の「万法一如」偈板碑」『東北学院大学東北文化研究所紀要49』東北学院大学東北文化研究所 2017
- 25 「SAT大正新脩大藏經テキストデータベース」、加藤政久『石仏偈頌辞典』国書刊行会 1990
- 26 「SAT大正新脩大藏經テキストデータベース」
- 27 東 隆眞『洞谷開山瑩山和尚之法語 示二妙淨禪師一』攷(二)(3), A1-A20 1996
- 28 加藤政久『石仏偈頌辞典』国書刊行会 1990  
菅原康子『中田町の板碑』中田町教育委員会 2004
- 29 中田町編さん委員会『中田町史 改訂版』2005
- 30 木村一郎『米山町史余話』1987
- 31 佐藤正人他『青森県史 中世編 資料4』青森県史編さん中世部会 2016
- 32 田中則和「南三陸町壇の上板碑群—室町期の「万法一如」偈板碑」『東北学院大学東北文化研究所紀要49』東北学院大学東北文化研究所 2017
- 33 大塚伸夫「即身成仏義」の構成について：とくに二經一論八箇の証文を中心に」『小峰彌彦先生小山典勇先生 古稀記念論文集 転法輪の歩み』智山学報／智山学報編集委員会編 2016
- 34 東和町郷土史研究会『東和町のいしぶみ』東和町教育委員会 2005
- 35 石田瑞磨『例文 仏教語大辞典』小学館 1994
- 36 田中則和「南三陸町壇の上板碑群：室町期の「万法一如」偈板碑」『東北学院大学東北文化研究所紀要49』東北学院大学東北文化研究所 2017
- 37 勝倉元吉郎他『北上川下流域のいしぶみ』宮城県桃生郡河北地区教育委員会 1994
- 38 田中則和「南三陸町壇の上板碑群—室町期の「万法一如」偈板碑」『東北学院大学東北文化研究所紀要49』東北学院大学東北文化研究所 2017
- 39 佐藤正助『志津川物語』NSK地方出版 1985
- 40 宮城県沿岸部における板碑に関わる禅宗と密教の様相については田中則和「「霊場」における板碑造立—松島」『季刊考古学 第147号』雄山閣 2019
- 41 田中則和『女川町・松葉板碑群の現況と予察』『東北学院大学論集 歴史と文化 57号』2018
- 42 野口達郎氏、畠山篤雄氏教示
- 43 田中則和「妙樹禪尼の逆修「石塔」造立」『六軒丁中世史研究17』東北学院大学中世史研究会 2019
- 44 『中田南遺跡』仙台市教育委員会 1995
- 45 千々和到『板碑とその時代』平凡社 1988 で庚申待板碑の月が11. 10. 2月に多いことが指摘されている。
- 46 磯野治司「個人名板碑の紀年をめぐる一試論」『考古学論究 第9号』立正大学考古学会 2003
- 47 水藤真『中世の葬送・墓制』吉川弘文館 1991  
の禪門・禪尼などに関わるグラフ
- 48 千々和到『板碑とその時代』平凡社 1988
- 49 勝倉元吉郎他『北上川下流域のいしぶみ』宮城県桃生郡河北地区教育委員会 1994
- 50 宮城県教育委員会他『海蔵庵板碑群』1999
- 51 「日根牛村」『宮城県の地名』平凡社 1987
- 52 南三陸町HPでは「金山衆」居住地説を紹介している。魅力的な説であるが検討課題としたい。
- 53 田中則和『南三陸の山城と石塔—東日本大震災後の調査でわかったこと』河北新報出版センター 2018
- 54 田中則和「妙樹禪尼の逆修「石塔」造立」『六軒丁中世史研究17』東北学院大学中世史研究会 2019
- 55 『入谷物語』入谷郷土史研究会 1980
- 56 佐々久『宮城県仏教史』1977
- 57 田中則和「「霊場」における板碑造立—松島」『季刊考古学 第147号』雄山閣 2019